

活動報告集

—文化芸術による復興推進に向けて—

はじめに

我が国に大きな被害をもたらした東日本大震災から2年が経過しました。

ここに掲載しているレポートは、被災地において活動している文化芸術団体や個人などから寄せられた報告で、当コンソーシアムのウェブサイトに掲載したものを冊子にしたものです。まとめるにあたっては、5つのグループ「研究者・学識者からの報告」「市民・市民団体による活動報告」「アーティスト・文化芸術団体による活動報告」「有形無形文化財・伝統芸能に関する報告」「行政機関・文化施設等の活動についての報告」にジャンルを分けて掲載しております。

復興推進活動を理解する上で、皆様の参考となれば幸いです。

平成25年3月

— 目 次 —

研究者・学識者からの報告

災間の時代に生きる —「3. 11」とは何だったのか〈是永幹夫〉	1
「音楽の力」による復興の取り組み〈酒井健太郎・赤木舞〉	4
2年目の“トモダチ作戦 with Music” ～コーディネーターにあたって～〈砂田和道〉	7
試される文化芸術のチカラ〈志賀野桂一〉	10
忘れない 文化芸術が紡ぐ絆を信じ〈渡辺一雄〉	27

市民・市民団体による活動報告

震災後2年目をむかえて 福島市における子どもをとりまく状況〈川村啓子〉	36
宮古地域の文化芸術活動の状況〈澤内逸陽〉	38
南相馬市での活動報告〈西道典〉	41
心の宝を増やし、復興へ ～子どもたちへの文化芸術支援〈藤村友樹子〉	44
「花咲かせプロジェクト」 子どもはそのまま未来である。〈柳弘紀〉	47

アーティスト・文化芸術団体等による活動報告

文化芸術による復興に向け ～コンソーシアム復興推進員（全国組織）レポート～〈大井優子〉	51
大道芸人達の被災地交流〈金井圭介〉	56
復興支援と演劇〈佐藤耕〉	58
震災から2年。 東北のこどもたちと出会う中で。〈多田純也〉	60
JASRACの復興支援活動の概要について 〈一般社団法人日本音楽著作権協会〉	62
魂のコミュニケーションとしてのジャグリング〈望月ゆうさく〉	64
大道芸を被災地へと届ける〈ハードパンチャーしんのすけ〉	67
人の数だけ、「被災」はある〈横山真〉	69

有形無形文化財・伝統芸能に関する報告

福島県における被災状況と民俗芸能の再興〈懸田弘訓〉	72
被災地における郷土芸能の現状とこれから — 無形文化遺産としての郷土芸能の立ち位置 — 〈小岩秀太郎〉	75
地域でのささやかなる心の復興支援 — 滋賀県での取り組み — 〈柴田英杞〉	79
「無形」の民俗文化財を調査することからみえてくること 〈高倉浩樹〉	81
被災地から学ぶ民俗芸能の文化力と公立文化施設の役割を考察 〈中坪功雄〉	84
支援格差を乗り越える — 岩手県沿岸部の民俗芸能に関する現状と課題 — 〈橋本裕之〉	88

行政機関・文化施設等の活動についての報告

ミュージアムの被災から復旧、 再開のプロセスが映し出す新たな仕組み 〈坂口大洋〉	91
文化芸術からの復興 〈桜井俊幸〉	98
震災からの復興に、自然と歴史と文化を 〈佐々木健〉	102
東日本大震災で被災した博物館の復興に対する 日本博物館協会の取り組みについて（報告）〈半田昌之〉	106
震災後の公立文化施設・文化政策の行方を探る 〈水戸雅彦〉	109
被災施設の復旧改修から考える 〈本杉省三〉	113

災間の時代に生きる —「3.11」とは何だったのか

「ホルトホール大分」統括責任者

(株)わらび座 相談役

是永幹夫

無念さと悔しさ

2011年3月9日、私は作家の高橋克彦さんたちと岩手県庁記者クラブでミュージカル「アテルイ」第二次公演の記者会見をおこなっていた。そのさなかにおこった震度5弱の地震。その2日後の11日、東京での仕事で東京駅地階にいたときに東日本大震災に遭遇した。刻々と飛び込んでくる被災地の映像に身もすくむ思いで見入った。幾度も訪問した三陸の大船渡も宮古も石巻も大津波にのみ込まれていた。これは現実なのだろうか、信じられない光景が次々と目に飛び込んできた。悔しさと無念さと怒りが込み上げてきた。たざわこ芸術村・わらび座の本社に電話しても通じない。大船渡に営業で入っていたスタッフの安否が心配だった。本人と連絡がとれたのは4日目だった。

支援の行動

たざわこ芸術村・わらび座本社は3日間の停電だったが、4日目からわらび劇場公演を再開。わらび座が半世紀以上お世話になってきた岩手県三陸の民俗芸能保存会の人たちはどうされているのだろうか。岩手県の友人からの情報や岩手日報の報道を毎日食い入るように調べた。わらび座も二次被災に遭遇したが、被災地支援と被災者受入れを早々に決め、被災地の教育委員会やNPO法人と連絡を取り合って被災地支援の訪問地や時期を具体化した。大震災一ヵ月後、まだ仮設住宅がなく避難所生活のときに、被災地の小学校や中学校が続々とたざわこ芸術村での体験旅行で訪ねてきた。一ヵ月ぶりにお風呂（たざわこ芸術村の温泉大浴場）に入れた子どもたちの歓喜の声を聞いて大粒の涙を流す先生たち。札幌の中学校の修学旅行がいつせいにキャンセルになるなか、逆に私たちを励ましてくれた。

俳優たちは一日でも早く支援したいとの気持ちだったが、まず被災地現地との調整を丁寧におこなったうえで各チームが続々と出かけた。報告会や東日本大震災復興支援ニュース発行を毎月おこなった。

文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」を秋田県仙北市は全国で唯一三ヵ年継続採択され、「3.11」のあと、被災地の民俗芸能をお招きして演舞と講話とワークショップを重ねてきた。福島県いわき市久ノ浜の「じゃんがら念仏踊り」、岩手県三陸町の「虎舞」、宮城県石巻市の「雄勝法印神楽」など、被災で大変ななか駆けつけてくださり、被災後の保存会の復興に向けての取り組み、被災地のコミュニティを維持するうえで、いかに民俗芸能が大きな力を発揮はしているかを、切実に語っていただいた。昨年1月には、たざわこ芸術村で、山折哲雄先生と赤坂憲雄先生の特別対談「民俗芸能は日本を救い、日本の未来を創る力」を開催した。民俗芸能の持つ底力が今回ほど発揮されたことは戦後史のなかでもなかったのではないだろうか。民俗芸能の全国的な見直しと再評価をも引き出していると思う。



虎舞

記録と記憶

私は当時 NHK 東北地方放送番組審議会の委員だった。被災地をかかえたブロックの仙台局で開催される番組審議会は、毎回緊張感にあふれ、「記録と記憶」の観点からNHKあげて東日本大震災を報道する姿勢を後押しした。直接の損壊の打撃を受けた委員も含め委員全員、被災地の番組審議会の委員としての使命感で具体的提言を果敢におこなった。福島の幼稚園園長の委員は涙ながらに原発事故災害下での子どもたちのことを発言した。仙台局での番組審議会の体験をいまも大事にしている。

私たちが毎月真剣な討論をした主眼は、理不尽さへの怒りをベースに、地域の自立を守る視点、地域から考える視点の大事さだった。自然との共生をもっとも色濃く持っている東北の大地の魅力を再認識すること、東京からの視点ではなく、東北からの視点で、この国の未来、私たちの未来を考えていくことの重要さだった。NHKはその視点から重層的にたくさんの番組を制作し発信した。風化させないための「記録と記憶」。NHKの役割は大きい。

九州の地から

今年7月20日開館のふるさと大分市の複合文化交流施設「ホルトホール大分」の開館準備に5年半前から関わっている。わらび座を満期定年で昨年4月に帰郷して感じたことは、九州と東北の「温度差」だった。東日本大震災は遠く離れたところの出来ごとだという意識は強い。そのさなかにおこった昨年夏の大分県内の集中豪雨災害。被災地の状況は人ごとではなかった。

東日本大震災の直後、「災後」という言葉が使われていたが、いまや「災間」の時代と言われている。災害と災害の間の時代、南海トラフに近い九州も人ごとではない。昨年、大分市の友人たちが主催した「仙台フィル」支援公演での楽員たちの熱演を心深く刻み込んだ聴衆の想い、大分県が誇る庄内神楽の一座が宮城県の神楽保存会を中・長期に支援する交流をスタートさせ、気仙沼市の信用金庫を臼杵市の信用金庫が招待して災害復興支援の取り組みを始めたり、大分県内でもさまざまな復興支援の取り組みが息長く続けてられている。

日本人のDNAとして古来からある相互扶助の「民俗知」を蘇らせ、自分たちの出来るところからの中・長期の復興支援がますます求められている。相互の持続的交流は、被災地の復興支援のみでなく、支援する側のコミュニティのあり方にも資することだと思う。

国民文化祭・あきた2014

2014年秋の紅葉のシーズンに、秋田県で開催される「国民文化祭」は、東日本大震災後に東北で初めて開催される「国民文化祭」となる。県内全市町村で一ヵ月間開催されるが、「東北の文化の底力」を示す絶好の機会となる。同時に東北圏域に色濃くある創造性を示す場として、「発見×創造 もうひとつの秋田」をテーマに開催される。現代舞踊の創始者・石井漠、舞踏の創始者・土方巽を生み出し、近世には秋田蘭画を花咲かせた秋田県での開催は、食文化や手わざの魅力も含めて、東北の文化的魅力を全国に発信する場となる。被災地からの芸能団体招聘や交流企画で、「元気な東北」を伝えたい。

劇団わらび座は今年秋田定着60周年となる。「東北の宝」として、ここまで支えていただいた秋田・東北の精神的風土に感謝したい。私は国民文化祭の基本構想委員会と企画委員会に関わってきたが、全国各地からたくさんの方々に来ていただき、東北の魅力を体感していただき、被災地の復興ぶりも、現地を訪ねて自分の目で見てほしい。



国民文化祭・あきた2014のロゴマーク

東北農民管弦楽団

東北農民管弦楽団が今年スタートした。1995年から果敢な活動をしている北海道農民管弦楽団が宮沢賢治没後80周年の今年、花巻市で東北農民管弦楽団発足支援のコンサートを1月に開催した。北海道農民管弦楽団は、宮沢賢治が『農民芸術概論綱要』で述べた理想にもとづき、彼が果たしえなかった農民オーケストラを現代に蘇らせる試みだ。NHKの「おはよう日本」でも報道され、大きな話題となっているが、宮沢賢治の意思を継ぐ東北農民管弦楽団の展開を応援したい。宮沢賢治も銀河鉄道に乗って聴きに来るだろう。

82歳の富田勲氏の新作交響曲「イーハトーヴ交響曲」もたくさんの人びとに深い感銘を与えている。壮大なる東北の大地の響き、つよさとやさしさ…。「雨ニモ負ケズ」を合唱曲にしてほしいという親戚の西澤潤一氏との約束を実現した富田勲氏の背中を押したのは東日本大震災との遭遇だった。

だれもが「3. 11」の「記憶と記録」を自分の立場から考え実践していく、個々人のこの持続的作業の積み重ねがいつかきっと大きな花を咲かせる時が来ることを信じて、九州の地から私自身の「記録と記憶」をもとに一步一步あるいていきたい。

「3. 11」とは何だったのか。以前と以後ではどう変わったのか。私たちの暮らし方、社会のあり方を根底から突きつけられて、もう丸2年が経とうとしている。この2年間のあゆみのなかで、私たちはどこまでより良き道を創れたのだろうか。「災間の時代」、このことから逃れようもない。子どもたちの未来のために、私たち一人ひとりが新しい生き方を求められている。

「文化芸術による復興支援コンソーシアム」の存在は十分に知られていない。既存の復興支援のさまざまなネットワークとのシンクロナイズを大胆におこなっていただき、「記録と記憶」のネットワークを国民的レベルで交わしあえるようになれば、どんなに良いだろうか。手間ひまかければ実現可能なことがたくさんある。一人ひとりが一歩ずつ手間ひまかければ出来ることがたくさんある。

「文化芸術による復興支援コンソーシアム」からの呼びかけを待っている人たちは多い。「こちら、復興支援コンソーシアム、あなたの知恵と力をぜひ！」

——若い人たちの参加を期待したい。



「音楽の力」による復興の取り組み

昭和音楽大学 酒井健太郎・赤木舞

一般財団法人音楽の力による復興センター・東北（以下「復興センター」）と公益財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団（以下「仙台フィル」）は、震災直後から被災した方々に音楽を届ける取り組みを続けている。復興センターの代表理事と仙台フィルの参与を務める大澤隆夫氏へのインタビュー（2013年2月実施）をもとに、音楽の力を活用した復興の状況をレポートし、今後の課題について検討する。

復興コンサートの開催と復興センターの設立

2011年3月26日、仙台フィルは震災後初めてのコンサートを開いた。会場は仙台駅からほど近い見瑞寺の境内にあるバレエスタジオで、1時間ほどのプログラムであった。演奏メンバーは団員約30名で、指揮（佐藤寿一氏）とソプラノ独唱（菅英三子氏）は地元出身の音楽家が担当した。これが、その後270回以上おこなわれ、これからも続けられる復興コンサートの最初である。

震災発生から約2週間が経過したこのころ、いわゆる自粛ムードが拡がりつつあった。音楽業界も例外ではなかったが、そうした状況下で仙台フィルが復興コンサートを実施できたのは、仙台フィル自身が被災者であり、被災した人々と同じ目線の高さに立ち、被災した地域が何を必要としているか理解できる立場にあったからである。

被災した人々の前で演奏することが本当に必要とされているのか、不安がなかったわけではない。実際に楽器と楽譜を携えて避難所を訪れても、必ずしも歓迎されるわけではなかった。しかし演奏を始めると、段ボールの陰には音楽に耳を傾ける人がいることが感じられた。震災以降こわばったままだった表情が、演奏を聴いてようやく和らいだという人もいた。被災者に寄り添い、折れそうな心を支える力が音楽にはある…この確信が被災した地域に音楽を届ける活動の根本にある。

音楽を被災した地域に届けるためには、被災地へのアクセス手段、演奏スペース、世話してくださる人手などを確保し、現地のニーズを把握しなければならない。またニーズにマッチする音楽家の協力を得なければならない。こうした現場では、コーディネート、マネジメントを担う人材が必要である。そのためにはもちろん資金も必要である。そこで情報収集、人材の確保、資金集めなどのコーディネートとマネジメントのための組織として「音楽の力による復興センター」が立ち上げられ、仙台フィルのホームページに同センターの設立の案内と協力の呼びかけが掲載された（2011年3月28日付）。

大きな余震が続く中、仙台フィルと復興センターは被災地に音楽を届ける活動に取り組む。4～5月には1か月半近くに及ぶマラソンコンサート、4月中旬からは避難所や学校での訪問演奏を開始し、当初は定期公演が予定されていた日程に会場を常盤木学園シュトラウス・



第1回復興コンサート（撮影：佐々木隆二）



陸前高田市立米崎小学校での演奏（撮影：佐々木隆二）

ホールに移して「復興定期」（4、5、6月）、を開催した。全国から仙台フィルに招聘の声が届き、金沢、東京、新潟、大宮、大田区でのコンサートに出演。そして7月には本拠地仙台市青年文化センターでの定期演奏会の再開にこぎつけた。

復興センターの一般財団法人化とその事業

被災地に音楽を届ける活動を支えてきた復興センターは、仙台フィルの理事会の賛同も得て、2012年9月に「一般財団法人音楽の力による復興センター・東北」に改組された。センターの一般財団法人化を知らせるパンフレット「一般財団法人音楽の力による復興センター・東北を設立しました。」には、同センターの事業が5つあげられている。それらは、(1) 復興コンサートの開催、(2) モデルコンサートの開発事業、(3) コーディネイト事業、(4) クラシックに優れた特性を持つホールの建設に向けて、(5) 資金の受け入れや基金の造成で、各事業の詳細は以下のとおりである。

(1) 復興コンサートは震災発生以後、仙台フィルと復興センターが中心になって継続してきたもので、先述の通りすでに270回のコンサートが開かれてきた。被災した人々の心に寄り添う活動のいわば原点となるもので、今後も続けられる。

(2) は「宮城県新しい公共支援事業」のひとつとして採択されたもので、音楽を復興に効果的に活用するモデルの開発をめざすものである。ここまでの復興センターの取り組みそのものが、ひとつのモデルケースとして捉えられようように思われる。

(3) は、第一に被災した地域を音楽で応援したいという国内外の音楽家たちと被災した地域との橋渡しする役目、第二に被災した地域の音楽に対するニーズを汲み取り、音楽活動を通じて復興を支援する役割である。例えば、2012年に始まり以後5年間にわたって継続されることになったウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーによる被災地域への訪問演奏・ワークショップなど（「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興基金」による）は、現地コーディネートを復興センターが担っている。また現在、震災の影響で統廃合される小中学校の校歌を、プロのオーケストラの演奏でCDにして残す取り組みが、公益財団法人日本オーケストラ連盟と加盟のオーケストラによって進められている。これは石巻市の市民団体のアイデアがもとになった取り組みで、実現するにあたっては、復興センターも協力している。

(4) は楽都仙台にクラシック音楽ホールの建設の機運を高めようというもの。平成24年1月9日に開かれたシンポジウム「音楽の力に本拠地を——新たな楽都の建設に向けて」（於：仙台市青少年文化センター、登壇者：堺屋太一、近藤誠一、藤村順一、大滝精一各氏）では、仙台を「楽都」さらには「カルチャー・キャピタル」にするための拠点として、音楽に適したホールが必要であると述べられた。こうしたホールは復興のシンボルにもなりうるだろう。もちろん建物が最終目的であってはならず、その次には中身（コンテンツ、ソフト）が課題になる。

(5) には、今後の継続的な事業実施に必要な資金を確保するために会員制度を設けることや、音楽ホール建設の基金を造成するなどの計画がある。

一般財団法人化を機に復興センターは、被災した人々に音楽を継続的に届けること、被災地を応援する人々と被災地を繋ぐこと、さらに、仙台の復興における音楽の力を活用することにおいて、人材と資金の集積と中継の機能を果たすというミッションをより明確にしたと言えるだろう。

コーディネート、マネジメントの人材の必要性

被災した人々に音楽を届けたいという思いをもつ音楽家は多い。その思いをより効果的に実現するためには、現地で実際に活動するためのマネジメントの諸作業に加えて、現地でどのような音楽が求められているかといった情報の収集が不可欠である。被災地域は広範囲にわたるため、こうしたことを音楽家自身が担うことは困難である。そこで求められるのが現地でコーディネートする人材である。ウィーン・フィルのメンバーが東北地方を訪れて演奏し、現地の人々と音楽を共有したことに勇気づけられた人は少なくあるまい。これが実現し

たのは、ウィーン・フィルのメンバーの思いと、それに共感する多くの関係者の尽力があったからである。

また、先述した、統廃合される学校の校歌のCD化のプロジェクトのように、被災した人々から音楽の力を活用するアイデアが生まれることもある。実際に統廃合される学校の所在地域で生活した人々ならではの発案である。こうしたアイデアを実現するためには、発案者のほかに演奏家、出資者など多くの人の連携が不可欠である。関係者間の調整に熟達した人材（さしあたり地元の文化施設やアート NPO のスタッフなどが考えられよう）が求められる。

活動資金の面で行政や企業などの支援を受けることがある。多くの場合、そのためにはその必要性や手段を万人が理解できるかたち、たとえば書類として表現することが求められる。復興や応援についての思いやその実現方法を、過不足なく書類に落とし込まなければならないのである。支援を受けることになれば、今度はそれを適切に使い、正しく決算しなければならない。こうしたマネジメント業務はある意味で特殊な技能やノウハウを要することであって、音楽家・演奏家に求めるのは難しいことがある。よりスムーズな実施のためには慣れた人材の協力を得ることが望ましい。

受け入れ地域で生活する人々が何を求めているか知ること、受け入れ先、音楽家、その他関係者の意思を調整すること、外部から資金的援助を受けて適切に使用すること…被災した人々や地域の復興に音楽の力を活用するためのアイデアの実現にはこうしたことが必要とされるが、これらを担うマネジメント人材は十分ではない。育成が急務である。

経験の蓄積

東日本大震災では、音楽あるいは芸術・文化が心の傷を癒すことや復興を応援するにあたり大きな力を与えてくれることが明らかになった。とりわけ音楽は聴き手に寄り添う形で届けられた瞬間に最大限の力を発揮すると考えられる。今回のような大きな災害は今後も発生する可能性がある。したがって、災害復興におけるアートマネジメント活動のネットワーク構築に向けた準備をしておかなければならない。それにおいては今回の経験を活かすべきである。

東日本大震災で被災した地域は広く、それぞれの地域での音楽や芸術・文化の活動においてマネジメントを経験した人や組織は多いだろう。活動規模に大小はあるかもしれないが、個々には小さな経験であっても、それらがもたらす教訓はけっして小さくないはずである。聞き取り調査などによってそうした経験を集積し、関連する資料を収集すべきである。経験や記録を整理・分析することによって、災害復興時のアートマネジメント、さらには広くアートマネジメント一般の在り方を考える上で参考にすべき知見が得られ、今後のアートマネジメント人材の育成に活かすことができるだろう。記憶が薄れ記録が散逸してしまう前に取り組まなければならない。

*筆者らは2011年7月にも大澤氏のお話を伺った。この時のレポートは、日本音楽芸術マネジメント学会発行『音楽芸術マネジメント』第3号（2011年9月）に掲載されているので、併せてご参照いただければ幸甚である。

2年目の“トモダチ作戦with Music”

～コーディネートにあたって～

相愛大学音楽学部
音楽マネジメント学科
准教授 砂田和道

大震災から2年目の3月11日の翌日、宮古市の学童クラブから、可愛いアクセサリが10個、茶封筒で送られてきた。一つ一つ包装され、メッセージも添えられていた。もちろん、封を開ける前からそれが何を意味するのか、感じ取ることはできた。それに子ども達が先生と一緒に、カーペットの上に座りながらアクセサリを作り、そして長机でメッセージを書いている姿が目に見えてくる。「ああ、また様子を見に行かなければ」と日頃から焦っている、なんとも言えない焦りと気がかりが、いつものように私の奥底から沸々と湧き出てきた。

2年目のトモダチ作戦 with Music は昨年11月と本年3月に行われた。11月は三陸の大槌、山田、宮古。3月は福島県のいわき市である。つまり1年目に訪ねた地を、再び訪れたのだ。まるで七夕のような状況。これで良いのだろうか自問自答を繰り返し、常に自身や制度、そして脆弱なアートNPOの状況に、忸怩たる念を抱く1年間だった。1年前、本誌に寄稿した拙稿では、改善、確立しなければならないポイントを、明確に記している。それなのに当方の活動は、現地に拠点を張らず、東京やアメリカからの人材を訪問させているに過ぎない。本当は東北の人材で完結できるのが望ましいのであろうに、これでは有効な財源活用とは言えないと強く感じる。そんな2年目で気がついたことを、トモダチ作戦 with Music でのこと、そして文化芸術の領域における、アーティストとマネジメントに関する特徴的な傾向を、一般論としてここに記してみたい。

トモダチ作戦

トモダチ作戦 with Music を始めた経緯は、アメリカ大使館との話しの中で、文化版による支援活動の必要性を協議したからである。なぜなら、NPO ぐらしに音楽プロジェクトは、2007年より大使館の助成で“Arts in Education”と、その担い手である“Teaching Artist”の概念と手法を、国内で紹介しているからだ。その内容は「音楽ワークショップで子どもの思考力、創造力、そして多様な価値観を引き出す方法論」と「音楽家にその理念と手法を移植すること」であった。だから、トモダチ作戦文化版の起案において、その活動目標は「子ども達の日常的教育環境を取り戻すため、音楽による教育支援を日米官民の協働で行い、子ども達に目標を与え、創意工夫ある人材育成に寄与すること」としていた。

1年目の活動では、支援活動特有の感じとは違い、音楽家達が普段と変わらない雰囲気、ワークショップを子どもや地域の方に行った。それが却って良かったらしい。そして訪問先の子ども達は、日米の音楽家、あるいはアメリカの子ども達と、絵や手紙によるコミュニケーションへと、発展し継続している。だから2年目の活動では、子ども達は再会を待っていたし、地域の方のさらなる参加へと繋がった。大槌町の幼稚園では夕刻、地域の方や中高生を招き、公開リハーサルを行った。その狙いはリハーサルを通じて、表現創造をする音楽家の共同作業、意見交換を垣間見て頂くこと、そして可能なら参加者とディスカッションをしたいと考えていたのだ。企画段階では、参加者からの意見は少ないだろうとのことであった。ところがその夜、予想を翻し地域の方から、どんどん意見、注文が相次ぎ、地域の方たちの「内なるエネルギー」を感じる熱を帯びた一夜になった。そうして、参加した方たちの考えを反映させた音楽で、翌日の活動が行われたのである。

二年目の状況変化

2年目ということもあり、訪問先の方たちは活動内容を安心して待っていた。そして前述のように、ただ活動を受け入れるだけでなく、現地の意見を私達に伝えながら、活動に参加された。しかし、教育現場では1年目と大きな違いがあった。もちろん、それは当然のことであるが、学校教育は再興されつつあり、授業を遂行することに全力を傾けていた。つまり1年目は、諸状況による学校の混迷で、授業実施が厳しく、そういった状況のため、外部からの活動を受け入れやすい状態であったのかも知れない。おそらく2012年3月までは、学校や教育委員会の思考はそうであった。しかし、年度を超え4月になると状況は変わった。だから平時と同じように、新年度になってから訪問活動を申し出た場合、それは授業等の計画変更を伴うことになり、却って教育現場に迷惑を掛けることのように思えた。

それから報道の記者からの質問に、1年目と違う質問があった。それは「今後も当地で活動を継続するのですね」といった内容であり、どの地でも言葉強く尋ねられた。

意識の違い

私達は一体、なぜ被災地で活動を行っているのだろうか？その活動は誰のためだろうか？実のところ、このような自問自答は、最初から付きまとっている。芸術活動とは、私的財的要素の強い活動であり、自己目的化されている。つまり、自己満足のために、表現活動を行っている側面が非常に強いわけである。その様なアーティストの資質には、本当に社会化された姿として、「奉仕の精神」が存在しているのだろうか？また、被災地の個々の現場では、本当に現地の方に寄り添う、オリジナルの活動展開を行っているのだろうか？そんな疑問を、常に感じている。だから、誰の満足のために行うか、よく踏まえた上での展開と、そうではない場合では、質的に大きな違いがあると言える。

大震災後の5月頃から、一部のアーティストは被災地に入るようになった。しかし、それは市民活動団体や会社員たちより遅い動きであった。多くのアーティスト達は、夏頃から活動を始めたが、なぜ、多くのアーティストは肉体的奉仕を選ばず、本来活動としての表現活動で、現地に向かったのだろうか？多くの音楽家から、こんな声をよく聞いた。「自分たちは演奏でしか貢献できない」「現地に行ったら東京の仕事のチャンスを失う」「現地に行くお金がない」「自分たちは所詮、日雇い労働者だ」。これらはあまりにも稚拙な発想ではなかろうか。日頃、私の研究テーマは「社会から必要とされるアーティストの在り方」であり、“Artist as Citizen”を模索している。もちろん、アーティスト根性も熟知しており、音楽家（アーティスト）側の思考と、その形成過程も理解できる。被災地支援活動において、ボランティア休暇を得て活動を行える人たちも居るであろう。しかし、月給を得られる団体に所属しているアーティストは少ない。また、アーティストは手弁当で現地活動をする者、あるいは高額な対価を得て現地訪問をする者といったように、多種に分かれている。一体、被災地での活動は「奉仕活動」だろうか？それとも「事業」なのだろうか？それとも「広報活動」なのだろうか？おそらく様々な背景、思惑が、当該活動には存在している。そんな諸状況が混在し、区分けすることを難しくしている実態も、被災地での活動の特徴である。昨今、「復興ビジネス」という言葉をよく耳にする。さらには歪な実態を聞くようになった。芸術は人の心を表すものである。本来、純粋なものであり、アーティストの純粋な側面に期待したいところである。そして、被災された方たちの置かれた状況を鑑みると、私達は芸術の本質である純粋さを大切に、現地の方に寄り添いながら、創造性を共有し、未来に繋げたいと思う。そんな意識を携えれば、“誰のための芸術活動か”ハッキリ見えてくるであろう。

3年目に向けて

新年早々、1月4日の午前、私は大槌町教育委員会から電話を受けた。それは、「来年度もトモダチ作戦with Musicはあるのでしょうか？」「もしあるのなら、ただ支援を受け入れるのではなく、ただ聴くのではなく、『トモダチ作戦』の『始まり』など、トモダチ作戦 with Music の事前事後に授業で取り上げ、計画的に行ってい

きたい」「吉里吉里中学校に行って貰えませんか？米軍のヘリコプターは吉里吉里中のグラウンドに降りてきました。吉里吉里の人たちは米軍に感謝しています。その気持ちを大切に残したい」というお話でした。私は直ぐに資金調達の重責を感じたが、それを上回る気持ちとして、今こそ“Arts in Education”の役割を果たす段階だと強く感じたのである。そして、「助成金の決定は新年度になってからですが、でも、それでは授業計画が立ちませんね。見切り発車で進めましょう」と応えたのだった。

一度始めた活動の責任は重い。継続と現地負担を抑えながら、でも、現地と共に協働し、そして自立に繋がればと感じるが、それを創出していくのは未知のことである。活動継続のみならず、諸活動の運営が少しでも容易になる制度整備の必要性を感じる。また、奉仕活動、復興事業などの概念整理も必要であろう。被災地と共に、文化芸術の領域が成長、あるいは成熟していくことを切に願う次第である。

最後に、現地との協議では、常に負担を相手に与えたくないと感じている。だから、教育現場に新年度になってから活動を打診することは、本意に沿っていない。学校にも教育委員会にも、そのような負い目を感じている。山田町の小学校でのこと、テレビ局の取材があった。カメラマンでもある記者に、私はこの負い目のことを話した。すると現地で戦士のように活動をしている記者からは、「煩雑で大変な作業をするのは事務方の仕事です。それより現地の人たちの、こんな喜んでいる様子を見て下さい」という言葉を頂いた。私は救われる思いを持った。

■参考

トモダチ作戦 with Music の助成団体（平成24年度）：

アメリカ大使館、三菱商事復興支援財団、ステート・ストリート財団

取材：

岩手朝日テレビ、テレビ岩手、NHK福島、福島テレビ、福島放送、福島民報社、福島民友新聞社、いわき民報社

試される文化芸術のチカラ

東北文化学園大学総合政策学部教授

東北大学特任教授(客員)

志賀野桂一

1. バリ島ヌガラのジェゴグから

珍しい Jegog ジェゴグが聴けるというのでバリ島クタ近郊にある KEMANGI クマンギというレストランシアターにいきました。この竹で作った打楽器のオーケストラはまるで音の砲弾が飛び出す武器のようです。別名竹のガムランとも言われています。

バリ島西部ヌガラの伝統芸能として伝わった巨大竹筒打楽器です。最大の竹は長さ3m、直径18cm、肉厚2cmほどもあります。4つの音階で1チームが14台で構成されるアンサンブル演奏で、二つの異なるグループが舞台上に並び演奏を競い合う、合戦形式の演奏が特徴です。相手の伴奏につられたりしないようにしながら、体力の続く限り昼夜を問わず続けられるためバリヒンドゥー教3つの神様の中のシバ神が宿しているともいわれます。音楽の格闘技といわれる所以です。

しかし、オランダがバリ島を植民地としていた当時、ジェゴグに使われる竹筒を武器にされることを恐れたオランダ軍はジェゴグを禁止してしまいます。近年スアールアグンのリーダー、スウェントラ氏によって復活し、ジェゴグの音が再現されています。

このグループは、震災日本の復興を願って今年、東京をはじめ仙台、新潟などで公演を行ったので、ご覧になった方も多いと思います。びっくりすることに団長は大阪弁まで話す日本通です。

ジェゴグの伝わる『ヌガラ』とはサンスクリット語の「町」という意味ですが、文化人類学者のC・ギアツ(Clifford Geertz,1926-)が『ヌガラ』とは文明を表す言葉で、高い文化を中心に政治権威と一体となった都市と述べています。「小王国」といった言葉に近いようです。ちなみにこの反対語は『デサ』だそうです。

東北に伝わる数々の伝統的郷土芸能も、こうしたアジアの芸能と通じ合える要素が見られます。民衆と、その地の習俗・宗教が一体となって生まれ、集落の紐帯となってきたと思われれます。今後も東北目線で報告していきます。

*【スアールアグン芸術楽団】

ジェゴグを復興させたスウェントラ氏が率いるジェゴグ演奏団。フランス・ワールドカップの開会式や、毎年日本公演を行い、鼓童、坂本龍一、東儀秀樹など各界のアーティストとも競演する。卓越した演奏テクニックと氏の人柄が作りだした、「バリ島の伝統芸能＝神々への捧げもの＝神々と一緒に楽しむもの」を指針として、観客もジェゴグを体で体験できる演奏を実現している。



楽器ジェゴグ：クマンギレストランにて撮影志賀野



ジェゴグ演奏団スアールアグンを率いる団長のスウェントラ氏(左)

2. ARC>T (アルクト) の活動から

先日、演劇系の震災支援組織ARC>Tの事務局を訪ねました。ARC>Tは、震災後いち早く、仙台を中心に活動する演劇関係者が大同団結し「自分たちにできることが何かあるのではないのか」という思いで立ち上げたネットワーク組織です。私も設立当初のころ会議に参加してその熱い思いを感じたものでした。事務局の置かれている仙台東部に位置する「せんだい演劇工房10-BOX」で日々奮闘している鈴木拓さんのお話を聞くことができました。一年半が過ぎた今活動はどのように進化しているのか？あるいは新たな課題は生じているのか聞いてみました。



いまは、被災地の施設からの要望に基づき「タイ民話のハイブリット紙芝居」、「歌って踊る花いちもんめ」、「結婚披露宴」、「なつかしい遊びと劇ごっこ」という4つのプロジェクトが動いています。その中の一つ「タイ民話のハイブリット紙芝居」のプログラムはこんな流れで進みます。

前半：タイ芸能ショー（30分）

1. フォンダープ舞踊（古武術を基にした刀の舞い）
2. タイの楽器紹介と演奏体験（モン、チャープ等を使用した演奏）
3. フォンジュン体操（タイの伝統武踏をもとにした体操）
4. グロンサバチャイ（太鼓の演舞）

後半：タイ民話（「サルの子ぎも」）の演劇（30分）

施設側の職員との緊密な打ち合わせなどによって、日々改良がくわえられています。

一年半経過したいま子供の施設（保育園など）要望は増え面的にも広がりを見せ、高齢者施設や福祉系施設との関係も深まり継続が求められているといます。順風な動きにも見えますが、今後の方向は？となると悩みは大きいことがみえてきました。

施設側との丁寧なコンタクトと事前準備など手間暇をかけ信頼関係を築いてきていますが、継続するには資金や体制が不十分ということです。

鈴木さんが考えるこの組織の選択肢は3つあるといます。①継続性を図るための法人化、②解散する、③ネットワーク組織として残す、この3つということです。年間事業規模も3000万円を超え、認知度も上がり、ますます施設からは期待されるプロジェクトに成長した半面、勢いだけで継続することが困難な局面を迎えています。震災後生まれた多くの支援団体も共通の課題を抱えているのではないのでしょうか。打開策を共有したいですね。

最後に「こうした活動は震災で始めたものですが、アートによる震災復興なのか、もともと必要とされた社会活動なのか、近頃わからなくなります。」という鈴木さんの胸に来る言葉がありました。

*写真左上：事務局で活躍する鈴木拓さん、右：10-BOXにある事務所、(撮影志賀野)、写真下：「タイ民話のハイブリット紙芝居」の様子、(提供：ARC>T)

3. 神楽 雄勝法印神楽の再開に立ち会いました。

雄勝町（おがつちょう）は、宮城県北東部の太平洋に面していて、2005年4月1日、市町村合併により石巻市の一部となりました。今回修復された東京駅のスレート瓦や雄勝硯の産地として有名な半島のまちです。風光明媚な半島にも津波が襲いました。

私が行ってきたのは、白銀神社例祭奉祝祭の桑浜で従来旧暦の3月19・20日に開催されていたものが羽板憩いの家前で5月に復活再開された神楽です。

雄勝の法印神楽は、出羽三山、羽黒山の修験山伏たちが一子相伝で伝えてきた神楽で、600年の歴史を刻む芸能のひとつです。日本の宗教政策の上で、明治政府が神仏分離と修験道廃止を打ち出したため法印たちが集落の人々に伝承したものが今日まで伝わってきたのです。現在は15の浜それぞれに神楽が伝承され、1952年に雄勝、大浜、大須の神楽団が雄勝法印神楽保存会に再編、96年に国の重要無形民俗文化財に指定されます。

当日は、9時に祈祷、その後湯立て神事、神楽奉納と続き、神楽28番の中から、天地創造の舞「初矢」に始まり、「蛭児」、「笹結」、「魔王退治」最後は「産屋（うぶや）」、「岩戸開き」など一日がかりで奉納が行われます。今回は神輿のかわりに神様象徴として金の獅子頭を正面において演じられていました。集落の人々は、神様の後ろあるいは脇から見るという形であくまでも神事なのです。

応援にかけつけた女優の竹下景子と一緒に、私も土地の海産物などごちそうになりましたが、長い奉納芸の間に飲んだり食ったり談笑したりというのがどうやら神楽を観る作法のようです。またご祝儀で運営がされていることから、素早くご祝儀を渡すことがもう一つの作法となっています。垂れ下がる紙（写真：上）には寄付者の名前がその場で書かれ張られています。

舞は日本誕生の物語と、邪気を祓い子孫の安寧を祈る内容にみえます。芸態論でいえば、反閨（へんぱい）といった除災を目的とした呪法が基になった足の運びと中腰の構えが特徴で、常に上昇を目指すバレエの「パ」とは対極にある所作となっています。演目のなかには真剣が使われるなど、迫真の舞とそのスピード感には圧倒されます。

思えば東北には神楽・虎舞・念仏踊り・剣舞・鹿踊りなど地域の生活と一体となった芸能が数多く存在し、コミュニティの中核となってきました。震災復興はこうした常在文化の復活と共にあるというのが私の実感です。



4. 十和田 「境界線を生きる」～まちづくりと美術館

通り全体をひとつの美術館に見立て、官庁街通りという屋外空間を舞台に、多様なアート作品を展開していくコンセプトのもとに2008年度に十和田市現代美術館が開館しました。十和田市を個性あふれる『アートの街』『感動創造都市』として印象づけることを目指し、美術館向かい側の税務署跡地や通りの各所にも作品が配置され2010年春に完成しています。

十和田市は、かつて馬産地として栄えたといいますが、現在は人口6万5千人のまちで商店街もシャッター通りといわれるほど寂れています。何度か訪問していますが、日曜日にもかかわらず人通りはほとんどありません。唯一例外的に美術館の周りには若い人を含め多くの人出がみられます。この美術館に寄せるまちの期待は大きいことがわかります。

「まちの活性化とアート」というテーマを与えられたときまさにアートの力が試されているまちと思います。こうした中で商店街の店主の方々の「ただ者ではない」存在には驚かされます。上の写真は松本茶舗店のご主人と奥さんです。栗林 隆さんの「地下室に日本列島を再現する」作品が企画展のため設置されていたことも



(写真) 栗林 隆 WATER >< WASSER (栗林隆は一貫して人間と自然の関係性を表現の主題とし、「境界」をテーマに作品を展開しています。)

物が分散して配置され、それらがガラスの廊下でつながっていることで、屋内展示室と屋外アート空間が交互に混ざり合っている点です。アート作品と都市が有機的に混ざり合っているといえます。美術館と美術館に見立てられた通りの境界をあいまいにする狙いのようにも見えます。



(写真) 十和田市官庁街通り

ありますが、栗林さんのこうした、やや難解な作品の意図を見事に解説してくれるばかりでなく、こうしたまち中に作品がおかれる意味や、トマソン（赤瀬川）を例示しながら、まちなかの様々な物件がアートと見立てることなど美術評論家並みの説明でした。

十和田市現代美術館はまた「新しい体験を提供する開かれた施設」として、22の恒久設置のアート作品の展示のほか、文化芸術活動の支援や交流を促進する拠点と考えられており、商店街の空き店舗や実際に使っている店舗に作品を設置する企画展が行われ、ボランティアのまちなか作品解説ツアーなどが常に用意されています。

設計の西沢立衛によるこの美術館の特色は、個々の展示室を、「アートのための家」として独立し、敷地内に建

栗林の各品も「境界」をテーマに行われましたが、東日本大震災を経て、私たちの自然に対する考え方が一変したいま、アート作品を通して人間の根源的な感性や環境に対する深い思いをあらたにします。

副館長の藤浩志は、「アートの価値のありようは、その時代が何を求め、どこに向かって集権型の社会システムから脱皮し、ネットワークを前提とした循環型社会への転換が求められる現在、地域に求められる価値のあり方も随分と変化しています。」と述べていますが「地域に求められる価値のあり方」はまさに松本茶舗店の店主のような方々の行動にあるのではないかと、名物のB級グルメ〈バラ焼き〉を食べながら考えたのでした。

(写真撮影：志賀野 桂一)

5. 二つの芝居小屋

近世江戸の演劇の伝統を継承する芝居小屋が全国には新旧合わせて約30館程度存在しているといわれています。こうした中で常打ち小屋として活発に催事が行われ、まちの活性化にも寄与している館は極めて少ないのが現状です。今回は北と南の代表的な芝居小屋を紹介してみたいと思います。

それは秋田県の小坂町康楽館と、熊本県山鹿市の八千代座ですが、奇しくも2館とも明治43年に開館し、現在では2館とも国の重要文化財の指定を受けています。

能楽堂は、幕府の庇護のもとに武家の式楽として発達した能楽とともに、今日でも公共施設の整備対象とされているに対し、多くの芝居小屋は放置され解体されるというという憂き目にあってきました。庶民の演劇場として親しまれた数多くの芝居小屋ですが、時代とともに映画やTVなど娯楽が変化・多様化する中でその存続が困難となり、全国数少ないのが芝居小屋の現状です。しかしこうした中であって戦災にも遭遇することなく、奇跡的にも残存してきた芝居小屋の代表格がこの2館です。地元商店会や、民間の有志の活動などで再生、改修されることで、往時の輝きを取り戻し、市や町の重要な観光資源として脚光を浴びています。地方都市の人口減少や商店街の衰退が続く中、まちの再生や活性化の起爆剤として芝居小屋の価値が見直されているのです。



(写真左：擬洋風建築の「康楽館」、写真右：康楽館内部607席)

● 鉾山町の生きた記念碑としての康楽館

小坂町の康楽館は、鉾山従業員の慰安施設として外観が洋風で、内部が江戸風（和風）という和様折衷の建築で1年半をかけて完成したといわれている。鉾山事務所の建物とともに日露戦争が終わったばかりの鉾山町の隆盛を象徴する芝居小屋であったと思われます。

柿落しは大阪歌舞伎の尾上松鶴一座による「寿式三番叟（ことぶきさんばそう）」に始まり「仮名手本忠臣蔵」などの当り狂言が行われたという。歌舞伎芝居だけではなく文学講演会、演劇など様々な文化的催事が行われました。一時期、劇場は戦時下で外国人労働者の収容施設に転用され、昭和に入ってから老朽化で昭和45年に興業が中止されるなど幾多の変遷を経て昭和60年に再び劇場として蘇っています。この間中村富十郎、中村雀右衛門、市川団十郎（12代）などかつての名優が公演を行われています。昭和61年から平成17年まで、常設公演が大衆演劇の伊東元春によって実に20年間（1日3回）ギネス級の1万回を超える舞台が続けられました。その間私も何度か訪れましたが、いつも同じように座長芝居が鑑賞できたものでした。現在、常打ち公演は、松井誠の『下町かぶき組』に引き継がれています。

● まちづくりを牽引する「八千代座」

熊本県山鹿市は小坂町の10倍の人口規模ですが芝居小屋の機構はよく似ています。間口約6間、奥行約6間の舞台に廻り舞台、迫りを持ち、花道にはすっぽんがあります。客席は平土間の桝席とそれを取り囲む1.2階の棧敷席、全て畳敷きの床座です。こうした江戸時代の芝居小屋の形式を色濃く残すと共に、きらびやかな天井広告群、客席中央上部に設置されたシャンデリア等、建設され最盛期を過ぎた明治大正の「ハイカラ」な雰囲気伝える劇場です。

その歴史は、明治43年に温泉地であり交通の要所として栄えていた山鹿のまちの人々が組合を組織し、資金を出し合って建設した芝居小屋です。全盛期は、大正から昭和初期でした。戦後八千代座もその頃映画館へと改造され、その後映画の衰退と共に八千代座も休止状態となります。屋根の破損がひどく、大量の雨漏りによって建物は痛み、朽ち果てるのを待つばかりといった姿であったといいます。撤去し再開発をという声に対して、老人会の「瓦一枚運動」という、雨漏りを直すための募金活動をきっかけに若者達も触発され復興に動き出します。加えてまちの人々が、地道な清掃活動、演劇興行・講演会・ジャズコンサート等の公演活動を積み重ね、昭和63年に国の重要文化財の指定を受けることとなります。さらに坂東玉三郎の公演により、八千代座は全国的にその存在を知られるようになりました。

平成8年から、重要文化財としての調査と、修理の為に「平成の大修理」と呼ばれる解体修理に入ります。その工事は、「活きた芝居小屋」として活用することを前提として行われます。建設当初の姿に戻すという重要文化財の大原則を前提としながら、活用に耐えられる構造補強と、大胆で繊細な活用設備（照明、音響、バリアフリー等）の整備が行われています。5年近い工事期間を終え、平成13年6月に再開されました。

内装は2館とも同じような風情ですが、よく見ると成り立ちや仕様の違いが分かります。まちの人々がつくり再生復興した八千代座であることの証は、天井や欄間の広告の装飾でわかります。また最近山鹿市の話題として「さくら湯」という寛永7年（372年前）に起源をもつ江戸の風情そのままの浴場が再生されました。八千代座の

再生復興が先行事例となって、近代再開発とは異なる山鹿市のまちづくりの方向を指し示したと思える事例です。

人口減少時代の地方都市の生き残り競争の中で、小さな都市は近代化の反省から一時代を遡る文化戦略で活路を見出そうとしている。こうした小坂町や山鹿市の考えは古くて新しいまちづくりの指針のひとつを提示しているように私には感じられたのでした。

6. 震災記録を物語に！



写真左：柴山明寛准教授、写真右：東北大学「みちのく震録伝」の事務局。

東北大学災害科学国際研究所〔所長：平川新、副所長：今村文彦〕のもとで「みちのく震録伝」というプロジェクトが動いています。東日本大震災に関する記憶・記録・事例・知見など幅広く情報を収集してアーカイブする活動です。その若手の中心研究者が柴山明寛准教授（写真上）です。被災各地の情報を集め集積していくチーム（写真下）が生まれ働いています。被災者からインタビューで集めた証言を口述記録（オーラル・ヒストリー）し、800編という膨大な記録として集積されています。

今後の災害に生かすためのアーカイブですが、これを多くの人に知ってほしいと、2013年の3月に向けて新たな計画が進行中です。「朗読と音楽の夕べ」というイベント形式によって伝える計画です。

そのための作業は、まず記録された膨大な口述記録を読み込むことから始まります。これらの証言の中には、喜・怒・哀・楽、無数の詩や物語、さらに音楽までもが織り込まれているのです、しかし、形式がありません。料理に例えれば素材そのものです。こうした証言集に新たな光を当てるため、文化芸術の視点で、潜在する詩や物語を抽出・再編（プリコラージュ*）していく。出来上がった何篇かの詩や物語をライブ公演として音楽に乗せて朗読する。公演後も語り部などを養成し、できれば各地域でライブ活動を行う、といった野心的な計画なのです。プロの語り手の表現行為と音楽ライブの形で聴衆に届けられることで、参加者の胸に深く刻まれ、共感の輪がより広がっていくのではないかと考えたからです。

たとえば瓦礫という問題があります。その量や処理方法が社会問題化していますが、証言では全く別の視点が提示されています。証言の断片を紹介すると「ガレキはただのゴミじゃない。〇〇さんが生きていた証だよね」、「ガレキがなくなって寂しいっていう気持ちもあるの」、「ガレキの中から見つかった記念の時計」、「モノ達の悲鳴が聞こえた気がした」とあります。いわば工学的な視点はデータを読み取ることにありますが、文化芸術的な視点は人間の心の揺らぎに焦点を当てているともいえます。この操作によって物語（ヒストリー）抽出し作品に仕立てていく作業と言い換えてもよいかもしれません。もちろん生の記録は記録として貴重でありますので、しっかり残していく作業は今後も続くのですが、膨大な記録ゆえにどれを、どのようにひもどくのか多くの人にとっては至難なことです。それをこうした方法によって広く人々に触れていただくことができれば意味があるのではあるいは別な価値（文化芸術）も生まれるのではないかと期待もあります。

このプロジェクトは、来年の3月1日の東北大学・川内萩ホールで行うライブ公演（無料）として計画されている事業で、ボランティアに集まった実行委員会が進めています。

記録を物語に！そして舞台作品に仕上げるには相応の才能が得られなければ成立しないし、魅力あるライブ



公演には様々な力が必要になります。幸い、語り手に女優の竹下景子さん、音楽には元仙台フィルの首席チェリスト原田哲男氏が協力してくれることになっています。まさに文化芸術のチカラ試されるイベントとなりそうです。(©写真撮影：志賀野)

*ブリコラージュ：ブリコラージュ (Bricolage) は、「寄せ集めて自分で作る」「ものを自分で修繕する」こと。「器用仕事」とも訳される。元来はフランス語で、「繕う」「ごまかす」を意味するフランス語の動詞「bricoler」に由来する。ブリコラージュは、理論や設計図に基づいて物を作る「エンジニアリング」とは対照的なもので、その場で手に入るものを寄せ集め、それらを部品として何が作れるか試行錯誤しながら、最終的に新しい物を作ることである。(ウィキペディアより)

写真左：記録収集のエリアと担当者

7. ミューズの夢+ハッピードール

「音楽バスで出かけよう！」という企画に参画しました。この催事は、10年にわたる障害を持つ子供たちにお音楽を通して成長を見守る「NPO法人ミューズの夢」が主催した10周年記念コンサートです。今回は特にハッピードールという国際的な運動と結びつき、音楽バスというモチーフと重ね合わされ「みんなで出発！夢旅行」という小さいけれどもすてきな音楽劇が完成しました。

●NPO 法人ミューズの夢

そもそも NPO 法人ミューズの夢は、障害を抱える子どもたちや大人に芸術（音楽やアート）に触れ「心の成長」を促す趣旨で、平成14年に設立されました。主宰の仁科篤子さんは、「もともと音楽教室を開き、そこに障害を持つ子供が偶然入会してきたことが出発点で、コミュニケーションをとることが苦手な彼らが、音楽の力で友達と一緒に演奏で心を合わせ、自信が出てくる様子や、その笑顔から生きがいと優しさを教えられた。」と言います。その小さな活動が広がって、今では120名の会員と60名以上の生徒が習うようになっています。学校でも家庭でもないこうしたNPO・教室の集まりは、社会包摂（ソーシャル・インクルージョン）の重要な役割をはたしていると思われまます。

今回、2008年に行われたミュージカル「あいうえおばさん」に次いで2作目となるオリジナルのミュージカルでした。

●ハッピードール

ここに紹介するハッピードールは、ワンダーアートの高橋雅子さんが主宰した同名のプロジェクトに触発された寺尾のぞみさんが2011年にニューヨークで始めた非営利団体の活動です。今まで1400体の無地の人形がニューヨーク在住のボランティアによってつくられ800人以上の子どもたちがデザインした人形が震災後の日本、ハイチ、シンガポール、ベトナム、インド、ホンジュラス、ウガンダに届けられています。子どもたちが思い思いにデザインした（写真）メッセージを添えた人形が、旅のできない子どもたちに届けられます。足下につ



写真左：【第一部】ピアノトリオ「ピアノトリオ KV254第1・2楽章」モーツァルト作曲、Pf：仁科篤子、Vn：門脇和泉、Vc：高槻康介（生徒）。於：仙台市青年文化センター シアターホール 2012.11.24、写真右：実際に使われたハッピードール。

いたシリアル NO から旅先を知ることができるのも特徴です。

今回のミュージカルでは、100人のアメリカの子どもたちのデザインした人形がやってきました。

物語は、音楽バスに乗って市内を巡り、空港へ、そしてハッピードールに夢を託して世界に送るという展開です。人形制作と並行して「友達・夢・旅」をキーワードに連想される言葉をアンケートしその言葉を紡ぐ音楽ステージが出来上がっています。制作には、鈴木玉能（演出）、にしな あや（作曲）、工藤欣三郎（指揮）が担当、このほか多くのボランティアの力の結集で舞台公演が可能となりました。

特に私が感じたのは、サポート役の音楽の先生やスタッフの涙ぐましい仕事ぶりでした。また、障碍の程度や異なる障碍を持つ出演者で構成される生徒総勢60名の舞台は、出はけをまとめるだけでも困難な状態の中、「人間は一人では生きていけない」ことを、ミュージカル制作過程を通じて見せてくれたのでした。

© 写真撮影：志賀野 桂一

8. 「音楽による成人の寿ぎ」



写真1：市民合唱団とソリスト



写真2：歌劇アイーダから「凱行進曲」のトランペット隊

私が演出・プロデュースを引き受け6年目になる仙台市の「音楽による成人の寿ぎ」を紹介します。偶然にも大雪を避けて1月13日に仙台市の体育館で7000人の来場者（実際に会場に入ったのは4800人でした。）を迎えての式典でした。

全国各地で行われ、とかく荒れる、騒がしいなどといわれる成人式ですが、仙台市では、市長以外の挨拶や来賓紹介などを極力少なくし、有名人の講演などもやめて、音楽を中心に進行させる式典形式を続けています。幸いトラブルもなく式は行われています。

大人の側は、大人になった機会に、大人になった感動、何か役立つ人生訓を与えたいと考えがちです。しかし、集まってくる成人たちにとって最も大切なことは、友人たちに会うことで、そのためのお化粧や晴着であり、目立つパフォーマンスなのです。このことが如実に現れる事実、いくら声をからして誘導しても会場に入らないことです。携帯電話の使用が禁じられる会場には入らないで式典を後にする成人のいかに多いことか。

私が成人式の演出・プロデュースを引き受けて、最初に考えたことは、この主催者側と参加者側との目的のギャップでした。屋内外での「巨大な同窓会」と化した成人式に対して、新成人を式典会場にとどめ、少しの時間でも静肅性を保って、話を聴いてもらえる環境にするにはどうしたらよいのか。新成人に何かプレゼントはしたいと思うものの、素晴らしいお話、素晴らしい演技など期待していない対象者に何を提示したらよいのかしばらく悩みました。当初、私の使命（ミッション）は、芸術性を高めることではなく「新成人にいかに静かにしてもらおうか」の1点にあったとってよいでしょう。

しかし、こうした私の使命も昨年来変化させられることになります。いうまでもなく2011年に起きた大震災の結果、若者の劇的な意識の変化が見られたという理由です。「私たちの世代が復興の担い手にならない！」という若者たちの、うれしくも頼もしい言葉が随所で聞けるのを体験しました。

昨年式典にあたって、私のコンセプトは、「復興と郷土愛」というテーマで楽曲を構成し、式典の冒頭は、

陸前高田からお呼びした和太鼓奏者の菅野健一さんによる創作太鼓、シベリウスの「フィンランディア作品26」で始まり、ホルストの「ジュピター」、最後はベートーベンの第九（抜粋）で締めるというプログラムでした。

今年2013年は、ヴェルディ生誕200年ということもあり、国歌以外はすべてヴェルディからの楽曲としました。冒頭のファンファーレは歌劇『アイダ』より「凱旋進行曲」、お祝いのうたは、歌劇『椿姫』より「“ああ、そはかの人か～花から花へ”よりカバレッタ」、乾杯の歌、最後は歌劇『ナブッコ』より「行け、我が想いよ、黄金の翼に乗って」の大合唱で締めるというプログラムにしました。とりわけ、『黄金の翼に乗って』は、エルサレム・バビロンの話ではありますが、歌詞の中の

《おお、あんなにも美しく、そして失われた我が故郷！

おお、あんなにも懐かしく、そして酷い思い出！》

や最後の

《辛い悲嘆の響きをもった悲劇を語れ

あるいは主によって美しい響きが惹き起こされ

それが苦痛に耐える勇気を我々に呼び覚ますように！》

というくだりは、大震災のもとで力強く立ち上がる被災地へのエールのように聞こえなくもないと考えたのでした。

70人余の市民大合唱とソリスト、今井先生の指揮のもと、体育館という悪条件にもかかわらず、素晴らしい公演となりました。

参加者からは、「市長さんの『苦しい時ほどより苦しんでいる人を助けることが大切』という言葉や、綺麗で力強い音楽が鳴り響き、心にしみました、今日ここに来て本当に良かった。」という感想が聞かれました。

〈楽都仙台〉ならではの成人式になったのでは…。

◎写真撮影志賀野



写真3：歌劇『ナブッコ』より黄金の翼に乗っての大合唱

9. 音＝記憶を探す劇

「人生は、探し物をたずねる旅に似ている。」そんな感想を持たせてくれた演劇を観ました。長塚圭史（注1）作・演出の芝居でタイトルは、「音のいない世界 In the silence」、新国立劇場、宮田慶子芸術監督のもとで制作された大人と子どものための新作です。2012年12月の新国立劇場を皮切りに、山形、仙台、北上と年明けの1



写真1：舞台装置絵（作：Junichi Aota）



写真2：出演者全員でのアフタートーク

月まで東北を巡回することになった公演です。

長塚さんの作品ということで、メモにも予定を入れ楽しみにしていた芝居だったのです。私としては、入場は当日切符で間に合うと勝手に考えていたのが大変な間違いでした。仙台会場の宮城野区文化センター（パトナシアター）に行ってみると、2日とも売り切れとのこと、あきらめ帰りかけた私に、宮田さんがご自分の席を譲ってくれて奇跡的に観ることができたのです。宮田さんとは仙台の劇都事業で長いお付き合いがあったとはいえ「芸術監督」を立たせることになり申し訳なく思うばかりです。

さて、物語は貧しい老夫婦が大切にしている唯一の宝物、カバンに入った携帯用の蓄音機が盗まれることから始まる。その後、音または楽器にまつわるメルヘンともいえる16話のお話が展開する。しかし、どの場面もはっきりした答えはなく想像を膨らます余白が多い芝居といえます。出演は、作・演出の長塚圭史、近藤良平、首藤康之、松たか子の4人で様々な役を演じ分けている。ダンスとバレエといった演劇の世界ではないキャストによる演技が自由な空気感を醸し出して、全体としては実におしゃれな作品となっています。

舞台装置は、シンプルですが回り舞台はLPレコード盤を思わせ、半透明の家のかたちの壁が、家の中と外ばかりではなく、次々現れる世界を効果的に転換させて見せてくれます。

蓄音機を盗まれた夫婦は、その音を盗まれるのと同時に自分たちの記憶も失ってしまうかに見えます。蓄音機の音は夫婦にとって生活そのものであったのでしょうか。観ていて私が、ふと思い出すのは時間泥棒「モモ」（1973年・ミヒャエル・エンデ）の物語です。モモが奪われた時間をとりもどすという話は、この芝居の「音と人生の記憶」と置き換えてもよいのではと感じます。しかし、この芝居に登場する兄弟の泥棒は、モモに登場する時間泥棒の「灰色の男たち」とは異なり「時間を盗む」といった明確な意図がみうけられないのです。自分たちが何を盗むかさえ定かでない様子です。「人生を彷徨っている。」といったらよいのでしょうか、劇全体で、登場人物〔動物も含め〕は先が見ないで暮らし、何かを探し戸惑っている。世の中のすべての人々が探し物を求めてさまよう今日の状況のようにもみえます。

風変わりな味わいをもったこの芝居は、教訓をあたえてくれる寓話的な物語でもなく、もしかしたら、普通の人間のありさまを描いている極めて現代的な演劇なのではと感えてきました。

公演の後に出演者の楽しいトークがあって、演出の長塚さんは、13話で登場するフクロウのセリフが好きとっていました。

「星はどこかへ遊びにいったし、
月も雲に隠れてしまったよ。
面白いことは何もない。
眠るのが一番だ」(注2)

多分、このセリフではないかと私は思ったのです。まちがっていたらごめんなさい。

(注1) 長塚圭史さんといえば、今輝く演出家。『浮標(ぶい)』作・三好十郎(1902-1958)の公演では、砂を一面に敷き詰めたピーター・ブルックばりの舞台装置と演出で、仙台のパトナシアターに鮮烈な印象を残し、私も久々に演劇の感動を味わったのでした。

(注2) 『悲劇喜劇2』2013早川書房NO.748に戯曲「音のない世界」が掲載されています。p113より

*写真撮影はすべて©志賀野

10. コミュニティー・ダンス「自分発見の旅」

コンテンポラリーダンスの観方は千差万別、どう観たら良いのか分からない、しかし、型のない、オリジナル? 奇妙な所作、感じるままに観てよいというのがルールなのです。

出演者も米国で勉強しカッセル州立劇場ソリスト契約といったプロのダンサーから、全くダンスの教育も受けていないお年寄りや主婦のダンスまでが渾然一体となってプログラムされているのが「踊りに行くぜ!」のコンセプトです。

ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(略称JCDN)代表の佐東範一さんや、アートディレクター水野立子さんによって行われているこの運動は、今や全国各地で行われるようになり、私はJCDNが日本のダンスの民主化・民衆化に寄与していると言ってもよいと思います。

ここ、仙台のメディアテークで、「リージョナルダンス・クリエーションプログラム」が組まれました。方法は、①公募で作品を選考する、②新作アイデアの公演プレゼンテーションをした後、③アーティストを選定する。こうした方法で、オーディションで選ばれた地域の素人が22歳から75歳の10名が出演しました。

村本すみれ作品、タイトルは「ツグミ」。仙台の周辺の様々な場所でのロケーションによって制作された映像と、言葉で言えないことをさらけ出す舞台上での出来事が混然と交じり合う舞台となっています。プロの振付師の村本すみれさんは、「今回の作品のモチーフは鳥で、群れや集団で生きていくこと、それぞれが求めあい、ひき離し、混じり合う、その困難さと自由さ、そして、鳥が毎年同じ地に飛び立つこと。(それが)相手の機微を感じることに、自分をさらけ出すこと、私達が今自由になるために、自分たちの生きる場所を求めて(いくことが、鳥の)飛び立っていく様(と同じに見える)。」(* ()内は筆者が書き加えた部分)

地元の季節感のある情景と、映像のダンス、舞台上のダンスが溶け合って不思議な作品に仕上がりに、私は何より年配ダンサーの躍動が印象深く感じました。

ダンスは言葉が要らない身体言語の世界ですが、その抽象性の中にも言葉を越えた多弁なコミュニケーションが交わされていることが見受られます。

ダンスは、年齢・性別・国籍を超えた優れたコミュニケーション芸術といえます。しかしながらコンテンポラリーダンス(現代舞踊)は、バレエやモダンダンスと異なり特に地方ではなじみが薄い舞台芸術です。

吉田都や熊川哲也のバレエは人気ですが、天児牛大(あまがつうしお)「山海塾」など世界的であっても舞踏(butoh)はマニアックな世界にとどまる。現代舞踊といえばウィリアム・フォーサイス、ピナ・バウシュといった名があげられ敷居が高い芸術分野のように見られがちです。最近の金森穰(Noism)近藤良平(コンドルズ)黒沢美香、矢内原美邦(ニプロール)、森山開次などの活躍もあり、コンテンポラリーダンスは次第に身近になってきたとはいえ、鑑賞の対象としては見慣れない人にとって最も心理的に遠い舞台芸術かもしれません。まして自らが参加する世界とは想定できなかつたのではないのでしょうか。

しかしJCDNの活動によって、ダンスの可能性を広げるとともに、ダンスの新しい地平を切り開いてきたと言えます。代表の佐東範一さんにお聞きすると、英国で犯罪をおかした若者の更生教育メソッドとしてダンスが取り入れられているといいます。このお話の中で私が心にとめたエピソードは「しっかり止まる」静止することの重要性、動くためには止まらなければならない。この当たり前前の所作ができない若者が多いということです。更生のダンスはしっかり静止するトレーニングから始まります。ダンスの向上とともに若者の精神が立ち直っていく過程がVTRで紹介され感動しました。

また、人生ある一定の時にしかできないダンスも紹介してくれました。「ママダンス」「パパダンス」というものです。子供や赤ん坊を抱いて踊るという単純なもので、皆一様に笑顔で踊っています。大勢の観客に見せるものではないかもしれませんが、魅せる表情がそこにありました。これは参加者にとって、後から振り返れば人生の奇跡的瞬間を切り取ったパフォーマンスとも言えます。

さらに、被災地支援のダンスに関しての話です。多くの芸術家が震災地への慰問公演を行いました。中には押しつけがましい公演もあったと聞きます。JCDNの方法論はダンスの専門家として、各地に伝わる民俗芸能の振り付けを地元の踊り手に習ってくるというプロジェクトです。称して「習いに行くぜ!」。つまり「悲嘆にくれる被災地の人々へ施しを与える」という固定観念から解放されて、自分たちの存在意義を見失いつつある人々に、その土地の文化を再確認させ、伝わる芸能の潜在能力を引き出すことで成り立つ支援のカタチです。私は、これは新しい方法論だと感じました。

東北は神楽・獅子踊り・鹿踊り・剣舞など芸能の宝庫です。舞踏の発祥も東北です。身体表現のプロフェッションが踊りを身体で採取する試みは、もっと喧伝されてよいのではと思った次第です。



写真:「ツグミ」ダンス公演、於:せんだいメディアテーク
©撮影提供 JCDN

11. 春を告げる祭礼



写真左：「八戸えんぶり」のもう一人の主役、子供たち、写真右：八戸市メイン通りでおこなわれる一斉摺り

八戸地方に伝わる「えんぶり」を紹介してみます。旧の小正月に4日間行われ町中が「えんぶりモード」一色となります。もう一人の主役の子どもたちも活躍するまつりであることから学校も休みを認めると聞きます。地元にとって冬のまつりのひとつですが、春を告げる五穀豊穡を祈る祭りとして親しまれているのです。今年(2013年)の参加は22組のえんぶり組と特別参加で8組の子どもえんぶりが登場しました。

近年、東北には「みちのく5大雪まつり」岩手雪まつり、弘前城雪燈籠まつり、なまはげ柴灯まつり、横手かまくら、八戸えんぶりを合わせて冬の観光として紹介されています。

この中でも八戸えんぶりは、最も歴史が古く、諸説はありますが12世紀末から始まり約800年にわたって続いてきた伝統の民俗芸能で、国の重要無形文化財に指定(1979年)されている奇祭です。“奇祭”というのは私が勝手に述べているのですが、初めてみたときから多くの謎を含んだ、特異性のある芸能と感じました。私の研究では、馬の神聖性をかたどった馬飼いたちのもたらした儀式に、農耕の道具「杵(えぶり)」に由来するえんぶり祭りとして完成していったのではないかと推定しているのです。

この祭りの特色を上げると町内毎に組織された組(明治初期の多いときで100組を超えたという)が太夫と呼ばれる極彩色の烏帽子を被った3~5人の大人を中心に祝福芸を演じる子供たち(4歳から大人まで)太鼓・手平鉦(てびらがね)・横笛などの楽器隊、そして歌や囃子方など15人から20人で構成されています。

演技は「踊り」あるいは「舞」といわずに「摺り(すり)」といいます。土を平に摺る鋤や鍬といった農耕の道具がもとになっている鍬台(かんだい)、鳴輪やジャンギを使っておこなわれます。摺りこみ(口上)→摺りはじめ、→中の摺り、→摺り納め→畦留め(くろどめ)順で行われ、合間に子どもたちの祝福舞として松の舞、大黒舞、えんこ・えんこ、恵比寿舞などが演じられます。さらに「金輪切り」や「南京玉すだれ」などの余興が挿入されて、通常30分ぐらいで1ステージが成立しています。



写真：〈なが〉の烏帽子(左)〈どうさい〉の烏帽子・装束(右)

えんぶりの主役「太夫」は馬の頭をかたどった烏帽子をかぶり、黒い羽織、農具を模した棒を手に、足には藁でできたツマゴを履く習わしです。また、〈なが〉と〈どうさい〉の2つの型があります。

〈なが〉は、「ごいわいえんぶり」や「キロキロ」とも呼ばれ古くからの型といわれ、動きがゆっくりしています。烏帽子には赤い牡丹またはウツギの造花がしらわれ、太夫の藤九郎は鋤台（かんだい）という鋤の柄を持っています。

〈どうさい〉は、烏帽子に馬の鬣を模したとされる5色の房飾りがつき、動きのテンポが早く、勇壮活発で途中に「どうさい」という掛け声が入ります。手にはジャンギと呼ばれる金具のついた棒を持っています。このように2種の摺りの雰囲気は大きく異なるものとなっています。八戸地元の人々はこの違いを良く知っていて、好き嫌いも人それぞれです。ちなみの私の好きなのは《なが》です。

今年は寒波で、まさに雪の舞台の上で演じられました。厳寒の中でのえんぶり祭りには、春を待つ共通の願い、豊作の祈り、あるいは今日的な震災復興・地域の活性化の想いも込めた祭りとなっています。居酒屋の亭主、石岡ヨシノリさんは「門付けで店に訪れるえんぶり組が店内で摺るとき、烏帽子の太夫の舞によって一陣の風が起る、この時、私は春の季節の到来を感じる」とのべています。この祭礼は確実に季節の実感を持って市民に根づいているのです。



© 写真撮影志賀野

写真：「八戸ポータルミュージアムはっち」での展示（紙の芸術）

12. 「東北でしあわせを考える」アート NPO

アートによるソーシャル・インクルージョン（社会包摂）の事例を紹介してみよう。仙台にアート・インクルージョン*という財団法人が生まれました。

この団体の使命として以下のことが書かれています。

～『アート・インクルージョン』とは生き方であり、一つの思想である。それはアートを通して全ての人を優しく包み込む社会を実現することである。世の中には未だ性別、年齢、国籍、障がいの有無など、様々なバリアがある。それら人がつくり出したバリアを取り払うため、広い意味での芸術文化活動を通した、芸術的才能の発掘・育成、発表の場の確保などによって社会的自立を支援し、社会参加を促し、個性を尊重した創造的で文化的な社会のためのシステムを構築していく。～

アート・インクルージョンは障がいのあるなし、年齢、性別、国籍、アートの基礎知識やスキルなど関係なく誰もが自由に参加できるバリアフリーのアートプロジェクトです。様々なメディアを融合させ地域に根ざし継続していくことを目指しています。昨年2012年12月4日に、一般財団法人になりました。現在は、仙台市中心部にファクトリーを設け、障がいのある方（知的障害、精神障害、高次脳機能障害など）を対象とした就労継続支援事業B型の事業所となっています。

パフォーミングアーツ（音楽祭、紙芝居）やアートワークショップ、巨大紙相撲、落ち葉 de ワークショップ、ビジュアルアーツ（ゲルカフェなど）、笑顔のアート展・ながまち写真展などプログラムは多彩です。

障がいのある方が、アートとアートの仕事を通して自立できるように、年限を定めずに継続的なトレーニングを行っていきます。自分の才能を確認し、磨きをかけ、自分の好きな道を追求することで、新たな意味と価値を手にしていくことを目指します。これを指導しているのが宮城教育大学教授の村上たかしさんです。【写真左上】

村上さんは、3.11の震災後いち早く生活物資を届ける救援活動に着手、その後、ガレキを拾い集め震災の記憶を残そうとモノの収集を行っています【写真右上】。アーティストの前に一人の人間として行動し、その後は自分たちの得意分野のアートを使って活動を継続しています。



写真：「ほっぶの森」のホールでアートNPOフォーラム（左）、集めた瓦礫の一部（右）

もう一人、障がいを持つ人々の支援活動を長年手がけているのは、地元経営者の白木福次郎【写真左】さんです。2007年2月に有限責任事業組合（LLP）就労支援センターほっぶを立ち上げました。2008年1月に特定非営利活動法人ほっぶとして生まれ変わり、就労移行支援事業と就労継続支援事業A型（雇用型）の福祉サービス事業所として現在に至っています。

障害のある人が一般就労（就職）する機会（チャンス）があまりにも少ないことを痛感する企業経営者、大学名誉教授、臨床心理士、フリーのアナウンサー、コピーライター、福祉施設の役員など多くの方によって支えられ、ほっぶの森では、高次脳機能障害者と知的障害者のトレーニング（講座と職場体験）を2年間で就職のチャンスに挑戦して行く仕組みです。

アートNPOフォーラムの全国大会が「震災とアート」を主題とし、このほっぶの森で開催されたことは、ある意味で象徴的なことでありました。アートの多様性と包摂機能を考えるとき今後被災地の人々と、障害を持つ人々とをつなぎ連帯していかなければよい社会も真の復興も見えてこないと感じるフォーラムでした。

◎写真撮影：志賀野

*アート・インクルージョン <http://art-in.org/>

13. 2つの祖国を持つアーティスト

昨年「東アジア共生会議2012」（主催：文化庁ほか）が行われ、その時お会いしたジュン・グエン＝ハツシバさんのことを紹介します。

私が最初に見た彼の作品は、《ナ・トラン（ヴェトナム）のメモリアル・プロジェクト——複雑さへ、勇気ある者、好奇心をもつ者、そして臆病者のために》という2001年に発表されたビデオ作品でした。

インドシナ海で撮影といわれるこの映像作品では、海中でシクロ（注）をこぐドライバーと、あまりにも美しい海や光の色が対照的で、タイトルの意味もよくわからないまま私の心を動かし、どんな作家か知りたいと思っていました。それが前出の会議でパネリストとなった彼の話を聞け、レセプションで直接お会いできたというわけです。

（注）：シクロ…ヴェトナムやカンボジアで見かける3輪の自転車タクシー

簡単に彼のプロフィールを書くと、1968年東京生まれ。日本人の母、ヴェトナム人の父との間に生まれ、幼少時代を日本で過ごす。その後アメリカで美術教育を受け、現在はベトナム・ホーチミンを拠点に制作活動を行っている。2001年の第1回展に続き「ヨコハマトリエンナーレ2011」に参加、[Breathing is Free: JAPAN, Hopes & Recovery] を出品するとあります。

横浜のトリエンナーレに行った私が見た中で、とりわけ美しい映像に魅せられて撮ったのが掲載の写真ですが、当時あのグエン＝ハツシバさんの作品という認識は私に無く、今回初めて彼の作品であるということがわかり2回の偶然の出会いをしたような気分となりました。また、彼の解説では作品の制作のプロセスが大変面白いものでした。

制作の行程はこうです。



写真：地図に描かれた川とランナーの記録が重なり大きな桜の樹となる作品
「ヨコハマトリエンナーレ2011」出品、作ジュン・グエン=ハツシバさん

「まずは地図で街の地形を眺めるところから作品の構想がスタートします。今回はホーチミン市内の地図を調べました。そこに桜の花を描くことを考えて、地図上にラインを描きます。つぎにランナーにGPS装置を身につけて、その線の通りに走るのです。この装置に蓄積されたランニング・データをコンピュータに取り込んで、コンピュータ上にその軌跡を示します。そうすると桜の花がドロイングとなって表われてくるという仕組みです。」ベトナムと日本という2つのアイデンティティーを持つ彼は、今度は横浜に来てプロジェクトを進めようとしています。

「当初はホーチミン市内だけを走って桜の花を描くつもりだったのですが、横浜の地図を見て、横浜の道を重ね合わせるともっとたくさんの桜の花が描けると考えました。ホーチミン市内を流れる大きな川の本流を桜の樹の幹の部分に見立てて、その川の支流を枝の部分に見立てています。ホーチミンと横浜を重ね合わせることにも意味が出てきました。」こうしたなかで彼は、東日本大震災の報に接して、東北の被災された方々に捧げる作品にしようと決心します。

「即座に変更しようと思ったわけではなかったのですが、震災復興のためにサブプロジェクトを制作しているうちにその構想がどんどん大きくなって行き、サブではなくメインにしようと決断したのです。震災直後にホーチミンの街でGPS装置を身に付けて走り始め、横浜の街もあちこち走りました。」

地図上の構想から現実の都市へ、地図上の川が映像作品のさくらの幹となり、走ったランナーのGPS装置の記録がさくらの花卉となる。ここには、「見立て」といった日本の感性が宿っていて面白い。彼は常々「仏教の根本的な考え方である、輪廻の思想が僕にとっては非常に重要です。」そして「いま生きている生は前世と関係し、また次の生まれ変わりにも影響するという、すべての生がつながっているという考え方が、自分にとっての重要な考え方となっています。」と述べている。

今回のプロジェクトは東日本大震災に触発された彼が、多くの若者たちの大地を疾走するという無償の行為によって桜の花を描く、そのことによる鎮魂と被災地にエールを送る彼なりの復興支援のカタチなのだということが見えてきます。

この2つの祖国を持つアーティスト、ジュン・グエン=ハツシバさん、ベトナムの国の苦難を乗り越えてきている現実などと重ね合わせて考えると、こうした作品の生まれる理由も得心できたのでした。

©写真撮影：志賀野

14. 平成の《広重》・巨大水彩画を前に

巨大絵画「雪に包まれる被災地」が繋ぐ東北と神戸という企画が、アート・サポート・センター神戸の主催で行われている。(行われました。)会場となったKIITO (デザイン・クリエイティブセンター神戸)は、旧生糸検査所を改修・転用しユネスコ「デザイン都市・神戸」のシンボルとして、平成24年8月に誕生した新しい文化施設です。

このKIITOホールの空間に高さ5.4m幅16.4mという巨大な水彩絵画が運びこまれました。写真で見てもわかるとおり、ホールの横幅と絵画の寸法が数ミリ単位でピッタリ収まり設置者の皆で大拍手となったそうです。



写真：ダンスパフォーマンス、今貂子さん（左）、「雪に包まれる被災地」絵の部分（右）

あまりにこの空間に合っていて、昔から時間を超えて存在する壁画のようにも見えます。

この巨大絵画の前に、4日間にわたりダンス・朗読・音楽・シンポジウムなどの様々なプログラムが組み込まれました。主宰の中心にはギャラリー島田の島田誠さんがいます。いうまでもなく島田さんは1995年の1・17阪神淡路大震災と、2011年3.11の東日本大震災をアートで繋ぎ心をひとつにする長い活動をしてこられ、今回その想いが詰まった企画となっています。絵の前でのダンサー・音楽家・パフォーマーはどんな啓示を受けて演じるのか、普段とは全く違った公演になることは間違いないと思われます。

私もオープニングのトークセッションでお話の機会をいただきました。しかしながら、加川さんの絵の前では、どんなメッセージも意味をなくすほどの迫りに圧倒されます。

島田さんはこの絵と仙台出遭い神戸に展示する決意を固めます。絵を評してこう書いています。「画家の受けた衝撃をインスピレーションの中で再生し、多大な時間と労力を重ねながら完成させた東北大震災の記念碑的な作品です。津波に破壊されて骨組みだけになった建屋。下部は津波に流される街（家々）。左手には陸に打ち上げられた巨大船、雪に包まれる被災地の情景がコラージュされたように圧倒的な迫力で描かれ、轟音も波音も風雪も悲鳴も破壊音も雪に包まれた無音の世界に封じこめられて私たちはただ立ち尽くすだけです。」（島田誠）

この絵のモチーフとなった石巻の工場、南三陸、気仙沼の船、絵の近くに寄ると忽然と現れる街並み、写真では決してわからない絵画世界に思わず引き込まれます。

ダンスボックスの大谷さんの言葉をお借りすれば、「災害の悲惨さを超えて一種の美しさを感じる」といいます。

私も人間の情感を突き抜けた大きな力（＝生命力）を感じさせてくれる黙示録的作品であると改めて思いました。

東北から神戸へ、様々の偶然が重なりKIITOホールでの展示会が実現しました。東北以外の展示を望んでいた加川さんは「震災が絵を描かせてくれた、今回の展示会は夢のよう。」と述べています。

加川さんは、「南三陸の黄金」という東日本大震災巨大絵画第2作目も完成させました。空洞感の中にも土地の生命感が宿る作品となっています。

加川広重さん、宮城県蔵王町生まれ36歳の新進気鋭の作家ですが、その大胆な構図、問の取り方は江戸の浮世絵師・歌川広重？を彷彿させます。名付けて《平成の広重》と私は呼びたいと思います。



◎写真撮影：志賀野

写真：ダンスパフォーマンス、jung mi IM

15. かたりつぎ



写真：2013.3.1に行われた「かたりつぎ 竹下景子 朗読と音楽の夕べ」のシーン／於川内萩ホール

震災から2年経過し、被災地の口述筆記によって集められた記録（＝物語）をていねいに集め、人々に伝えていく（＝語り継ぐ）ことは重要と考え、「かたりつぎ・竹下景子・朗読と音楽の夕べ」という企画が、東北大学川内萩ホールで開催されました。

主催は、東北大学災害科学国際研究所／かたりつぎせんだい実行委員会／復興支援コンサート実行委員会（神戸）でした。私は、実行委員会のひとりとして参加し、演出を担当させていただきました。

今回800篇の口述記録（オーラル・ヒストリー）の中から7編を抽出し朗読されました。この中の一編に「ガレキはゴミじゃない」がありました。数字にすると1,880万トンの瓦礫といわれる災害廃棄物、外の目線では膨大なごみの山ですが、住民にとって個人の持ち物や思い出や記憶の品々といった宝の集積物です。そのことを記述した一編でした。

朗読では、「私はね、ガレキの中から時計を見つけた。土に埋もれていたその時計は、私が出版社のある賞をもらった時に記念でもらった物。時計は3時24分で止まっていた。それを見たとき、本当に大切な物達の悲鳴が聞こえた気がした。」舞台背景のスクリーンに3.24の文字。やがて、原田哲男の奏でるバッハの「アリオソ」とともに止まった時間は再び動き出す。というシーンを演出してみました。

3・1のイベントの後、こんなメールが届きました。

「…本当に私達被災者は 二年過ぎた今でも いいえ 幾分か生活リズムを取り戻せた今だからこそ 将来についての不安で 心 揺れ動いている人も多いです。どうかこれからも 私たちの心を拾い集めてください。…」
「ガレキはゴミじゃない」の物語を述べた石巻市の阿部邦子さんからのメールです。

止まった時間を動かすのは容易ではないですが皆で動かしていく、その力になれば…と思うのです。

芸術家は、平時にあっても精神の浄化や苦悩の昇華といった作用を人々にもたらすことを自らの業としてきました。震災で傷んだ地域の回復は、被災地の人間性の回復なくして達成できないと考えます。多くのアートNPO、文化団体の支援活動が続いています。こうした活動に支えられ地元の住民が生き生きと自己表現ができる日常を取り戻すこと、とりわけ祭をはじめとする地域文化の復興が欠かせないことだと思います。私は震災復興には、人々の生存条件のみならず地域の誇りを取り戻す人間性回復という基本視座が重要と考えています。

このブログの締めとして震災と関係が深い宮澤賢治の言葉を書きだしておきたいと思います。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある。」

また、「われらに要るものは銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である」（農民芸術概論より抜粋）

宮澤賢治のヴィジョンはいま被災地の東北に生き続けています。

© 写真撮影：志賀野

忘れない 文化芸術が紡ぐ絆を信じ

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 参与 渡辺一雄

1. 思いつくままに

時は2005年5月の或る週末の夕暮れ時のこと。場所はカーブル（アフガニスタン首都）にある外国人国際支援専門家（※）専用のゲストハウスの一室（2階）から望まれる中庭。時ならぬ哀愁漂うメロディーに「おや…？」と思わずベランダに。

当時アフガニスタンの治安の悪化は、今日に比してさほど深刻ではなかったのですが、外出しての食事や買い物は禁止され、さながら監獄に収監されたに等しい生活条件を余儀なくされ、週末の過ごし方は退屈そのものでした。そうした環境にあって思わぬサプライズ。

楽器の名前はもう覚えていませんが、マンドリンに似た民族楽器の弦をつま弾く老人、そしてアコーディオンもどきの粗末な鍵盤楽器を巧みに奏でる少年二人の合奏に釘付けになったことを記憶しています。乾ききった大地にそして我々の心深く染み入る素晴らしいメロディー、その曲風はいかにも中東イスラムが生み出した音源を特徴づけるものでありました。

こうした情景は単に音楽・奏者の姿だけではなく、歌舞音曲の類を一切禁じたタリバン政権からの解放を高らかに歌い上げるとともに、厳しい治安の下でややもすると心蓋がる我々の心情を察し、心の癒しをと願ったオーナーの心遣いとも映りました。

翻って思うに、広大な地球上にあって、時を歴史をそして宗教や文化の違いを超え地理的距離をはるかに隔てつつも、人類が遭遇する様々な災厄・困難、そこから生まれる悲しみの極限状態を私たちはどこまで共有できるのだろうか？奇しくもこれに類する厳しい環境下に流れた一時のメロディー。その「普遍的価値」を何に例えることができましようか…？適当な言葉は今以て見当たらないのですが。

やや唐突の感を否定できないことを承知しながらも、思いつくままに彼の地での心情を吐露したのは、他でもなく被災地支援に文化芸術がどんな力が発揮できるかはこれからの挑戦ですが、その一翼を担う「コンソーシアム」、その助言者という役割を引きうけた筆者の素直な心情に発したものと受け止めてください。

このブログを通して今後読者に語り続けるメッセージは、一方通行であってはならず、被災者はもとより多くの支援者仲間と共に考え、行動していくためのものになることを願いつつ…。



2. 復旧かそれとも復興か

この冬、被災地の仙台市郊外にある中学校を筆者がかかわる別の教育プロジェクト（※）のため訪問した際のことです。

「先生方は今回の地震、津波体験をこれからの防災教育に生かすとすれば、単に被災前の生活を取り戻すだけでなく、それ以上の価値ある生活の実現を見据えたものであるべきではないでしょうか？」と問いかけました。これに対して「肉親や親戚を亡くしました、家を失い仮設住宅に住まいする勉強部屋もありません、じつと必死で耐えている我慢している様々な子どもや保護者を前に、そんな姿や教師自身の精神的ダメージを棚上げして言える話ではありません。」との答えでした。

改めて「まだまだ時間がかかるのですね…」とこれ以上の取材を断念しました。そして、こうした問いかけは“東京目線”なのかもしれないと自省したことを記憶しています。

この間、国内はもとより海外からも様々な階層、分野から物心両面の夥しい支援の善意が届けられ、被災地からの感謝のメッセージもこれに応じて多く発せられました。その中には“復旧から復興へと目標を切り替えました”との声も次第に大きくなっていることも事実でありましょう。しかしながら“押しかけ公演”、“売名支援”が混交したこれらの“善意”には、“ノーモア、ボランティア”の声が、鋭い批判が被災地の人々から発せられたことも忘れてはなりません。

そして、瓦礫処理や高台移転、先が見えない放射能との戦いなど多くの課題を抱え、生活環境の復旧自体に楽観的見方は禁物であること、このことは十分承知しています。

形式論議かも知れないが、「コンソーシアム」が文化芸術を通じた関連事業を通じて被災地の人々と向き合っていくには、或いは信頼関係を確かなものにしていく上で“復旧か復興か”との命題は大切な視点であり、また理念を形づくる大事なポイントと考えます。互いが目指す目標、その基盤をなす理念がまちまちであってはならないからです。

少なくとも「コンソーシアム」は被災地の皆様の心の底から湧きあがる力と声、創造のエネルギーを信じなければ将来立ち行かないことは明らかであるのだから。

従って今この自問に答えること自体意味のないことであり、寧ろ被災地の皆様とより一層濃密に関わりを持つようになってから、これからの具体的な課題に協働して立ち向かう過程で自然と答えが見えてくると考えますが、如何でしょうか？

※筆者は持続発展のための教育（Education for Sustainable Development, 略称「ESD」）

推進プロジェクト（国連「UNESCO」、文部科学省）共同事業に関わっており、仙台地区にあるプロジェクト推進校（ユネスコスクール）の一つを訪問しました。

3. “被災者と向き合えることの意味” — 被災地訪問を体験して～

被災者の心情とそうでない者とは共感をもって向き合うことの難しさはこれまでにお伝えしました。今回はこれを象徴する一つの出来事から語ってみたいと思います。

アドバイザー就任後間もない被災地訪問の途中のこと、一つの舞台（演劇）作品との出会いが深く私の胸に焼き付いています（注）。しかもその作・演出者は初演から日をおかずして突如他界されたと聞いています。改めて故人には哀悼の意を表したいと思います。

（注：“方丈の海” 石川裕人作・演出 去る9月5日 仙台市10-BOX）

その作品は、“今は昔”「もう10年も昔のことか、大きな地震、津波が襲ったことがある…。」（筆者）という老婆の独白で幕を開ける。

やがて位牌のない仏壇らしき箱を背に「10年もの間、こうして俺はさまよっている…」（筆者）と呟きながら一人の年齢不詳の男が登場。彼は伸び放題の頭髪、立っているのがやまやまというやつれ切った痩身を晒す。その間断なく聞こえる荒ぶる波の轟音。

こうした二つの強烈な切り口、この二人の登場で作品のテーマ、作者の意図の大方は語りつくされているように感じ、理解したのですが。（実は時間の関係で最後まで鑑賞しつくすことができなかつたため、序破急を把

握しないままのコメントであることをお断りしておきます。)

恰も仮設小屋を連想させるような劇場の席を埋めた観客の息遣い、漂う気迫をうかがうかのように、淡々とまた時として激しく科白のやりとりが続きます。観客と演者との間には張り詰めた糸のような緊張感が終始漲っています。

そうした中、臨席で固唾をのんだように身じろぎひとつしない白髪の女性。薄暗い照明のため余計にその表情をうかがうことは躊躇われたのですが、垣間見た横顔から十分に彼女の熱い視線を想像することができました。

その後他の会場での上演の様子、反響のほどは承知していません。しかし、確実に作者が訴えかけようとしたメッセージは、観客と演者とをつないで落ち着き場所をきちんと見つけるに違いないと思います。それは、癒しから創造的復興へのギャチェンジのポイントとも言い換えることができるのではないのでしょうか。

尤もかく記しながらも、私自身どこまでこの作品のテーマに迫りえているのか、フィクションながらどこまでリアルに登場人物と向き合えたのか…？

舞台芸術はライブを基本とするだけに、観客のその場の思いを敏感に察知しながら、たとえば楽器の演奏であれば曲目を選択し（その分多くの楽譜を携行する必要があるのですが）、また落語であれば“出し物”を用意するといった臨機応変の演出を必要とするといわれてきましたが、正鵠を射たものかもしれません。

そうした芸術の持つ特性ゆえに、謂わば作品を通して人と人は高い次元でコミュニケーションすることができるといわれます。

地震や津波により親・兄弟・こども、その他の貴重な財産を一瞬にして失った限界状況において必要とする心の支え合い共感的思いの通じ合いは、芸術の世界では滑らかに実現するのかもしれません。

そのことで明日への復興のエネルギーが湧いてくると信じたいものです。

先の「文化芸術による復興推進コンソーシアム構築に係る事業調査研究報告書（平成24年3月）」の巻末で赤坂憲明氏（学習院大学）は次のように述べています。

「東北の民俗芸能の多くが、生きとし生けるものたちすべての命を寿ぎ、供養するために演じられてきたことの、深々とした意味を問いつけたいと思う。「打つも果てるも一つの命」（「原体剣舞連）」という宮澤賢治からのメッセージを傍らに置きながら。さて、芸術や文化なしに、われわれは豊かな復興や再生を語ることはできない。」（同212頁）

私自身がこうした著名な民俗学者の一文を引用したのも、冒頭の演劇作品に出合いその迫力に圧倒されたことをきっかけにアドバイザーとして東北の伝統的地域文化の特性にもきちんと思いを致し、芸術文化が復興推進に深くかかわるという命題、換言すればタイトルにある“被災者と向き合えることの意味”をこれからもずっと考え続けなければならないと思うからです。

4. “被災地の想いと向き合えることの意味 その2”

今回は、去る9月に被災地釜石から大槌へ案内を乞うた際の出来事からこの主題に迫ってみたいと思います。佐々木健さん、大槌町に勤務されて30年になる御仁です。スニーカーシューズの出で立ちで現れた彼につれられ、釜石からトンネルを経由して峠を抜けると、一挙に三陸のリアス式海岸が開けそのまま“町”に入りました。

沿岸の平地には津波被害の跡がろうじて民家の土台部分のコンクリートと認められる形状だけを残して真っ平らな荒地が広がっています。ふと湾内の沖に目を転じますと井上ひさし作“ひょっこりひょうたん島”のモデルとなった蓬莱島が右手に視認でき、沿岸道をゆっくと進みます。鉄道の軌道は寸断され、駅の跡形もありません。それでも漁民の方が数人、しゃがんで網の修繕に勤しんでおられる姿には平時が徐々に回復している兆しと映ったのですが…？

すると佐々木さんから「これから是非ごらん頂きたいサイトがあります。」との一言、車で案内されたところは、辛うじて残った堅牢な鉄筋建物の脇にある水溜り。「大槌は至る所で湧き水が溢れているんです。このとおり人気のないところに遊水地が点在しています。でももっと水面に近付いてよく見てください！」。促されて足元を気にしながら更に近付いてみると、「あー！いました！！」何と“めだかが”黒い影を映してすばしこく泳いでいるではありませんか。こんなところに。



写真：大槌町教育委員会提供

「違います。それは“イトヨ”という稚魚なんですよ。」
「え？…」

佐々木さんによると「この魚はトゲウオ科イトヨ族に属しサケ科魚類とほぼ同様北米、極東アジアなど北半球に広く分布する冷水性の魚です。」とのこと。

大槌の河川はこれまでこれら「淡水型イトヨ」にうってつけの環境を提供してきたことを、そして「自然と共生するまちづくり、ふるさとの水環境保全のシンボル」としてのイトヨの意義を熱っぽく語って下さったのです。

「ここに10m以上の防潮堤が作られるんですよ。するとどうということになるか…。

被災地の復興を考える場合、人だけではなく逞しく生き残ったこうした街のシンボルの行末をも考慮しなければ、生態系の営みにも十分目を向けなければ、真の復興とは言えないのでは?!」との言葉。佐々木さんの口からそうした声かふと漏れたのを聞いて、はっと気付かされたのです。

「減災」や「共生」は一体誰のための？それは人間だけが享受する言葉ではないのでは？破壊しつくした津波の惨さを前に、あらゆる生命への深い想いに支えられた、したたかな復興への覚悟が佐々木さんの言葉から伺えたのです。

このことは、「みちのくに暮らす人々は、生きとし生けるものたち、人間ばかりか鳥獣虫魚さらには草木の類にいたるまで、いや、死者や、神仏・精霊など「眼には見えないものたち」までも含んだ、共生の世界を創ってきたのかもしれない。」(「文化芸術による復興推進コンソーシアム構築に係る事業調査研究報告書」第6章 (http://bgfsc.jp/report_pdf/pdf_12102113272867753.7.pdf) 平成24年3月 212頁)との赤坂憲雄氏(学習院大学教授)の考え方にも通じる卓見と言うほかはないでしょう。



大槌町役場前の筆者

5. “被災地の想いに向き合えることの意味 その3”

— 娘をもつ尺八吹きとしての筆者が共感するところ～

今回は、去る9月釜石を訪問した際に逃したチャンスへの述懐から始まります。

“まつり囃子の笛が供養の笛に変わるまで”と題する「平成23年度版調査報告書第5章 東日本大震災と文化芸術の役割」(橋本裕之・盛岡大学 186頁)のくだりには少なからず感動、共感を覚えるとともに、震災を体験しなかった我々が被災者に寄り添う想いとは一体何か？その本当を考えさせる大きな力を宿しています。途中何回も絶句し、最後までは感涙なしには到底読みきれません。今もなお。

件の“語り”は、釜石市の「鶴住居虎舞」のお囃子を務めてこられた方が作られたものです。この方は、高校1年生の娘さんと母親を亡くされています。

実はわたし自身が邦楽器(尺八)を嗜むこと、加えて末娘(彼女はトランペット奏者であった)の辛らつな批評に耐えながら尺八の腕を磨いた過去の(苦い)体験に重ねて、最近になってこの詩を読ませていただいた後に、「ああしまった！何でこの作者にあの時會わなかったのか…」と悔やんだことを意味しています。

以前書いたこともあるように、芸能、文化芸術は人の心と心を難しいこと抜きに直接つなぐ力を持っていることから、同じジャンルの楽器演奏修業を体験することで共感を可能とすることをこの“語り”を読んで先ず実感したのです。

しかし、それだけではありません。加えて強調したいのは、幼い頃からの父と娘の関係性がそうした芸術的行為の特性に共鳴し、より一層作者の被災から立ち上がろうとする切なる想い、“まつり囃子の笛が供養の笛に変わるまで”との表現、その心情をいやがおうにも引き出し、訴えている点です。

こんなくだりがあります。

“記憶は定かではありませんが震災から2ヵ月近くが過ぎた頃だったでしょうか。

そう（娘の前で、笛を吹いてあげたいと）思ったときがありました。お骨の前でもいい、娘のために笛を吹きたい。娘に聴かせたい。そして娘の前で吹きました…。

今まで笛を吹いてきてこれほど悲しい笛はなかったと思います。涙が止まりませんでしたが虎舞の演目全て吹きました。娘と話をしながらいつも側で笛を聴いていた娘に届いてほしいと思い泣きながら顔がくしゃくしゃになりましたが最後まで吹きました。（中略）（震災までは、虎舞は祝いの踊り）しかし、今回の震災で亡き娘を思う気持ちがまつり囃子の笛から供養の笛に変わったような気がします。”（カッコ内、太字部分筆者補筆修正）

読み進んだ私自身、何回読んでもこの段で絶句、それこそ顔がくしゃくしゃになります。

“過去にも沿岸地方は大きな災害を受けてきたと思います。ですが、先人達は乗り越えてきました。それが地域に伝わる文化であり芸能だったのではないかと思います。まだまだ復興まで、そして昔ながらのお祭りができるまでは時間がかかると思います。ですが亡き娘のためにも、生涯笛を吹き続けそして犠牲になられたたくさんの方のためにも郷土芸能で町を盛り上げて行きたいと思います。”（同）

想いを凝縮したそうした“語り”。その重さをひしひしと感じ取り共感を覚えるところから文化芸術による復興支援の道筋は見えてくると思います。

さて、11月下旬から被災地3県で地元委嘱された第1回目の「復興推進員」連絡会議が開催されます。このブログ著者もこれが最大の狙いとする被災地と復興推進コンソーシアムとの間で本格的な血流が実現するにはどうすればよいか、何が必要かを考え、ひとつの手がかりとして、そうした虎舞お囃子奏者との間に熱い思いが通い合えるよう、まずは被災地と心情的に交わって来たいと思います。

6. “コンソーシアム／被災地との血流を目指し”

コンソーシアムでは、去る10月に「復興推進員」という文化芸術の分野で活躍される主だった方に被災地復興情報の提供等モニタリング的役割をお願いすることにしました。被災3県の文化NPO、芸術家、学校関係者、医師、行政の皆様です。

5月に発足した「コンソーシアム」にとって、これからの活動を効果的に、特に“被災地目線”で仕事を進めていく上でなくてはならない役割を期待してのことです。

この方々と先月直接お会いしました。昨年来の活動の状況を中心に現状やこれからの課題について話し合いを持ちました。被災したまま改修の手付かずのままの文化ホールを訪問したり、原発放射能のため思い切り外で遊べない子どもたちのために建物を改造した大型プレールームに行ってもその様子を見せてもらったりもしま



(写真：宮古市民文化会館)



(*) 平成24年11月6日現在（宮古市危機管理課：宮古市 HP より）

した。

この話し合いで得たものは、或いは考えさせられ、感じたことは何かなど、このブログで何回かに分けて記してみたいと思います。話題別にやってみましょう。

まず取り上げたいのは、被災現場に臨場しての想いです。宮古市でのこと。

宮古湾が臨める高台からは、美しい静かな景観が眼下に見渡せます。“被災直後、難を逃れた高台の人は犬の散歩、津波を被った低地では呻き声、そんな状況でしたよ。”

死亡者517名、行方不明者94名（*）。尊い命を奪ったあの日のことを語る様子に、はっと我に返る自分を、間違いなく徐々に風化が始まっている我が心情に気付かされました。湾を巡って高台、或いは閉校になった小学校のグラウンドなどに点在する仮説住宅、乾された洗濯物、人気はありませんでしたが、生々しいあの日のことが一瞬蘇った感がしました。

市立の文化ホール。殆ど真っ暗な中で懐中電灯を頼りに客席、ステージ、機械室などまだ海水、泥の後が見て取れるなか、やっと来年建物改修に入れることで一条の光が差したかの想いを語って頂きました。館長室にあった時計は、波が襲った瞬間の時刻を指したまま止まっていたのですが、やっと動き出すきっかけが見出せたのですね。

今「コンソーシアム」に集うメンバーは、こうした被災地現場に立って日々その復興の歩みを進めておられる皆様と“太い血管”で繋がることを重視し、言葉ではなく何を具体的にやっていかなくてはならないかを考える努力をしています。

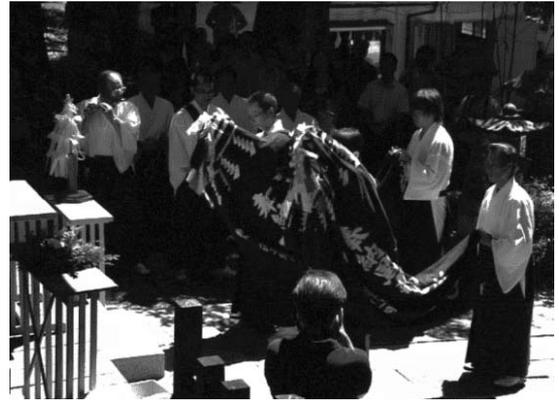
“語り部”の役割、出番の大事さを意識させられました。“忘れない”、“忘れてはならない”、そのためにもお願いした「復興推進員」の皆様の方からも今度はどんどん語ってもらう、双方向の想いが行き交う日、あふれる熱い血の流れる日が遠からずやってくることを信じます。

勿論そのためにはどうすれば良いかを思案しつつ。

7.

祭の起源は様々でしょう。尤もわたし自身その分野の専門家ではないので知ったかぶりは慎まねばと思っています。前回お約束したように去る11月に被災地3県の「復興推進員連絡会議」で文化芸術の復興を支えるものは何かという論議の過程で、そのテーマとして取り上げるべき事柄のひとつにこの「祭」の再開の様子が話題となりました。そこで、今回はこの「祭」を取り上げてみたいと思うのです。

私は京都南部（宇治）近郊に生まれ神社仏閣に囲まれたなかで育った所為もあり、さほど関心の高いものではありませんでした。しかし震災の復興の過程にあって「祭」は復興を担う「ひと」そのものの魂を支え、地元意識を回復する貴重なものという考え方には、わたし自身学生時代に地元で出会った映画作品「祇園祭」（山内鉄也監督、1968年公開）のことがある種の感動とともに蘇るなかで改めて「そのとおり」と合点するものがあるのです。



平安後期にあって、当時京の都は内陸の湿地帯にあって今で言うマalariaや天然痘、インフルエンザなどが大流行したそうです。さらに長岡京遷都工事中に起こった「藤原種継」暗殺事件の無実の罪を被りながら亡くなった「早良親王」らの怨霊の仕業との卜占があったことにより、この難局を乗り切るには「祭」しかないということで市民が立ち上がったことに遡るとされています。(祇園祭-Wikipedia より)

上記の作品は、まさにこの歴史的事件に取材し脚色されたものと記憶しています。過去幾度となく津波震災に襲われてきた三陸沿岸部の人たちは、千年に一度の災厄といわれる今回の大規模の津波被害のもとで、「祭」はまさに難局を乗り切る切り札として主唱されている、自然に沸き起こった声なのかもしれません。

ここで再度お断りしておかねばなりません、元々専門家でない私には「祭」そのものの学術的解説をする力はありません。しかし、ここで留意しておかねばならないことがあります。

それは、神仏への祈願をこめたひとつの様式をもって確立されてきた宗教的儀式(美)を基盤に構成されてきた本来の「祭」。そこに未来を託されるであろう若者たちの心意気、或いは彼(女)等の瑞々しい感性を取り入れた「創作」性が新たな文化的要素として加味され、厳粛な中でもそのエネルギッシュな力を強調した「祭」が語られる余地が生まれていることです。こうしたことは、必ずしも地元限定しない若者回帰のきっかけとして、彼等呼び込むひとつの流れとして捉えてみては如何でしょうか。

具体的な「作品」が今後どのように生み出されてくるのか、全てを飲み込んでいった津波が引いた後に、こうした若者たちが「祭」という形を通じてしたたかに再生する「ひと」の生活美(これは私の勝手な造語ですが)をどのように飾ってくれるのか、注目していきたいものです。

そして、明らかにこうした「祭」の創造のなかで伝統芸能を巻き込んだ地方文化のいい意味での「世代交代」が今後進むことを期待したいものです。



8.

今回は、震災復興を高齢者、障害をもつ方々などいわゆる“震災弱者”はどのように見ておられるのかという観点から考えてみましょう。

文化は人間が生きていくうえでの、生活スタイルの基盤となるもので道路や電気・ガスと同じようにインフラと考えるべきとの主張（端信行・兵庫県歴史博物館館長、コンソーシアム調査研究会委員）があります。また、同氏は生きることはすなわち文化であり、その部分が復興できなければいくら物理的・物質的復興が進んでも真の意味での復興とは言えないとされています。

芸術や文化は「生活復興」の後から補うことができるという性質のものではなく、それは人命や生活と一体のものであり、そうした考えを常日頃から「社会的習慣」として共有されているべきとされている。（括弧は筆者加筆）著名な文化人類学者としての有識者の卓見というほかはありません。

なぜ筆者がこの見解に籍口するのか、少し説明がいるように思います。

文化人類学では、集団の成員や集団自体を形成・維持するためのあらゆる生活様式、ないし思考様式とされ、芸術文化概念より広いとされています。従って、震災という自然災害を契機に人間の生き方、考え方の根本に変更を迫る事態に直面した今回のケースを想定すれば、人命や生活と一体化して震災弱者の生活様式の在り方を文化復興として考える意味はあると考えます。

「人の完全復興は困難、費用と時間をかければ確かに復興は進むが、この復興について来られない人々が居ます。瓦礫処理が済めば、1年か2年で家を建てることができるのが通常だろうがもはやそのような活動ができない人々が居る。」との指摘は、個々人の考え方、事情の違いに起因するのかもしれない。しかし、仮設住宅での孤独死のみならず、こうした事態に至るケースは震災弱者の目から見た復興のあり方に通ずると思われ、本質を突いているように思われるのです。

こんな事例報告があります。

電動車椅子では外に出られない。屋内はバリアフリーだったが玄関にスロープがない。誰にも邪魔されない90分に津波が襲ってきた、これは補助者が居なかった例です。

軽度の知的障害の生徒が下校途中高齢の老人が家で着替えていた（窓からは津波がみえていたが高をくくっていた）のを目撃していたにも関わらず、外見的には何でもできた子、しかしあと一歩（逃げる！の声）がなく老人を救えなかった例ともいえます。

仮設住宅に入ってから生活は、①砂利道・階段・通院を我慢する、②食事も佃煮、インスタント食品、野菜ジュース、カップ麺、野菜・肉・魚と材料のバランスは取れているが揚げ物一辺倒の福祉弁当、③表札がないので戻ってこられない、④視覚障害夫婦がラジオを聴いているが、唯々じっとしている、⑤便所にあまり通えないので水分補給を抑えるなど周りから見ていて黙っている姿が目につきます。これは満足しているのではなく、我慢をしているに過ぎないのです。

「個人情報保護」の“壁”が指摘されることもあります。それは、障害者の身元確認や緊急時の避難誘導における隣近所、向こう三軒両隣の常日頃の情報共有を阻むバリアの実態が浮かび上がったためです。

文化復興・再生を改めて考える場合、こうした障害者の方々の目線で生活復興のデザインを構想しないならば、それは単なる以前の状態に戻す、復旧に留まることになり、復興再生を享受すべき生活主体者全体から取り残され、「復興についていけない人々」として文字どおり世の片隅に追いやられることになるのではないのでしょうか。

損壊した文化会館の避難路確保等の再建デザインはもとより、緊急誘導時の対象者居住状況、救命後の栄養・保健・教養娯楽その他のあらゆる生活条件の細部において、これまで以上に慎重に障害者に寄り添うことで、広義の「文化復興」の要件が明らかにされそのための環境整備が図られねばならないといえるでしょう。

じっと我慢して黙っている障害者の姿には健常者にとってなかなか見えにくい復興の視点が実は隠されている。このことを忘れてはならないと思います。

9. “想い出の歌” に寄せて、二つの出来事から

今回ご紹介するのは、東日本大震災被災地で閉校する小中学校校歌のCD化のお話です。

宮城県下の沿岸部自治体で余儀なくされている学校統廃合の動きの中で、地域拠点としてあった学校において永年歌い続けられてきた校歌には、精神文化的遺産として残すだけの意義は十分なものがあります。これをオーケストラ演奏により残そうという動きが出ているのです。

「心のランドマーク」計画と称され、石巻市民生委員児童委員の蟻坂隆氏らが務める同計画実行委員会を中心に公益社団法人日本オーケストラ連盟などの関係有志、団体がCD制作（一般販売はしない予定。）に順次着手されるそうです。

それぞれの校歌は、世代を超えて末永く地域の皆で愛唱され、絆としての役割を担ってくれることを関係者ならずとも願わずにはおれないでしょう。

この企画は今後予想される被災3県から多くの要望が寄せられることも予想されるとして、今後の推移を見ながら計画に賛同される方々から物心両面の支援を要請されていることも明記しておきたいと思います。

さて話が変わって、寒風が吹き荒れ粉雪の降りしきる過日のことです。福島県内の原発避難者のある仮設住宅を生活モニタリングで訪れました。やや高台にある建物は一昨年7月に開設され、3棟（150世帯）から成り、所帯人数規模に応じて1K～4Kまでとなっているそうです。

訪問したのが週末ということもあり、外出する人が結構おられたためでしょうか、人影も子どもの声、姿は全くといって良い程ありませんでした。

閑散としたなか、一か所だけは賑わっていました。集会所です。おりしも雛祭りを兼ねて多くの住人（大半は60代以上のご婦人と高齢者）が桜餅作りに精を出し、地区の善意で寄付された「雛人形」の飾り付けに大わらわ。地区のNPOの皆さんの協力で実現した企画だったそうです。

ここで思わぬ体験をすることになったのです。そろそろお開きかなと思っている矢先でした。自治会長さんの指示で集会所に一曲の音楽が流れ始めたではありませんか。何と故郷の地元歌が皆さんで合唱されたのです。手拍子を交え大きな元気のある声に、私たちも加わったことは言うまでもありません。その歌詞は全員に見えるようボードに掲示され、私たちは懸命に一字一句を追いかけてきました。

正確ではありません。故郷の自然の恵みとともに明らかに原発という科学技術の将来の繁栄を湛える歌詞が混じっていたように記憶しています。避難してこられてから暫くはこの歌を合唱するたびに涙が出たそうです。しかし、今はその涙すら出ない…との眩きも。それを聞いて切なくもまた複雑な思いを抱きました。

この二つに共通することは何でしょうか。いうまでもありません。吹き付ける郷愁、郷土への変わらぬ思いが凝縮した故郷の歌＝歴史的文化遺産であるということではないでしょうか。自分がそこで生きたことの証として、将来振り返った時間違いなく自分がそこに立っていて、無条件に自分を親兄弟、友と共に迎え入れてくれる音楽の力を湛えたいものです。

震災後2年目をむかえて 福島市における子どもをとりまく状況

福島市子ども劇場連絡会 川村啓子

震災から約2年が過ぎようとしています。福島市では、原発事故による放射能汚染問題を抱えた状況が、生活の中で最大の問題です。行政は、国も県も市もすべて、除染が最優先といいながら、個人住宅までとなると、なかなか進んでいる気配は感じられません。母親達が抱く危険感と子育てへの不安については、早い時期から個人差がありましたが、時間が経つにつれて、その違いは、種類のちがうストレスを生み出しています。自主避難も本当に様々な形があり、様々な問題があります。早期に、より遠いところへ家族みんなで避難したケース。週末や長い休みには県内外に避難するというケース。2011年夏休み、冬休みを過ぎると、その度に自主避難で県内外に転出する親子の数は増加しました。2012年4月になると、本格的に住所を移して転出する家族もあり、また逆に、福島に戻ってくる親子もいました。始めは母親と子ども達だけが転出避難をして、1年後には父親も避難先から福島に通勤するようになった家族。母親と小学生の弟妹だけが県外に避難して、父親と高校生は福島で生活している家族。始め、母親と乳児で首都圏に避難していたが、子育てストレスで母親の精神状態が不安定になり、福島に戻り、その後父親も一緒に宮城県に避難、父親は現在福島に通勤している家族。等等…。これらすべて子ども劇場の会員の例です。公共施設、公園等除染され、空間線量は減少しているといわれてはいますが、放射能の低線量被ばく、積算量、食物による内部被ばくの事など、放射能への不安がなくなることはありません。これから先あとどのくらいと判断するのか、判断できるのか。何をどう考えて決断するのか。一人ひとりの思いがあり、様々です。今や、この放射能への危機感、不安感については、お互いの持つリスク度が違うことで微妙な関係を生まないために、あえて話題にしないようなところもあります。

福島市には、県内の沿岸地方、原発の警戒区域等から避難や移転で転入している子ども達もたくさんいます。避難所から仮設住宅、借り上げ住宅等へと転々としながら、現在の住居も様々です。バスで通学しながら学校生活をしている子ども達もいます。震災後、私たちは、子ども劇場の公演に、そのような転入の子ども達と家族を招待するというとりくみをしました。2011年6月、震災後3か月頃には数組の家族が来場し一緒に楽しむことができました。ところが、震災から約2年になろうとしている最近の公演では、そのような招待券で参加する親子は0組でした。また最近、仮設住宅でワークショップを行なったところ、そこに子どもの姿は見えなかったのに、仮設の子と思われたくないらしい様子を感じたということでした。子どもは日々成長していくもので、子ども自身も、それを見守る大人も、日常生活が特別なものではなく、あたりまえの状況でありたいと願うものです。仮設暮らしだとか、転入児童だとか、線引きされたようなことに抵抗感があるのは当然かと思われまます。大人は子ども達の未来に責任を持って健やかに成長するためのよきサポーターであるべきです。長い子どもの成長を考えた時「特別な状況の中で」というよりは、「あたりまえの毎日の中で」こそあたりまえの子育てが安心してできるのではないかと思います。だから、福島すべての人が早くあたりまえの毎日に戻りたいと思っているのです。

2011年11月に福島大学の白石昌子先生による講演会「福島の子どもの心と身体の健康のために」を開催しました。小さい子どもを持つ母親達の不安を少しでも軽いものにできればという思いでとりくみました。先生の持論は「子どもの健康な身体と心を育てるには、大人の覚悟が必要である」というものです。本来の子どもの育ちにおいて何が大切か、大人のあり方とは？という、子育ての原点をきちんととらえる必要性についてわかりやすく伝えられました。放射能の問題は大きな問題ではあるけれど、見解が分かれるところもあり、それでも、何が真実かも含めて何を信じるか、どれだけ覚悟ができるか、ということにつきると思いました。若いお母さん達にも大変好評で、2012年11月に再び白石先生の講演会を開催しました。参加者からは、「便利な生活から発生する子どもの成長の問題に加え、「フクシマ」として注目を受ける生活環境に、豊かさとは…？と思わず

にはられません。ですが、これにとらわれることなく、本来の子どもの育ちに対し、意識してかかわる大人であることの大切さに気づかされました。「子ども」を考えるいい時間をいただきました。」というような感想が寄せられました。

2011年12月から2012年1月にかけて、市内の幼稚園保育園等へのボランティア出前公演を30ステージ程行ないました。震災後たくさんの団体がボランティア公演で訪れたそうですが、外での活動を制限されていた福島の子ども達は、何か月過ぎようと、目の前で演じられる楽しいステージには自然と笑顔がこぼれるようでした。お手伝いした私たちもですが、出演者にとっても、先生方にとっても気持ちが温くなる時間でした。また、全国の子ども劇場おやこ劇場と創造団体等の支援で、「花咲かせ公演」を開催しました。2012年10月から12月にかけて、福島市内で20ステージ約4000名を超える親子がプロによる生の舞台芸術を楽しみました。子どもはすべて無料招待ということで、地域のたくさんの大人たちの協賛と支援をいただけてとりくみました。私たちは長い間の経験で創造団体との関係づくりもできていて、さらに、普段、地域の中で活動していることを最大限に活用すれば、たくさんの子ども達に生の芸術文化を届けることは決して難しいことではないと思います。こういう時こそ、いつもの活動に少し幅をもたせていけばできることがあるということを実感しています。

宮古地域の文化芸術活動の状況

宮古市芸術文化協会
事務局長 澤内逸陽

1. 震災以後の文化施設の状況

震災から2年過ぎましたが、市民が活動の成果を発表する主要な場である市民文化会館は未だ復旧の途についていません。この施設の流失は免れたものの、浸水が激しかったため、再開には時間がかかるようです。それでも、平成26年度中には再開の予定となっているようです。

地域の公民館や地区センターなどの利用施設は、被災した公民館1館が補修を終え利用再開しましたが、ほかの施設は復旧していません。これらの施設建設はまちづくり計画との関係があるため、相当の時間を要するものと思われます。このうち1施設は再建されず、廃止されました。

利用施設の状況

施設の種類	施設数	被災施設数 (被災地区)	復旧済	廃止施設
公民館	18	4	1	0
地区センター	10	3	0	1
計	28	7	1	1

地区によっては家屋の大方が流失したところもありますが、中心市街地は大きな浸水はあったものの、他の市町村に比べると比較的多く流失を免れました。公民館の中には市役所業務を行うため利用できないところもありましたが、教育委員会や芸文協加盟団体をはじめ民間団体は、被災しなかった総合体育館や公民館、民間会社のホールなどを利用して活動しています。芸文協の会員の有志が公民館1館と民間会社のホールにピアノを寄贈しました。これにより、市民だけでなく宮古市に支援活動で訪れたアーティストの皆さんにも利用いただいております。

2. 行政の取り組み

震災があったとはいえ、宮古市は通常の年と変わりなく文化事業を実施しています。市民文化会館を使用できないため、総合体育館や学校の体育館など利用できる施設を最大限利用して事業を行っています。

平成24年度の文化事業実施状況は次のとおりです。

- (1) みやこ市民文化祭（宮古市芸術文化協会と共催）
総合体育館、学校体育館、公民館、幼稚園などを利用
- (2) 岩手芸術祭巡回美術展
公民館で開催
- (3) 岩手芸術祭巡回小・中学校美術展
公民館で開催
- (4) 学校団体鑑賞事業
 - ①男声合唱連合「極（きわみ）」＝＝＝11中学校（6会場）で開催
 - ②ストリングカルテット「響（ひびき）」＝＝＝26小学校（12会場）で開催
- (5) 一般鑑賞事業

①忍たま乱太郎キャラクターショー＝＝＝学校体育館で開催

②劇団わらび座ミュージカル＝＝＝学校体育館で開催

③みやこ郷土芸能祭＝＝＝学校体育館で開催

(6) 震災復興支援関連事業

①フェアリーバレエ宮古公演＝＝＝3会場（小学校5校、中学校2校）

②東京ディズニーランド・アンバサダー東北小学校訪問＝＝＝2会場（小学校5校）

③一般事業

・映画特別試写会＝＝＝学校体育館で開催

・アート・コミュニケーション展＝＝＝図書館で開催

・みやこ寄席＝＝＝学校体育館で開催

・舞台・演劇＝＝＝総合体育館で開催

3. 宮古市芸術文化協会の取り組み

芸文協加盟団体の中には、震災により活動に苦勞している団体が多くありますが、全国から寄せられた物心両面にわたる支援のお陰で活動を続けています。例年開催している「みやこ市民文化祭」も震災前と同じように開催しています。60回目を迎えた平成24年度も利用できる会場で開催しました。この1年の事業は次のとおりです。

(1) みやこ市民文化祭

舞台部門、展示部門20分野

(2) 合同出版祝賀会（第30回）

宮古市関係者が出版した書籍の著者を祝って、毎年、合同の祝賀会を開催しています。今年度は、句集、郷土史、絵本、方言辞典など8冊の本が対象となりましたが、昨年度と同様、震災を取り上げた書籍が4冊ありました。

(3) 復興支援関係の事業

①朗読劇「12の贈り物」

演劇団体が盛岡市の団体との共催で宮古市と盛岡市で公演。

②弦楽と合唱のコンサート

岩手県芸術文化協会との共催で、県弦楽研究会と地元の合唱団体の合同コンサート。

③公益社団法人日本芸能実演家団体協議会との共催で、田辺靖雄さんと九重佑三子さんにゲストとして出演していただき、地元のバンドとコンサートを開催。

④文化会館復興支援コンサート

ピアノ協会が文化会館の早期開設を願ってコンサートを開催。

(4) 加盟団体の活動

芸文協の各加盟団体も、会員に被災者を抱えながら従来の活動を取り戻しながら、地域や仮設住宅を訪問する活動を行っています。舞台部門団体の活動だけでなく、皐月の提供など、少しでも生活に潤いを取り戻せるような活動もしています。

4. みやこ映画生活協同組合の活動

被災した岩手の沿岸地区には、宮古市を除いて、どの市町村にも映画館がありません。宮古市には全国でただ一つの「映画生協」があります。この映画生協は生協スーパーの中にあり、「シネマリーン」という二つの小さな映画館を持っています。映画生協は、震災後の5月から沿岸地区の被災地を巡回して上映活動を行ってきました。北は野田村から南は陸前高田市までの8市町村を回り、3月現在、172回の上映活動を行ったということです。当初は学校や避難所で、仮設住宅ができてからはそこの集会所などで開催しました。上映方法も映画

だけでなく、映画とお茶会、映画と落語会など工夫をしながら人々の交流の場を作るように心がけています。この活動で、笑ったり、泣いたり、大勢で同じような思いを共有することのできる時間と空間の大切さを知ったというのです。

上映はプロジェクター2台で行っていますが、移動が多いため機材の消耗が激しいとのことで、現在は資金支援を受けていますが来年度からの活動を心配しています。また、遠くに行くのですが、現地の様子がわからないことがあり、間をつなぐ人、コーディネートする人がいればいいということでした。

映画生協だけでなく、これからの文化芸術の復興活動は、資金、物資とともに活動のキーになる人材の育成が大切なのだと思いました。

民間団体の活動など、もっと触れたいことがありましたが、紙数がつきましたので今回はこれをもって報告といたします。

南相馬市での活動報告

南相馬市小中学校 PTA 連絡協議会 会長

NPO 法人「南相馬こどものつばさ」理事長

西道典

南相馬市の東日本大震災により被災状況に原発関係による学校等の現況をまずお知らせいたします。

まず南相馬市は、原子力発電所事故により12日から15日にかけて、原発より20キロ圏内の避難指示・20から30キロ圏内の屋内退避指示が出され、30キロ圏外の規制外区域と共に3つの区域に分けられました。23年の4月22日より避難指示が警戒区域指定となり、屋内退避指示が緊急時避難準備区域に改変されました。それと同時に計画的避難区域と定避難勧奨地点が新たに設定されました。市内が5つの区域に分断されたのです。

学校はというと、南相馬市にあった小・中学校22校の子供たちが、30キロ圏外（鹿島区）で勉強することとなりました。鹿島小学校には5校の子供たち、八沢小学校には6校の子供たち、上真野小学校には4校の子どもたち、前川原体育館・農村環境改善センターには各1校ずつの子供たちが、長袖長ズボン・帽子・マスク着用で、本当にひしめき合っていて学んでおりました。夏の暑い時期は、武道館で勉強していた子供たちは、39度を超える暑さの中、扇風機ひとつで頑張っておりました。

また、津波による死亡・行方不明者も出ております。

小学生	死亡9名・行方不明2名	計11名
中学生	死亡6名・行方不明2名	計8名
計	15名	4名
		計19名

遺児・孤児については

未就学児	遺児17名・孤児1名	計18名
小学生	遺児22名・孤児1名	計23名
中学生	遺児9名・孤児1名	計10名
高校生	遺児11名・孤児1名	計12名
計	59名	4名
		計63名

この様に、子供たちが劣悪なる環境で生活する様を見、水遊び、土いじり、芝生の上で寝転ぶ、海や山で自由に遊ぶ、普通のことを普通にさせてあげたい、このようなことから「南相馬こどものつばさプロジェクト」が始まったのです。平成23年度は、約1,000人の子供たちが、県外保養に羽ばたいてまいりました。

平成24年度になると、緊急時避難準備区域にある原町区の小中学校12校全てが自校で学習できる状況になりましたが、小高区の小中学校5校と津波の被害にあった鹿島区の1校が、現在も鹿島小学校と鹿島中学校グラウンドにある仮設校舎の中で勉学にいそしんでいます。

学校の除染も進み、校舎内外を見ると通常の放射線量の約倍程度になり、ほとんど問題のないレベルに達したと思われます。しかしながら生活環境区域を見ると全くと言うほど除染をされておられません。まだまだ子供達が普通に家の外で遊ぶ環境ではないのです。震災前は見守り隊と称し、ご年配の方々が登校下校の折、通学路に立っておりました。「子供たちの元気な挨拶が嬉しいねえ」けれども今はほとんどの子供達、家族の人たちが車で送り迎え状態「子供達が歩いてなくて寂しいねえ」子供たちが歩いて通学、当たり前なことが当たり前じゃなくなってる現状なんです。



本来だと南相馬市の小・中学校の児童生徒数は6,000人強です。23年度学校再開の折は約2,250名でした。24年度4月では約3,100名、帰還率50%強です。まだまだ復旧半ばです、復興などもっと先の話です。その間子供達を守っていかねばなりません。

ここで平成24年「南相馬こどものつばさ」等の活動を報告させていただきます。



夏の活動は5月より、インターネット等を通じ、林間臨海学校企画の提供協力をお願いする呼びかけを開始。5月末までに24団体30プロジェクトが提供を申し出ていただきました(市教育委員会平癒も含む)。6月1日、募集要項を市内全小中学校を通じて児童生徒に配布、同時に参加者募集を開始致しました。11日には鹿島区さくらホールに、全国の主催団体の方にお集まりいただき、全体説明会を開催、およそ200名の参加がありました。29日にはさらに8つのプログラムを加えて2次募集を開始。6日に参加募集を締め切りました。9日からは各プログラムの主催者に来市いただき、参加者に対する説明会を行っていただきました。7月21日から8月24日まで、36

プログラムが全国各地で実施され、約800名の子供、保護者が参加しました。

参加者決定については、各学校を通し、応募用紙を回収、募集人数を超えた企画については実行委員会が厳正に抽選を行い、結果を文書並びに電話でご連絡致しました。

プログラム実施時には、可能な限り出発式、解散式を行わせていただきました。

感想と課題を申しあげますと、昨年の震災を受けて、急ごしらえで始まった活動が、2年目を迎え、初年度同様の支援が集まるものか不安だったため、数多くの団体様にお声がけさせていただきましたが、ふたをあけると昨年度より多くのお申し出をいただくことができ、大変感謝しております。一方で、事務局の処理能力を超えた数となってしまったため、要項記載事項の不備や説明会での時間配分などの無理が生じ、募集内容の詳細、魅力について児童生徒に十分に伝えきれなかったことがございました。また、日々の皆様からの募集状況などのお問合せにも十分にお答えできず、主催者の皆様、参加者の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

今年度は企画数が減ることを予想していたため、参加費有料の企画も運営資金についても、NPO法人化が追いつかなかったため、ネット募金等整備できず、また助成金申請等も追いつかなかったため、市外に集合する企画などの送迎などの費用が開催日までにめどが立たず、参加者負担となってしまった部分もありました。

夏以外のプログラムでは、11月に栃木JCの協力により28名(栃木の子供たちとの交流あり)、今年2月には富山県南砺市、「雪あかり祭り」「全国小学生雪合戦大会」に合計48名、春休みには、ピースボートによりオーストラリアへ12名、アースマンシップにより長崎へ12名と展開中です。

平成25年度に向けて、福島第一原発事故の収束は短期間でつくものではなく、南相馬市の子どもたちの生活への影響もまだまだ残ります。除染活動等も当初の予定よりもかなり遅れている中で、保養目的での市外宿泊を伴う活動は継続的に必要です。また、保養だけではなく、子どもたちが未来に希望をもって羽ばたいて行くために、視野を広げるための外部とのつながり、様々な大人のロールモデルとの出会い、日常でのストレスの解放など支援して行かねばならない要素は多々あります。

保養プログラム以外として、5月ファザリングジャンによる仮設校舎への本棚製作寄贈(地元PTAも集合共に制作をする)協力、10月8日は子供のつばさ主催による親子料理教室・富良野美瑛地区地域資源開発センター共催により富良野の新鮮野菜を地域の方々に無料配



布しました。10月27日は男山八幡神社で開かれた「復興秋祭り」に、芸団協の協力により、特設ステージにおいてギター漫談・マジックショー等が行われ、仮設住宅の方や地域の方々の笑顔を見ることができました。11月13日は南相馬市小・中学校PTA連絡協議会と共催で、鎌田實先生と坪倉正治先生による「子どもの生きる力を育てよう！」講演会を開催いたしました(300人集まって頂きました)。12月16日は南砺市からの災害支援実行委員会の受け入れをいたしました(体育館で餅つきや芸能発表がありました)。平成25年2月28日高校生対象の講演会「命のことを話そうよ」が主催で行われました。また東京においても、坪倉正治先生による講演会がベテランママの会と共催で開かれました。参加者の方々には南相馬市における放射能の現状しっかりと把握していただきました。最後に、先日山崎直子宇宙飛行士講演会の時に、先生と個別にお話することができました。つい質問を、…宇宙ステーションではどのぐらいの放射線量を受けるんですか？答えは一日1ミリシーベルトだそうです。長期滞在だと4カ月間約120ミリシーベルトの放射線を受けるそうです。先生は「宇宙飛行士でそれが原因でガンになったと言う人は聞いた事がない、それよりもpm2.5や残留農薬の方が心配ですよ」と言っておられました。「精神的な問題・ストレス等によってDNAが傷つけられるんですよ、(タバコもね)それを直すための治癒力を向上させる方が大切ですよ」とも言っておられました。

今私が思ってること、目標を持って前に進む事(笑い)が免疫力を高める、後ろ向きに愚痴や文句ばかり言っていると免疫力が落ち病気に負けてしまう、アドレナリンをいっぱい出すことが免疫力を高めることである。子供たちに本物見せ、感動させ、目標を持たせる事。家族と一緒に暮らし笑いの絶えない家庭を作ること。一時的にも普通の生活を提供してあげること。そして元気が一番、子供たちから元気をもらい、子供たちに元気の間を作ってあげること。これが大人の仕事、そして未来の故郷の為に、見えない未来に皆一丸となって一步一步進んで行かなければならないと思うのです。



心の宝を増やし、復興へ

～子どもたちへの文化芸術支援

岩手県宮古市

主婦 藤村友樹子

はじめに、心の穴を埋めるのは？

この夏休み、息子の通う岩手県宮古市内の小学校で夏祭りが行われました。ステージ発表や屋台のほか、保護者が提供した日用品などが格安で販売されます。当日、販売の準備をすすめていると、オープン30分前に入り口のドアをたたく年配の女性がいらっしました。

「持ち物全部、流されちゃったの。だからここで買い物させてちょうだい。」

心の隅にうっすらと、？マークが浮かびました。震災直後から多くの物資が避難所や仮設住宅に集まり、あまりに大量で全てを配布し切れないという現象も報告されていました。あれから一年以上過ぎて、物資の配布は一段落している状態です。大きな紙袋を複数持参したその女性は、夏がけ布団や食器、洋服など大量の買い物をして袋を満たし、販売開始前に何度もお礼をしながら帰っていきました。

「布団はね、あるんだけど、でも何枚あってもいいから。」

「食器も去年もらったのがあるの。でも、もっとあると安心だから」…

疑問符は消え、切なさが残りました。“もの”に埋もれるようにして校庭を横切る後姿を見送りながら、全てを失った絶望感と恐怖感が簡単には消え去らないことを痛感します。その一方で、心にあいた暗い穴は、どんなに多くの“もの”に囲まれても満たされないことを思うのです。

1. 相次ぐ支援に感謝、その中で感じたこと

震災から数日～数週間。徐々に被害の状態が明らかになっていくと同時に、全国民が「自分にできることはないか」と考えたはず。結果として、様々な形で多くの支援が寄せられました。「失くしたのが多いけど、人の心の有難さを実感した。」「日本の人はやっぱりやさしいね。」ボランティアに通った避難所で、当初、よく耳にした言葉です。

しかし、三ヶ月を過ぎたあたりからでしょうか、被災者の皆さんから不安を感じさせる言葉が出るようになってきました。仮設住宅入居の抽選に当たった人外れた人、再就職が決まった人無職のままの人、友人知人から集まった支援の大小・被災者の間に少しずつ格差が出始めていたのです。

少しでも笑顔を…そう願ひボランティアに向かいながら、家も家族も無事である自分の身がどこか申し訳なく感じられ、上手に言葉がけができないまま避難所の女性達とお裁縫をしていたある日のこと。90才近いおばあさんが「今日はみんなにいいもの聞かせてあげる」とハーモニカを取り出しました。

流れてきたのは、両親が口ずさんでいたような、懐かしい昭和のメロディラインでした。周囲から自然発生的に、手拍子が歌声が沸きあがります。一曲終わって拍手、笑顔。二曲終わって拍手、歓声…そして涙。私は、皆の心を揺さぶった音楽が、被災者自身から発せられたことに軽い衝撃を受けつつも、人々が前を向こうとしていること＝心が音楽を受け入れる段階にあることを感じました。そして、慰問の形から一歩進んだ、被災者自らが立ち上がるための支援の必要性を考えるようになりました。

さて、大人たちが衝撃に心を奪われ、右往左往している間にも子ども達は成長を続けています。度重なる余震、行き交う自衛隊車両、幾度となく繰り返されるニュース映像など非日常の環境の中で、子どもたちは感情を言葉で整理できずにいました。我が家でも、“避難ごっこ”が遊びの主流で、『高台』や『自衛隊』など、今

まで口にする事のなかった単語が会話に登場しました。地震を報じる不協和音の口真似も。専門家の指摘がなくとも、親は異変を肌で感じていたものです。

そんな中、有難いことに、支援の手は被災地に住むすべての子ども達に向けて寄せられました。まず、国内外からたくさんの物資や励ましのメッセージ。そして、仮設住宅が完成してすべての避難所が閉鎖され、各学校の体育館が再び使えるようになった2学期以降は、心のケアを目的に芸術やスポーツを通しての支援が相次ぎました。

息子達から話を聞き、また、親子で一緒に鑑賞する機会を得て思ったのは、子どもに対する支援も、単なる慰問に終わらない形、例えば、心のケアと同時に人材育成に貢献する、などの内容が良いのではないかと思います。

もともと、沿岸の小さな市町村では人口流出や第一次産業の衰退といった問題を克服するための新しい町作り・町おこしが大きな課題でした。そこへ震災という大きな事態が起こり、若い力に対する期待がますます高まったといえます。あつとき、混沌と恐怖の中で他者のために動いた人々が持っていたのは、指示を待たずに自分で考え、判断し、リスクを引き受け行動する力でした。これからの町作りを支える子ども達を育てるにあたり、学力の向上はもちろんですが、豊かな感性や広い見識を養うためにはどんなアプローチが考えられるでしょうか。

2. 『トモダチ作戦 with music』 岩手開催へ

そんな折に、東京で演奏活動をしている知人から、『トモダチ作戦 with music』の活動を紹介されました。ワークショップ形式で子ども達とコミュニケーションをとりながらのプログラムと聞いて、これだ！と思い、即座に岩手でも公演をして欲しいと依頼をしたのです。

ほどなく事務の打ち合わせが始まりましたが、一番最初に「支援の押しつけにならないようにしたい」という言葉をいただき大変ありがたく思いました。というのも、当時、市内の小学校では、教育指導要領の変更に伴い授業時間数が増えた一方で、支援事業の受け入れもあり、余裕がなくなっていたからです。しかし、検討を重ねるうちにご縁につながり、2011年と翌2012年に、岩手県では大槌町、山田町、宮古市の3市町において、この素敵な作戦が実施されました。

詳細についてはNPO暮らしに音楽プロジェクト砂田氏のレポートに詳しいのでここでは省略しますが、じつと音楽を“聞かされる”のではなく、音やフレーズの意味を考えたり踊ったりと、子どもたちから自発的なアクションが出るように考えられたプログラムでした。始まる前ははてんでにしゃべっていた子どもたちが、演奏とともに体も心も吸い寄せられていきます。目が釘付けで、身じろぎせずにいる子ども。逆に、指揮者が奏者のように体を動かす子ども。それぞれが自分のスタイルで音楽に溶け込んでいき、何か空間のエネルギーが一点に集中していく様子が見て取れました。

そこまでの時間を作り出したのは、内容の質にもまして、プロジェクトメンバーの方々の真摯なお気持ちに依るところが大きいのは言うまでもありません。

実は、初年度のワークショップは土曜日の開催となり、児童を対象としては学童の小さな部屋でしか行えませんでした。依頼した側としては、これでは演奏家が手応えを感じる事ができないのではないかと恐縮していたのですが、余計な心配でした。皆さん場所や聴衆の数に関係なくどこでも素晴らしい演奏と笑顔で子ども達とコミュニケーションを取ってくださいました。その姿が、関係者から高い評価を受け、連続開催につながったのだと思います。

私としては、来年度以降もこの作戦が続けられるよう、願ってやみません。少々欲張りますと、現在のプログラムをほんの少し展開させるだけで、小学英語の必修化やキャリア教育に対応できる可能性もあると思っています。

終りに、未来につながる文化芸術支援を

沿岸の子どもたちは今、多くの宝を得ているところです。これまで、これほど多くの舞台に触れる機会も、プロの姿勢を間近に感じる機会もなかったのではないのでしょうか。

野球少年とばかり思っていた男の子が大きな口をあけて歌っています。引っ込み思案の一年生が鮮やかな色彩で大胆な絵を描いています。芸術という分野は“愛好家のもの”と思われ、親が興味を持たなければ子どもも知らずに過ごしてしまうところですが、様々な支援のおかげで、あらゆる子どもたちが自分の引き出しを増やし、感性を刺激されていることでしょう。

悲しい出来事がありました。だからこそ、この宝を大事に、大事にしたいのです。そして、元気になった子どもたちの笑顔や一回り成長した姿が大人たちに希望を伝え、心の穴を埋める手助けとなるよう祈るばかりです。

最後に、この子どもたちへの支援を、支援で終わらせることなく地元で引き継いでいけたら、その町の文化復興の一端を担うこととなるのだと思います。施設の復旧ままならない現状への対応、そしてあらゆる人たちに対する機会の供与を考えると、アウトリーチ型のアプローチを増やしていくこと、また、地域のボランティア的存在を含めたサポートスタッフの充実が望まれます。そのためにも復興推進コンソーシアムでの交流を通して新しいネットワークが生まれ、それぞれの地域や対象に応じたモデルケースが増えていくことを大いに期待したいと思います。



2011年
山田町立山田南小学校学童クラブにて



2012年
宮古市立藤原小学校学童クラブにて

「花咲かせプロジェクト」 子どもはそのまま未来である。

子ども劇場おやこ劇場全国フォーラム東日本大震災対策本部

子どもとアートプロジェクト“明日” 事務局長

柳弘紀

明るい発展的な未来を無意識のうちに前提とした高度経済成長の時代が終焉し、それに引き続いたバブル経済の破綻とともに始まった先行きの見えない経済の長期的不況。そして、グローバル化という名のもとでの急激な異文化流入は、我々の文化環境を徐々に変化させ、気がつくと周りの風景はすっかり激変している。現在、我々は誰しも必要な情報を等しく得る事ができ、自由に発言することが可能である一方で、生身の個々は水面の木の葉のように流され浮遊する。いきおい「下流」は増え、格差は広がり、テレビとネット情報だけを受け取るだけの文化的貧困層が出現、沈滞は時代のムードとなった。さて、この責任をどこに問おうか、勢い、クレーマーとして振る舞うのも半ば止むを得ないことなのかもしれない。原因の分析はともかく、世の中がおおらかさを欠いた「世知辛さ」に覆われてしまったということは文化関係者ではあまり異論がないところであろう。文化を優先することは「贅沢」という風潮が蔓延し、心踊らない日常に覆われつつあったのである。

そして、この大震災である。

多大な人命と財産・社会基盤が一瞬にして失われてしまった。そして原子力発電所の事故とそれに続く放射線不安。世界に誇る日本を代表する文化であるアニメーションが、その黎明期に、「アトム」に夢と希望と未来を語らせたのは壮大なる皮肉となってしまった。取り返しのつけようのない痛みを伴って。

尊い人命はもちろん、生活と「復興」を優先しなければならないのは当然のこと、異論があるはずもない。だが、一方で「文化」を語る事が憚られる状況となってしまったのも現実だ。

しかし、このまま絶望をしたり顔で語っていればよいのか。ただ、状況に甘んじていて良いのか。そこには、ここには、子どもたちが日々を暮らし、刻々と成長しているのだ。

「子ども」はそのまま「未来」である。

急激に好転しないであろう困難な現状をきちんと受け入れ認識しながらも、我々は人間として子どもたちに夢と希望を語らなければならない。そして暮らしのある「地域」で夢と希望につながる「文化」を絶やしてはならない。

ここで「地域」を定義するならば、それは必ず「子どもの生活圏」のことに他ならない。子ども（例えば小学生をイメージして）が自分の足で移動する地理的範囲とそこに存在する人間関係の範囲は、生活者たるおとなにとっての「地域」とびったり重なるであろう。

また地域において文化は風習・風俗・食習慣・儀礼・芸能・礼・歓待・催事…として表現される。生命の維持とは別に根源的な文化を徹底的に破壊されてしまえば、人々は地域で「生きて」いくことはできないであろう。「文化」とは要するに「遊び」のことである。必要不可欠とは意識されず、場合によっては「遊んでいる場合ではない」と批判される、そういう「文化」なのではあるが、それでも人は「文化=遊び」を欲する。ホイジンガを引用するまでもなく人類は「ホモ＝ルーデンス」である。文化の力は大きい。心打ち震える「文化=遊び」がその地域において「生きる喜び」となることは、誰しもどこかで実感している。「当面必要ない」としても、やはり「絶対必要」なのである。それを古より「まつり」と呼んできたのではなかったか。「まつりごと」は本質的に地域のものである。そこに暮らす子どもたちには文化は権利として保証されなければならない。たとえ、天災・人災で地域が物理的に破壊されたとしても。

我々「子ども劇場」「おやこ劇場」（以下、子ども劇場）は子どものための文化団体である。「子ども」「舞台芸術」「文化権」を守り促進することを使命とする市民団体として、生活圏である「地域」で活動し続けてい

る。様々なスタイルで地域に根ざして活動しているが、この大災害においてその被災地に暮らす子どもたちを全国的に連帯して応援すべく「子どもとアートプロジェクト「明日」」を結成し、募金（活動支援金）を募集した。2013年2月末現在で1,000万円を超える額が集まったのは、ひとえに被災地の子どもたちに笑顔が届けの一念である。

我々は、いわゆるボランティア公演を震災直後に届けるというような活動は行わなかった。何より生命と生活が優先するということが、全国から寄せられる募金に託された本質的な意味を慎重に考えた結果である。ボランティア元年といわれた神戸の震災、その後の中越地震、中越沖地震などでの支援活動の積み重ねにより、「公演を届ける」タイプの文化支援は進展してきており、単純に「被災地に届ける」だけでは、「供給過剰」と「アンバランスな流通」になることは体験的に理解していたのだ。また、自分自身が新潟県に拠点を置いており、中越・中越沖地震において文化芸術の支援は喜ばれた反面、一部「有難迷惑」な状況も醸し出していたこと、「○○地域は報道が集中しあらゆる支援（文化芸術も含め）が届くが我が××町には届かない…」などの不公平感（事実かどうか別にしても）を見聞きしていた。そこで、被災地の子ども劇場の代表者と1年かけて何をすべきかをじっくり話し合いの時間を持ったのである。

その上で達した結論は、地に足の着いた、被災地域で暮らす人々が主催する活動を応援していくということであった。無償の支援公演を押し付けず、主催することにあたり負担感のない額で行えるように上演料を格安にした上で移動宿泊経費も募金をはじめとする全体財政から充当することとした。

スタイルとして特徴的だったのは、子ども（18歳、いわゆる高校生相当年齢まで）は無料招待としたことである。これは、被災の状況格差、経済格差、文化意識の格差を超え、地域に暮らす子どもたちが誰しも参加できるように願いを込めたものである。おとなもまたチケットを買うのではなく、参加者は最低1口の寄付、意義を感じた人は何口でもという形をとり、地域主催ごとの財政を賄ったのである。

作品に関しても議論を重ねた。東北6県および茨城県の代表者と何度も話し合いをもち、上演作品となる候補を絞っていった。地域で「まつりごと」を子どものために主催するという趣旨に照らし合わせて、それにふさわしい作品を選択するということ、実演家が被災地で上演したいという情熱より上位に置いたのである。一定レベルの芸術性はもちろんではあるが、それ以上に子どもを巻き込みながら身近な地域で集まって小規模に集まる事が出来る作品、そして全年齢型の作品であることを基準に選択していった。我々は毎年「子ども劇場企画作品」という分厚いパンフレットを発行するなど、子どものための舞台芸術に関する情報は集積していると同時に、実演家・団体とも上演企画側として一定の付き合いもあり、自薦他薦も含め候補作品は多数持っていた。その膨大な候補の中には、芸術性が高くても、規模が大きすぎたり、特定の年齢のみ対象（高学年以上とか幼児のみなど）であったり、内容的に「まつり」に向かなかったり、被災地向きではなかったりなどして、選考から外した作品が実際多数あった。

なお、企画を進めながら気がついたのであるが、ジャンルとして演劇が少なく（候補としてあげても地域が選択しなかった）、音楽・芸能が多くなるはっきりした傾向があった。数少ない演劇作品もミュージカルが多数を占めた。（ミュージカル3作品・演劇2作品）これは演劇を上演するための会場条件（音響・照明・舞台道具等）が被災地としてはハードルが高かったことに加え、演劇はそのストーリー性で観客の情動を動かすもので、言語・視覚表現が被災者にとっては「キツイ」芸術になってしまうのだ。例えば、起承転結がありハッピーエンドの作品だったとしても、被災者である観客は「転」に耐えられない可能性があるのである。それに比べ、芸能は人間離れした技に驚けばよいのであり、音楽はストーリーのない抽象として聴くことができるので、被災者にとって受け入れやすい芸術となるのであろう。被災地向きの演劇もたぶんあるので、一般化はできないが、ジャンルとして演劇は我々にとって「時期尚早」だったのであろう。3年後、5年後じっくり取り掛からねばならないジャンルではある。逆に、被災地を離れた首都圏・西日本などでのチャリティー公演などでは演劇は大いに力を発揮するものになるに違いない。芸術性とは異なる観点からの「役割分担」が必要かもしれない。

我々は、この「被災地で実行委員会を組織、地域の子どもたちと共に音楽・芸能・演劇・人形劇・パフォーマンス・展示・ワークショップ・遊びなど優れた文化芸術活動を主催していく」活動を「花咲かせプロジェクト」と名付けて展開した。それぞれのステージを花に喩え、同時多発的に一斉に大小様々な花が咲き乱れて、

また、次の種を蒔いていくことをイメージしてのネーミングである。ちなみに「100万人の花は咲く | NHK 東日本大震災プロジェクト」のテーマソングも「花は咲く」であるが、我々はこれを全く意識しておらず、この曲がリリースされた2012年5月23日を遡ることほぼ一年前にすでに名付けていたものである。

「子どものための文化のおまつり」をイメージしたこの「花咲かせプロジェクト」を2012年9月から2012年内、青森・秋田・岩手・宮城・山形・福島の本北6県と茨城県において100ステージ10,000人を目標として展開することとしたが、最終的には、2012年9月8日～2013年1月27日、22団体28作品、121ステージ、17,215人（うち子どもが9,975人）と、大幅にオーバーして終えた。財政的には予算を超え、厳しいものであったが、あらためて全国的に募金をお願いし、主催地域からも主催者や参加者からの寄付を仰ぎ、なんとか乗り切った。121ステージひとつひとつにドラマはあるが、ここでその全てを紹介することはできない。いくつかの特徴的な事例を以下に抜粋することとする。

宮城県本吉郡南三陸町の旧歌津町での取り組みは、比較的被害の少なかった大崎市在住の子ども劇場の男性会員が、足繁く避難所に通って実現した3ステージである。震災直後の炊き出しから関わり、避難所の被災者に信頼を得ていたことが実現につながったのである。主催者は、老人と子どもが避難所において安心していられる居場所がないことに気がついていたので、何よりも「楽しいもの」「ホッとできるもの」という視点で作品を選択した。9月17日人形劇団むすび座（名古屋市）「おまえうまそうだな」、10月6日こまのたけちゃん（東京都）「あそぶあそび!」、12月22日リーフ企画（東京）「歌子さんのはじめてのコンサート」の3ステージである。この歌津町はテレビで報道されている南三陸町役場付近と同程度の被害があつたにもかかわらず、報道等がなされることがなかった地域であることもあり、積極的に支援することにしたとのこと。避難所での困難としては、同じ歌津町内でも違う地域の自治会がいくつか寄り合った避難所で、同じ場所で暮らしているにも関わらず、しっかりと交流がなされていなかったということである。しかし、外部支援者、しかも、文化支援者としての存在は、すべての自治会に公平に取り扱われ、自治会を越えて一堂に会する機会を提供することとなった由。今後の要求も高いとのこと。主催者の情熱が地域を動かしたものになった。

9月30日米沢市で行われたロバの音楽座（東京都）「愉快的コンサート」は、距離的に被災意識が比較的少ない地域ではあるが、峠一つを超えるだけでどおり着ける近場として福島県からの母子を非常に多く受け入れている地域である。最終的に福島に帰るのか、それともここ米沢に住み続けるのか迷い、地域と関わりを持ち切れないう母子たちを、主催者（米沢親子劇場）は突き詰めることなく受け入れ、おだやかな古楽器による質の高い音楽と出会うことにより交流を進展することとなった。

福島市で行われた劇団俳協（東京都）「かいけつゾロリ」の取り組みは少々異色である。「花咲かせプロジェクト」は前述したとおり、子どもの生活圏たる地域での上演を目指したものであるが、福島市の中心部に位置する福島県文化センターの大ホールを会場とし、基本の趣旨の「地域」とは異なるものとなった。放射線の影響により、外遊びを避け、集団遊びが困難な地域として、そこに薄く広く暮らす子どもたちの大多数が一堂に会し、元気を確かめ合い、同じ作品を鑑賞することにより、等しい感動を分かち合うことが福島市を中心とする広い地域の願いであったのだ。震災により傷んだ大ホールの補修終了直後の10月14日、1,800人のホールは子どもたちの笑顔で満席となった。

RMAJ（特定非営利活動法人 Recording Musicians Association of Japan）は、スタジオミュージシャンを中心にした業界団体である。ここには、メジャーでも活躍する「おおたか静流」をメインボーカルにして、バックバンドはスタジオミュージシャンたちで構成する「おおたか静流花咲かせでんでらコンサート」をはじめとする3作品を特別に制作していただいた。NHKの番組でよく知るおおたか静流だけでなく、会場ごとに異なったバックミュージシャンのソロ演奏のコーナーでは、その技術に裏打ちされた素晴らしい演奏におとな子どもも本物との出会いにすっかり興奮させられた。おおたか静流氏には、我々の趣旨をよく汲みとっていただき、子どもたちを主人公にしたコンサートとして舞台上から呼びかけてくださった。いわく、「今日は子どものためのコンサート、好きなように聞いてね、好きな所で聴いていいよ、おとなは絶対に叱らないからね。」この呼びかけに応え、子どもたちは舞台上上がり憧れの歌手の足元で歌を聴くという贅沢が全9ステージで繰り広げられた。もっとも印象的だったのが10月8日山形市シベールアリーナで行われたコンサート。呼びかけに応え足元に集まる子どもたちに「あら、今日のタイトルどおり、子どもの花が咲いたようだわ!」とおっしゃって

くださったことが見守るおとなにも嬉しいコンサートであった。そしてアンコールに歌ってくださったのが「花」（作詞作曲：喜納昌吉）。花が咲くことが本当に実現した瞬間であった。

すべての取り組みを終えて感じていることがある。

「花咲かせプロジェクト」の活動は「復興」でも「再生」でもなく、「新たな創造」だったということである。未来そのものである子どもたちにとっても、まっとうに夢と希望を語ろうとする被災地域のおとなたちにとっても、ここで舞台芸術が果たした役割は限りなく大きなものであった。



10月8日【花咲かせPJ】山形市シベールアリーナ
おおたか静流 SONGS 花咲かせでんでらコンサート
地域担当：山形子ども劇場

文化芸術による復興に向け

～コンソーシアム復興推進員（全国組織）レポート～

公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
文化芸術政策推進業務部 政策推進業務課
大井優子

コンソーシアム会議雑感（岩手県、宮城県）

11月下旬に文化芸術による復興推進コンソーシアム全国推進委員として、岩手県と宮城県で開催された現地の推進委員の方々の会議を傍聴させていただきました。

復興推進委員には、行政、民間、それぞれの地域、それぞれの立場で文化芸術に携わっている方々、特に震災後、地域での文化芸術のあり方について腐心されている方々の中から岩手県6名、宮城県7名、福島県6名の方々にお願いしています。

岩手県の会議で特に印象に残ったのは、やはり釜石や大槌といった沿岸地域での津波被害の影響が大きく、生活基盤を失い、一気に過疎化や仕事がないという状況になっているという悲痛な思いでした。しかし、井上ひさしさんの言葉をひいて「日々の暮らしをまとめたものが文化」という話もあり、人がいる以上、何らかの形で文化活動をされる方もいる。郷土芸能を軸に仲間と支えあったり、絵を描く、歌を歌う、そういったことで心が回復することもあるといったことも事実であるという発言もありました。生活再建が一番ではありますが、集落が持続性のあるものになること、コミュニティの再建をどう進めることができるのかということも同時に重要な課題として提示され、住民の方々が自ら参加できる文化活動が求められているといった声には、みなさん大きくうなずかれていたように感じました。

また、単に建物やインフラが復旧すれば復興なのではなく、アイデアがほしい、基礎自治体の文化の形がアイデンティティとして出せることが必要という意見もありました。「愛と知性」という言葉でも表現されましたが、愛—支援だけでなく、被災した地域でどう生きていくか、前に進むための推進力が必要とされていて、それは現地の方々の思いを外部の人、専門家が入ることで新しい方向に展開していく可能性への期待も含まれていました。

宮城県の会議では、支援と受援、アートの役割についても話題となりました。「支援を受ける側が返せるようになるのが支援」という考え方も示され、また、受け入れる側がどう対処できるかで、実際の支援の効果が変わっていくという事例も語られました。受け皿となる人、コーディネーターの不足が問題視されることも多々ありますが、それは、機会を増やしていくことで関わった人の中で意識が芽生えていくこともあるかもしれません。ただ、毎回種をまく、水を撒くというところから始める必要があるとなると、とても大変です。被災地でそういった役割を誰が担えるかという、例えば現地の文化施設の職員が、日頃の業務として地域の文化的なニーズを汲み取って事業を行って行けば、そこがネットワークの起点となりえる、という議論もあります。指定管理者制度により、管理運営業務のアウトソーシング化が進む一方で、本年6月に「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」が成立し、市民のための施設のあり方、求められる人材が問われています。

また、コンソーシアムに期待することとして多く上がったのが、各地で様々に行われている活動の広報をしてほしいということでした。地域に求められる活動を持続的に行っていくには、情報を交換することでさらによい取り組みにつながっていったり、あるいは第三者から紹介されることで発展していく可能性も広がります。そういったことを後押しするには、やはり人材が欠かせないわけですが、私個人としてもこのコンソーシアムのフォーラムや、芸団協の震災復興プロジェクトのブログ「文化でつなぐ」、twitterを通して少しでも紹介していきたいと思います。

文化でつなぐ：http://bunka-tsunagu.blogspot.jp/

Twitter：bunkadetsunagu

東アジア共生会議2012レポート

12月15日、16日の2日間にわたり、仙台市の国際センターで東アジア共生会議2012が開催されました。この会議は、これまで文化庁が国際文化フォーラムとして開催していたものが、2011年度より東アジア諸国との共生についてよりフォーカスするようになったものです。東日本震災を受け、災害と共生について様々なお話がありましたが、一番感じたメッセージは、共感することが、理解や感動、行動につながる、すべてのはじまりであるということでした。それは一人ひとりの声や、アーティストが表現することで他者とよりわかちあえるようになることもあるし、それらすべてが文化であることのように思いました。公式な記録は追って作成されますが、それぞれのセッションで印象に残った発言をご紹介します。



東アジア共生会議2012 セッション1

〈12月15日〉

冒頭の奥山恵美子仙台市長の挨拶で、「市として震災対策をハードの面では進めていたが、文化の力を考えたことはなかった。今回、オーケストラの音がこんなにも人々を勇気づけるものだと実感し、復興の中での文化の位置づけについて考えていく必要がある。」といった趣旨の発言がありました。オーケストラとなると、コンサートホールに足を運ぶ一部のしか聞く機会もないのかもしれませんが、仙台フィルは震災後、四重奏などの小編成で避難所や街中で200回を超えるコンサートを行ってきました。研鑽を積んだプロの演奏は、とても力強かったり、あたたかかったり、それぞれの心に響くものだったと思います。こうして生の音楽に身近にふれ、支えられる、あるいは癒されるといった時間は、非常時でなくても各地で広げていってほしいと思います。

ルーブル美術館のクラウドディア・フェラツィ副館長の基調講演では、これまで見せるだけだった美術館の使命が変わってきたことにふれ、「すべての人に開かれた美術館を目指している」と強調されていました。その例えに「毎日公演を行って市民にひらかれている劇場と同じように」といった表現をされていましたが、ヨーロッパではあたり前の劇場のイメージが、日本では事情が少し異なります。時間の芸術であり、1回限りの生の体験、キャパシティの制限というのは、動員にとってマイナス要素のようにも思えていましたが、いま求められる（提供したい）新鮮な企画を考えて広報活動を続けることができれば、逆に劇場の存在のPR効果も高まるという側面を感じました。また、ルーブル美術館の年間入場者の約半数は30歳以下、日本の文化芸術機関の広報や発信についてもこうした取り組みに学ぶことがあると感じました。

東日本大震災の被害があまりにも甚大だったこともあり、日本では、文化芸術に携わる人も、美術品を守ったり、音楽などを提供することに躊躇してしまうような時期もありました。そんな中、ルーブル美術館が東北3県で所蔵品の巡回展の実施にふみきったのは、「危機の後、美しいものを求める傾向があり、経済状況が厳しいときほど関心が高まる」といった、これまでのリサーチがあったからだとして述べていました。文化芸術の力や社会における役割について、日頃からリサーチされて、組織の中での共通理解ができているからこそ、素早く行動に移すことができのだと思います。

福島に生きる詩人の和合亮一さんは、被災した避難所生活で「人はパンのみに生きる」じゃないか、と思ったこともあったそうです。しかし、言葉を描き続けることで目覚め、自分を取り戻すことができた。書くことで、守るべきものがあるから生きられると思い「人はパンのみに生きるにあらず」を実感したそうです。原発事故による放射能汚染を受けた福島の今の現状は、子どもたちが大人になっても変わらない。言わなければ、その

先は言えないし、今の憤りを言葉に紡ぎ形にしていく、子どもに伝えることを繰り返していくしかありません。人が集まることが守ることのはじまりであり、震災をどうデザインしていくかが、芸術のはじまりだと考えるに至った。文化について話をすることが、人生そのものであり、人間はアーティストととらえるべきではないか、といった発言をされていました。アートは、人間の創造性の発露であり、それは誰もが日常的な営みの中で行っていることだとも思います。表現をより高めた先が一般的に想像される「芸術 (High Art)」となるのかもしれませんが、まずは言葉で伝え、イメージを共有するという日常的な営みは、社会を形成する上で大切な要素となっているように感じました。

音楽の力による復興センター東北代表理事の大澤隆夫さんは、過去のピューリッツァー賞受賞者の言葉を引いて、災害が起きると「これまでになかった大きな回路ができる。そして、それはまた閉じる。」ということを示唆されました。仙台フィルは震災により閉校となる学校の校歌をCD化し、何をどういう風に残すべきか、仙台にホールをつくり経済振興、演奏を届ける、自分たちの演奏で立ち上がることに向かっています。ただ、いま様々な形で外部との連携がもたれてきていますが、いつしか閉じてしまうのではなく、閉じないで通じてほしいという願いは、みなさんもたれていることだと思います。それを可能にするのは、生きたネットワークが保たれることでしょうか。こうした国際的なシンポジウムで認識されたことで、国もぜひそういった視点を常にもって、海外との交流事業を発展させていってほしいです。

建築家の妹島和世さんは、ご自身も復興計画に携わり住民の方と接する中で、地域の人の求めることが変わってきていることをお話しされていました。当初は現地の方も早く住む場所をつくらないと、と道路や区分けといったハードのプランを進めていたのが、今は、次のステップのビジョンを描いてほしいと言われるそうです。新しい街ができるまで待ちきれず、街を出ていく人が増えてきているため、街の人が被災した土地から出ていけないで、ここでがんばろうと思えるビジョンがほしいと言われるそうです。他の海外のアーティストのお話からも、このセッションでは、想いを言葉にすること、「美しい」を共有することが守ることにつながるといったエピソードが語られましたが、被災地に住む方々の間でもまさに未来のイメージを描き、共有することが必要とされているのだと思います。

〈12月16日〉

東アジア共生会議2012、2日目は、山田洋次監督の基調講演ではじまりました。これまでの監督の映画人生に阪神淡路大震災、東日本大震災が大きく関係されていて、また東アジア共生という点でも、作品を通して語られたお話は示唆に富むものでした。

山田洋二監督は『男はつらいよ』全48作品の脚本・監督をされていますが、阪神淡路大震災の後、被災した神戸市長田区から、とらさんシリーズのロケ地にぜひ、と何度もアプローチがあったそうです。陽気なとらさんの映画を大勢の方の亡くなった被災地で撮影することはできないと何度も断ったそうですが、笑って元気になりたいから、と繰り返し申し入れがあったそうです。とらさんは普段秩序と無縁だが、秩序がないときには役に立つ。とらさんをめぐるトラブルを見て、観客が大笑いする。家族だけでなく隣人とも思いきりけんかして、関係を修復することができ、より仲良くなる。とらさんシリーズを振り返ると、家族を撮ってきたのだと思ったそうです。新作の『東京家族』は、小津安二郎さんの『東京物語』をモチーフに製作されていますが、2011年4月にクランクインする予定が、東日本大震災でおよそ1年延期されました。60年前まで日本人は暮らしの形をもっていたものが、高度経済成長とともに失った。かつては同じ文化が、いまはバラバラの文化になった。東日本大震災後、「絆」という言葉が盛んにきかれるが、近年の喪失感が絆という言葉をとらえたのではないかとお話しされていました。

また、東アジアからヨーロッパに留学し、映画を学んでいた学生が、学校で『幸せの黄色いハンカチ』のラストシーンをみたときに、まわりの学生との違和感があったそうです。戦争から戻った恋人同士の再開のシーン、見つめ合って手を取って家の中に入る。ヨーロッパ的な感覚ではもっと大げさな感情表現になるような場面で、多くの学生は物足りなく感じたのか笑っていた中、留学生の子は、自分はこの表現がわかる、と映画に共感したそうです。

基調講演をうかがって、作品の製作には土地や時代の文化が反映され、受け手の文化的背景でまた受け止め方

が変わってくるということを、改めて認識させられました。そういう意味で東アジアは同じ文化圏であり、これからの発展をともに考えていくパートナーなのだと思います。前日のルーブル美術館フェラッツィ副館長の話では、ご自身はイタリア出身だけど、EU圏となったからフランスで現在の仕事が可能になったという話もありました。普通に生活している上では、東アジア圏ということあまり意識しませんが、天災が絶えない東アジアの連携・協力がどういった形でもたれていくのがよいのか、考えるべき時にきているのだと思いました。

後段のパネルディスカッションでは、アーカイブについて日本と海外の事例等も紹介がありました。アマチュアのアーカイブ文化の醸成が必要という考えや、インドネシアで2004年に起きたスマトラ島沖地震の経験からも、アーカイブは記憶を貯蔵するのではなく、連帯だという発言もありました。総務省がデジタルアーカイブ事業を進めています、情報をどのように集め、どのように社会に活かしてしていくか、そのプロセスも重要になってくると思います。

上智大学のデビット・スレイター准教授は、学生のボランティアを組織し、被災地でのきき語りをを行っているそうです。3.11前の生活、3.11から今まで、将来についてうかがったとき、地域の問題は、3.11の前から起きていることが多くの方の話の中で見えてきたということに加えて、参加した都会の学生の中には、集落が何を意味するのかわからなかったけど、きき語りを行ったことで理解できたといったことがあったそうです。繰り返す話をすること、関係性を維持することが重要だということ強調されていましたが、被災地もさることながら、日本社会のいたるところで必要とされていることではないでしょうか。

学習院大学の赤坂憲雄教授は、「細分化された縦割りの提案をまとめる国のやり方には限界があり、民間でやわらかくネットワークする時代。コミュニティや小さな記憶の場の復元が求められているが、地域の博物館が記憶の場として働いていなかった。文化行政の力が必要である。」と強調されていましたが、現場で機能するためには、地方自治体、そして国の考え方の整理と必要な人材の配置といった具体的な変革が求められます。

この2日間、震災を軸に東アジアの共生について交わされた言葉の中で、いくつかの方向性が見えてきました。ぜひ、それぞれを前に進めていってほしいと思います。

写真提供：文化庁



東アジア共生会議2012 セッション2

『希望の木』 — 1冊の本から広がる世界

大きな津波が襲った陸前高田の松原に残された1本の木。2012年の3月11日に、私も現地で対面しました。その日は、支援イベント*のため、被災されたミュージシャンの方々、東京から駆けつけた歌手の方々と上長部地区を訪れていました。みなさん厳粛な気持ちでこの日を迎えていらっしゃいましたが、つかの間、音楽に癒され、明るい気持ちになる、そんな時間が少しでも前に進むほのかな灯りになれば、と思いました。地震による地盤沈下で、海のそばでは一部道路が水浸しになり、車の通りも少なくなりましたが、本当に1本だけ「ここにあります」と寂しそうに立っていた姿が目には焼きついています。

あれから1年、作家の新井満さんが陸前高田の1本松を題材に書かれた『希望の木』の存在を知り、ご自身の朗読をきく機会を得ました。素敵な声の表現に加え、新井



新井満氏（作家）

さんが作曲された音楽で情景は臨場感を増し、バックに流れる山本二三さんの美しい絵で想像の世界が広がりました。新井さんの散文詩に感動された美術監督の山本さんが、アニメーション映画**の製作に着手され、その原画を背景とした舞台となっていました。当日、会場には『希望の木』をもとにオペレッタを創作し、文化祭や新入生歓迎会で上演している埼玉県彦糸中学校のみなさんも会場にいらっしやっていました。

トークセッションでは、「1本松がどうして残されたと考えますか？」そんな問いかけもありましたが、まさしく「事実は小説よりも奇なりではないでしょうか」。パンドラの箱のように、すべての災いが飛び出していったあとに、唯一「希望」が残った。陸前高田の1本松の存在に、勇気づけられた人がどれだけいるかは、計り知れないと思います。『希望の木』では、ひとりぼっちになってしまった松の木の精の気持ちが、切々と伝わってきます。そして、みんなの分まで生きよう、みんなの“おかあさん”になりたい、と思うに至る。—美しい写真とともにひとつの物語が記されたことで、多くの人が追体験することができ、さらに様々な形で創作の輪が広がっていることが、また大きな希望につながっていると感じました。

* 参照 URL <http://bunka-tsunagu.blogspot.jp/2012/03/blog-post.html>

** 参照 URL <http://kibounoki.com/index.html>

震災から考える地域社会と文化

3月15日（金）、国立新美術館講堂にて文化芸術による復興推進コンソーシアム シンポジウム「文化芸術を復興の力にII」が開催されました。冒頭の宮城県名取市に住む落語家、六華亭遊花さんの一席では、独特の東北の訛りで震災当時のこともふれられました。遊花さんは、自宅が被災しながらも、何かできることを、と各地の避難所へ行かれています。ただ、みなさんの生活の場でいきなり落語という雰囲気でもなく、東北のお茶の習慣にならい、つけものをもって、和んだところで落語をきいてもらっているようです。シンポジウムの会場でも、東北弁や地域の特徴のあるネタにどっと笑いが起きて、晴れやかな表情が広がっていました。

続くパネルディスカッションでは、被災3県で復興に携わっている文化芸術関係者や行政の方々が、現地で感じていることや今後について、それぞれ語りました。調査では、被災自治体の2割において復興計画の中に文化に関する記述がなかったことが明らかになっていますが、行政の扱う市民生活へのサービスの中では、意識の薄い分野であるかもしれません。一方、パネリストのみなさんの発言では、それぞれの事例をあげながらも、主に文化芸術に携わる専門人材の不足や文化を軸にしたまちづくりについて強調される声が多くあがっていました。

私は、被災地を訪れ、支援事業の企画や運営に加え、調査事業のために様々な方のお話をうかがう機会がありましたが、被災地でいま問題となっていること、高齢化による人材不足とまちの将来への懸念は、近い将来どの地域でも起きることのように感じました。地域社会は、産業構造の変化、都市化と人口の流動によって、いびつな年齢分布となり、人々と地域とのつながりの希薄化が懸念されています。それが被災地では、多くの方の命が失われたことで一気に進行しました。

昔は各地に世話役的な人、地域で困ったことがあったときに率先して動いたり、祭りなどの催しをひっぱり手がいたのが、現代では自分の仕事以外には手をださないような分業の社会になりつつあります。地域の人と人をつなぐ、心の交流ができる場をつくっていく、地域の資源を輝かせていくことが、これからの社会に必要なことではないでしょうか。市場経済の世の中では、もう、「誰かがやってくれるだろう」ではなく、それをやる人を育てて、それが仕事となる制度をつくらなければ、成り立たないのではないのでしょうか。

被災地への支援という形で、文化芸術の活動が盛んに行われています*が、これは地域社会や子どもたちのために文化芸術を通していろんなことができるという事例でもあり、全国各地でも考えていってほしいと切に願います。

* 参照 URL 「文化芸術活動の被災及び復興の状況（被災地からの報告）～2012年度～」 <http://bgfsc.jp/report/detail.php?id=35>

大道芸人達の被災地交流

サーカスアーティスト 金井圭介

2011年10月、東日本大震災から半年経った頃のことだ。

秋刀魚の港

「うお…、なんか曲がってない?!」

外の景色を眺めながら、車に同乗している仲間達と目を丸くする。石巻港へまっすぐ続く道の両側に垂直に建っているはずの電信柱が、好き勝手な方向へ伸びている。

「すごくない! やばいよね? なんか斜めってる…」と皆、独り言のように呟く。

戸惑っている僕らにはおかまいなしにフロントガラスの向こうから80度から100度ぐらいにお辞儀した柱が両側に消えてゆく。

その歪んだ風景は、建物も柱も90度があたり前の世界から来た僕たちを不安にさせるには十分だ。

ズレてしまった風景は、自分たち大道芸人がこの場所に来た「復興支援」という動機にも揺さぶりをかけてくる。

いままでも「復興支援」をお題目に東京周辺でいくつかの活動に参加してきたが、本当に役にたっているのかどうか確認するすべがない。

その曲がった景色を見ながら、そんなことをボンヤリ考えていると、高さ8メートル近い津波が襲った石巻の港沿いの、かつて住宅や商店があった場所にたどり着く。

20年ほど前にこの港町のホールで公演をやった記憶がよみがえる。あの時も今と同じ、ちょうどサンマの季節で、地元の漁師の人達に、生まれてはじめてサンマの刺身を食べさせてもらった。

車外に出ると、生臭い匂いが鼻につく。

大きながれきは撤去されたあとのようで、誰もいない荒涼とした風景の中に残留物や解体されていない建物がポツンと建っている。

ほんとうにこの街でサンマを食べたことがあったらどうかと、自分の記憶すら怪しい…。

衝撃的な石巻港への寄り道を経て、内陸に30キロほど入ったところにある古川南中学校に到着。地震で半壊した体育館の改修を終え、お披露目として行う芸術祭で、自分たち「くるくるシルク DX」のステージを見てもらいにここにやってきた。

学校正面を入ってすぐの廊下では体操マットが敷かれている。横から走り込んできたジャージ姿の生徒達が僕らの目の前でバク転、宙返りなどの連続技を決めていく。そのしなやかな動きには思わず拍手せずにはいられない。自分たちの特技を見せにきたのに、生徒達の躍動感あふれるワザに魅せられてしまった。あとで分かったことだが、震災で体育館が使えなくなったために、廊下が体操部の臨時練習場になっているらしい。

芸術祭本番

学校の体育館が元通りになり、そこで行われた生徒達のバンド演奏や体操演技、そして僕らによるパフォーマンスは、会場みんなの歓声に支えられ、大いに盛り上がった。

「ピンク~! イエロー! ブル~! レッド~! (僕らのステージネーム) キャー!!!」などまるでロックコンサートの歓声。

パントマイムでカラダを動かしてもらうミニワークショップや、ステージ上での生徒へのインタビューなど、生徒達にも積極的に参加してもらおう企画が好評で、僕らにとっても思い出に残るステージだった。

震災以降、悲しいニュースに囲まれ、体育館でやってきた部活やステージ発表も行えなかった生徒達の鬱憤。

それが一気に解放されていくのが見えるようだ。みんなの声援や笑い声をうけて相乗効果で僕らの演技にも力がみなぎる。

見る人の感覚に、直接うったえるパフォーマンスに言葉はいらない。他人と触れあい、楽しむことがいかに重要なことか。ネットが普及し、面と向かったコミュニケーションの機会が減っている今の社会にこそ、お互いに身体を張ったイベントが価値を持つ。



かつて人類が火をおこし、そのまわりで歌い踊り、生きている自分達と自然や宇宙が同じ存在として繋がりを持っていたときのように、優れた文化芸術は人の意識を別な領域に運ぶことを可能にする。

その儀式には遊びが必要だ。本気で取り組む遊びを見つけなければいけない。誰も傷つけず、自分自身もやればどんどん元気になる遊び。大道芸やサーカスのパフォーマンスにはそんな魅力があると思う。

被災地交流

僕らがいくつかの復興支援活動をしていくなかで、実は支援しているという感覚では無いことに気づいた。「支援」という言葉の中には、困った人に手を差し伸べるという意味の先に、力のある人が弱い人へ手を差し伸べるイメージもある。だけどいつも「ちょっとオレ達そんなに力も無いし、エラくないんだけど…」と戸惑う気持ちがどこかにある。

じつは僕らアーティストの行為は、支援=人助け、ではなくて、「交流」=心や気持ちの通い合い、ではないだろうか。

少ない予算でも公演をする行為は確かに支援だけど、「見てくれてありがとう。呼んでくれてありがとう。」という感謝の気持ちもアーティスト側には常にあるのではないかな。さらに言うとなんか「あなたと出会えて嬉しい」という気持ちもお互いに芽生えるのであれば、相互感謝の交流ではないだろうか。

以前はまわりに「復興支援行きます」と言っても、腑に落ちないモヤモヤした気持ちがあったが、「被災地交流行きます」とまわりに言うことでスッキリしたような気がする。

僕たちは身体を張ったパフォーマンスを提供する大道芸人。言葉で説明しきれない喜怒哀楽をこれからも被災地に届けて、交流していければと思う。

追記

あの震災から1年経った2012年のある春の日。4人で上野恩賜公園で大道芸をやっていたら「くるくる〜!!!」と声をかけてくる修学旅行の集団が…、見ると古川南中学校の生徒達だった！

そして、その年の秋にも同校の文化祭に呼ばれ、ただやみくもに元気なだけじゃない、落ち着きを取り戻した生徒達と再会することができた。



復興支援と演劇

劇団飛行船 俳優 佐藤耕

劇団から復興支援の話を知った時、参加したい強い思いと同時に、自分に果たして何が出来るのだろうかと不安な気持ちがいっぱいでした。

2011年3月11日、僕は劇団の稽古場にいました。

今まで感じた事のない程の強い揺れに、自分の人生で初めて生命の危機を感じました。その夜は家まで4時間かけて歩いて帰り、テレビ報道を見て本当に大変な事が起きたんだと理解出来ました。いえ、後から考えるとその時は、まだ当事者としての大変さなどまるで分かっていませんでした。

震災の翌日からは、東京に住んでいてさえ身の回りに不便を感じる事ばかりでした。流通は乱れに乱れ、ガソリンや日用品がなくなり、毎日聞かされる津波災害の悲惨さや、福島での原発事故の恐怖。小学生だった僕の娘は、放射線量の高さで校庭に出ることを禁止された日もありました。

東京の僕たちがこんなに不便や恐怖を感じているのだから、被災地の人はさぞ大変な思いだろうと、日が経つにつれ段々感じられるようになりました。

復興のため僕に何か出来ないだろうか。被災地のニュースに接する度にずっと思っていました、実際には何も出来ないまま時間だけが過ぎました。

震災から半年程経ったそんな頃、劇団から復興支援の話がありました。岩手県、宮城県、福島県の幼稚園や仮設住宅などで、子供達にお芝居を届けると言う話でした。

復興支援に行ける！自分も何か役に立てる！僕はすぐに「お願いします！」と返事をしました。しかし一緒に手を挙げたメンバーの中には若者が何人もいます。福島では依然放射線量が高いと聞いています。正直、彼等を連れて行って良いものかと悩みました。「ご家族とも話をし、参加するかどうか冷静に判断してね。」と僕はみんなに伝えました。でも数日後には全員からは是非参加したいとの返事が返って来ました。

作品はいつも上演しているキャラクター・ショーでしたが、入念に稽古をし直し、浮き立つような気分で川崎の稽古場を出発！

被災地に着いて最初に感じたことは「恐怖」でした。海辺の街はほぼ津波で流され、空白の土地で間近に迫った海に対峙した時、もし今地震が起きたらどうすれば良いだろうと、足が震えるような感じでした。

ところどころに、店であったろう建物がポツンポツンと残っているだけの街並み。これから冬が来るのに、心許ない仮設住宅で未だに生活されている多くの家族、街外れに漫然と積み上げられた津波被害の車、車……。

最初の幼稚園での事、いつものような歓声と笑いに包まれた本番の後、園長先生が僕たちにこう言われました。「震災後、子供たちが本当の笑顔を見せる事がなかった。」と、そして「今日、子供たちの笑顔が見られたことが何よりも嬉しい、本当にありがとうございます。」

園長先生が語ってくれたあの日の話は忘れられません。幼稚園のすぐ側まで水が迫って来た事。ただ幼子^{おきなご}の命を守りたい一心での必死の行動。その時の判断が正しいか考える時間もない中で、近隣の方と協力して高台まで避難したこと。大切な人も物も沢山なくしてしまったこと……。

全てがあまりに生々しく、現地で起きた事の重大さを、ただ傍観者でしかない僕は受け止めきれず、やるせなさ、同時に余裕の気持ちで助けてあげようと考えていた上から目線の自分に腹が立ちました。東京でトイレトペーパーや、納豆が買えない事のイラつきだけで事の重大さが分からず、何も助けられず、ただの偽善者だったことに気付かされたのです。

子供達にお芝居を届ける意義ばかり考えていましたが、先生も皆被災者でした。ご家族や大切な人を震災で失った先生が、余震の度に震災を思い出す子供達を「大丈夫だよ。」と、必死で励ましている日常がそこにありました。

震災で子供達は大きなショックを受けていながらも、しっかりと現実に向き合っているように見えました。

兄弟を失った子、友達を失った子、傷ついた子を、元気な人が励ます事が、ここでは当たり前のようになされています。

当初は、僕も励ましてあげようとの思いがありましたが、実際にこの環境で生活されている方の話を聞くうちに「頑張って下さい」とは言えなくなりました。もうすでに充分頑張っている、頑張り過ぎている人たちに、果たして自分たちは何が出来るのだろうかと本当に考えてしまいました。

僕たちは役者です。出来ることはお芝居をすること。お客様の前で精一杯演じることだけです。役を通してしか励ます事の出来ない僕たちだからこそ、お芝居を観て頂き、その一瞬でも笑顔になって頂ければと思い、力の限り演じて来ました。

今日までに100ステージ以上の復興支援公演で、多くの子供たちの笑顔に触れてきました。子供たちだけでなく、先生や父兄の方から、心の底から楽しめたとの声も頂きました。感謝の言葉も沢山頂きました。劇中の「勇気100%」を子供たちは笑顔一杯、大人たちは涙ぐみながら一緒に歌いました。

現地で子供達と触れ合っていると、とても人懐っこく人との距離が近い事に違和感を覚えることがあります。震災後から情緒が不安定になり、誰かといないと不安なようだと言われていました。復興支援は終わりが無いと感じます。まだまだ長くかかると感じます。

最近、子供を亡くした遺族の方が、幼稚園の対応を訴えるというニュースを目にしました。災害の被害者が被害者を訴える、そんなやりきれない程の傷を負った人が、まだまだ沢山います。心の傷が完全に癒えることはないと思います。しかし東北の方々は、それでもしっかりと前を向いて歩み始めています。

東京で忙しくしていると、震災があったことも忘れてしまいがちです。忘れられることが、一番辛いと言っている人が話していました。

これからも共に、震災を受け止め、復興に向けて歩み、演劇を通じて少しでも笑顔届けたいと真剣に感じています。復興支援は、継続こそが一番大事な事だと思うからです。

共に頑張りよう日本！笑顔の子供たちを見ながらそう念じている毎日です。



震災から2年。 東北のこどもたちと出会う中で。

ただじゅん企画

舞台実演家・表現活動インストラクター

多田純也

東日本大震災から2年。長くもあり、あっというまのようでもある2年間です。

震災直後は東京に住む私も公演など仕事のキャンセルが続き、再開した保育園公演先では太鼓を叩くと「地震が来ちゃうよ!!」とこどもが耳をふさぐなど、東北だけではない被害と影響の大きさを感じたものでした。

岩手県出身ということもあり被災地を身近に感じ、早く現地に駆け付けたかったのですが、国道の開通とガソリンの確保のニュースをまち、1ヶ月後に東京おもちゃ美術館のプロジェクトに参加し、おもちゃセットなどを持って陸前高田の避難所の子どもたちを訪問した活動を皮切りに訪問活動を始めました。気がつくとなんか活動で2年間で40回以上、青森から福島まで、東北道、常磐道を往復し、東北をたずねました。何かをしたとか、届けたいというよりも、そこに身を置きたい、津波の跡を見届けたい、そこにいるこどもたちにいたいという気持ちが強かったような気がします。

現地に滞在して活動されている方達に比べればわずかな体験ではありますが、様々なプロジェクトの皆さんに交通費を負担していただくなどして送り出されていますので、報告の義務があると思い、上演の中や様々な場面で被災地のお話をさせていただいています。

最初の頃は、津波の光景と避難所の雰囲気、続く余震にこちらの気分がのまれてしまい、ひるむ私たちにこどもの方から声をかけてくれて勇気ももらい実施することもありました。しかし、あそびの中で交流が進むと笑顔もでて、短い芸能やお話の上演などもすることができました。



仮設住宅入居が始まり、避難所がなくなって保育園などが再開すると保育園などへの訪問公演が増えてきました。また、ボランティアではなく、公演料や講師料をいただける公演やワークショップも実施されてきています。

また、自分が現地に行くだけでなく、児演協などでつくる、子どものための舞台芸術創造団体の会「東日本大震災支援対策室」の実行委員会にも参加し、被災地と劇団や音楽団体をつなぐ制作活動も行ってきました。

訪問先、派遣先の児童館長や保育園職員さんは、「津波の中で助かった子どもも、目の前で流されてゆく人を目撃したり、余震で傷ついている、ぜひ楽しい舞台を見せたい」「震災後初めてこうやって集まって楽しい時間を過ごせた」「笑っても良かったんだと気がついた」などと喜んでいただけます。もちろんこどもたちは本当に笑顔で観てくれます。

宮城県気仙沼のある私立保育園。津波で建物が破壊され廃園になったものの、保護者の願いに応え保育士がボランティアで再建。賛同した建設会社が新園舎を寄付する開園式での上演など、地元の方と支援者の力を感じる感動的な場面が多くあります。ある幼稚園では「楽しい舞台を亡くなったこどもたちが客席の後ろで一緒に観ているように感じた」と先生が語りました。舞台を見る観客の側に通常ではない背景があります。

初期の頃は出会うこどもたちに「退行現象」や「幼児化」のような状態の印象を持ちましたが、2年後の今は一見通常に戻っているかのようです。しかし、町の景色も全く元に戻っていない被災地のこどもたちの心の

中にはまだまだ多くの思いが沈んでいるものと思います。

上演実施にあたっての一番の困難を感じるのは、コーディネーターが少ないことです。被災地へボランティアや機会があれば公演に行きたい創造団体はたくさんあるのですが、現地とつなぐ方が少ないのです。

実施の派遣の仲介をしてくださる団体は、地元の被災者さんたちでつくる団体もあれば外から支援に入っている団体もあります。うまくつながると実施ができますが、まだまだ周知も足りないのが実際です。

また、もともと震災前から東北沿岸地域はこどものための創造団体が頻繁に公演をしていた地域ではないのでつながりも認知も少ないこともあると思います。実施が決まって、関東から劇団を派遣しても様々な理由で公演当日実際にはこどもや親子連れが全く集まらなかったり、少人数だったこともしばしばあります。いずれにしても現地コーディネーターによるマッチング作業が重要だと感じます。

活動を通じ感じるのは、子どもを対象にした芸能、舞台、あそびなどの支援活動はどうしても「学習支援」「医療支援」などのあとに回されてしまうのだという事実です。しかし、これは被災地に限った事ではなく、子どもたちに舞台を届ける活動の通常姿であり課題です。これからも文化芸術芸能、そして子どもたちのあそびの活動の「市民権」を獲得する努力が必要でしょう。

このところ、福島県への訪問も増えているのですが、津波被災地とはちがう、原発震災の放射線被害の影響は大きいです。警戒避難区域からの福島県内や関東に避難しているみなさんのイベント、外で思い切り遊べない子どもたちを受け入れるキャンプ、などへも関わってきました。避難し、家族もバラバラに暮らす苦悩は解決の見通しがないため、厳しいものだと感じます。放射能への対応の考え方がそれぞれなので、一緒に話し合えないところにも難しさを感じます。福島県小野町では、公演先の公民館で同時刻にホールボディーカウンター検査が行われ、上演会場の隣が更衣室で白衣を着た方が廊下を移動されて、日常の風景になってしまいました。集まった幼児をだくお母さんと話げができましたが、この状況が続く事は憂慮すべき事です。県が室内遊び場を推進していることもあり、室内での上演活動は歓迎されています。福島でも直接出会い一緒に考えられたら良いと思っています。

いまだ31万人が避難生活を余儀なくされ、展望が見いだせない被災地でのこれからの創造団体の関わりは、これまで続けてきた、癒しやひとときの楽しさから勇気を分かち合う上演活動とともに、ドラマや音楽の中に共に未来を考えあう作品の上演、表現活動が求められてきていると思います。

この2年間多くの創造団体が、首都圏や中部、関西など全国でチャリティー公演をしました。そこでは、観客と創造団体が芸能、音楽、演劇を通じ、呼応して被災地を応援しようという独特の空気が生まれました。

震災をへて、それぞれの子どものための創造団体は作品や上演、ワークショップなど新たな創造に取り組みはじめています。東北でのこどもたちへの出会い、創造への試行錯誤のなかで、東日本大震災を乗り越えることが求められているのだと思います。東北での活動は、自分を見直す作業です。私も微力ながら、考え、迷いながらも続けていきたいと思っています。

JASRACの復興支援活動の概要について

一般社団法人日本音楽著作権協会

JASRACが東日本大震災からの復興支援のために実施してきた活動は以下のとおりです。(下線が実施済みのもの、**太字**が現在も実施しているもの)

記

1. 日本赤十字社へ義援金を拠出

2011年5月19日にJASRACから義援金3,000万円を、同年10月14日に会員・信託者などから募った義援金に海外の著作権管理団体から寄せられた義援金を合わせた4,495,007円を、それぞれ日本赤十字社に送金しました。

2. 被災地における著作物使用料の取扱い

(1) 被災地で年間の包括的利用許諾契約を締結している施設の使用料をお支払いいただかないことといたしました。

【対象地域】 次の災害救助法適用地域

①岩手、宮城、福島各県の全域

②青森、茨城、千葉各県の次の市町村

(ア) 青森県：八戸市、おいらせ町

(イ) 茨城県：水戸市、日立市、土浦市、石岡市、龍ヶ崎市、下妻市、常総市、常陸太田市、高萩市、北茨城市、笠間市、取手市、牛久市、つくば市、ひたちなか市、鹿嶋市、潮来市、常陸大宮市、那珂市、筑西市、稲敷市、かすみがうら市、桜川市、神栖市、行方市、銚田市、つくばみらい市、小美玉市、茨城町、大洗町、城里町、大子町、阿見町、河内町、利根町、東海村、美浦町

(ウ) 千葉県：旭市、香取市、山武市、九十九里町

【対象施設】

上記の地域に所在し、年間の包括利用許諾契約を締結している飲食店、ホテル・旅館、カラオケボックス、CDレンタル店、フィットネスクラブなど

【対象期間】 2011年4月～同年9月まで

(2) 公共図書館による蔵書の複製・公衆送信を無償で許諾

日本図書館協会に加盟する公共図書館が行う被災者支援を目的とした蔵書の複製、またはFAX・電子メールによる公衆送信を無償で許諾しました

【無償許諾の範囲】

震災により公共図書館が閉館している地域の個人・団体からの求めに応じて行われる蔵書の複製、およびFAXまたは電子メールによる公衆送信

【必要条件】

無償許諾期間経過後は廃棄する旨を複製物に表示する

【対象期間】

2011年9月まで



3. **被災者支援および被災地復興のためのチャリティーコンサート等の取扱い**

東日本大震災の被災者の支援、及び被災地の復興を目的として開催するチャリティーコンサート等は無償で許諾しています。

【無償許諾の範囲】

2011年3月11日以降に開催される催物のうち、以下の事項を満たす著作物の演奏利用、及び当該催物に付随するプログラム、チラシ等の出版利用

【必要条件】

- (1) 入場料として得た収入を全額寄付すること（会場費など、チャリティーコンサート等を開催するために必要な経費を除く）
- (2) 参加する出演者は無報酬であること
- (3) 寄付先は、義援金等を管理する地方自治体や日本赤十字社等、被災地支援及び被災地の復興という目的に適っている団体であること
- (4) あらかじめ「利用許諾申込書」に「無償許諾申請書」を添付して許諾を得ること
- (5) 寄付を行った後、速やかに収支決算書、経費の領収書及び寄付先の領収書を提出すること
- (6) チャリティーコンサート等用にプログラム等を作成する場合は、JASRAC から無償許諾を得ている旨掲載すること

4. **少年少女のための音楽鑑賞会「音楽職人が創るステージ」を福島、宮城で開催**

JASRACが2003年度から行っている「音楽職人が創るステージ」を2011年12月4日に福島県喜多方市、2012年6月30日・7月1日に宮城県仙台市・加美町で開催し、仮設住宅等に避難されている方たちを招待しました。このイベントは、プロのスタジオミュージシャンたちの演奏を楽しんでもらうことに加え、出演するミュージシャンが事前に開催地の小中高校に出向き、吹奏楽部の生徒さんなどに演奏指導することにより音楽文化の担い手を育成することが特徴です。2013年度については宮城県気仙沼市・岩手県大船渡市での開催を予定しています。



5. **こころ音(ね)プロジェクトの推進**

(1) こころ音プロジェクト

中長期的に東日本大震災からの復興を支援するため、JASRACの会員・信託者が指定した作品の著作物使用料を震災復興支援基金「こころ音基金」として預かり、復興支援に役立てる取組みです。これまでに192作品が参加しています。

(2) こころ音うたアクト

会員・信託者が被災者の方々の心の支援を強く願って創作した作品をJASRACのホームページ等で紹介し、被災者の方々に癒しと元気を届ける取組みです。これまでに67作品が参加しており、作品を収録したCD「こころ音うたアクト参加作品集」Vol.1及びVol.2を制作し、それぞれ全国の放送局や被災地の図書館などに送り、本プロジェクトへの協力を呼びかけました。



この2つの取組みにより生じ、基金に繰り入れられた著作物使用料は2012年12月分配期までに27,063,845円となっています。この基金を用いた支援活動については、被災地の今後の状況や必要性を考慮した上で実施内容を決定することとしています。

以上

魂のコミュニケーションとしての ジャグリング

ジャグリングアーティスト 望月ゆうさく

ジャグリングについて

私は現在東京藝術大学大学院に通いながら、12年間ずっとジャグリングを演じ続けてきたパフォーマーである。私のパフォーマンスはまず、観客との出会いから始まる。ジャグリングを観客が目の前で目撃し、驚きや笑いや拍手などの反応を観客が起こし、それが私のエネルギーとなり、再び観客にジャグリングでお返しする。私のジャグリングはいわば感情のキャッチボールなのである。だからこそ私は表現者として、普段考えていること全てがパフォーマンスに反映される写し鏡だと思っており、観客や演じる空間、雰囲気によっても変化する生き物のようなものであると考えている。つまり私の表現は、言葉を必要としない魂のコミュニケーションであり、心と心で通じ合う事ができる、その場限りの媒体なのである。そして観客を日常から解き放ち、非日常に連れて行くことができる必殺技である。この度の被災地での体験は、演じたパフォーマンスがその場で生活する方々の感情が写しだされた鏡であることを痛感したものであり、人間として、表現活動の重要性を再確認したものであった。

被災地応援パフォーマンス団

2011年、以前から登録していた被災地応援パフォーマンス団からの連絡を頂き、宮城県仙台市のある施設に向かった。地元の子供たちやその親御さんに向けて演技をした。

30分間のショーを、子供たちの目の前の奥行き2メートル×横幅4メートル程のスペースで行なった。ジャグリングをベースに、タップダンスを混ぜた『見ても、聞いても楽しめるジャグリングショー』である。出演料は頂かず、ボランティアとして参加した。交通費は支給され、プロジェクトに参加しやすいと感じた。

演技をはじめ、驚いたことがあった。それは子供たちが、異常なまでに野次を飛ばしてきたことである。私はこれまで全国中の沢山の保育園や児童館、小学校の子供たちの前で演技してきたが、いきなり罵声が響いたのは経験したことがなかった。ショックだった。だが演技が終わると様子は一変、子供たちが「帰らないで」と強く抱きついてきたのである。私は、驚き、不思議な気持ちになり、深い疑問を感じた。

なぜ子供たちは私のパフォーマンスに異常なまでに反応し、罵倒し、そして抱きつくのか？それは恐らく「子供たちが震災の影響でストレスを感じ、誰かの相手にされたい、守ってほしい、言葉では言えない感情を伝えたい、ぶつきたい！という感情を持っていたのではなかろうか？」と考えられる。「普段言葉で思いを伝えられたとしても、感情までぶつけることはなかなかできないのだろう。」私はそう感じた。この時私のパフォーマンスは単なる“楽しいジャグリングショー”ではなく、子供たちが抱えていたストレスのはけ口として役割を果たし、言葉ではない感情のコミュニケーションを行ったのだと思った。「子供たちがぶつかり合える場を欲している。」そう思った。

そして私自身のジャグリングに対する捉え方も変わった。ただ楽しんでもらうという純粋な“エンターテイメントショー”とは全く違う意味合いを感じ、表現活動の重要性・必要性を感じた。私が表現者としてできることはこれだと気づいた。

ふんばろう東日本支援プロジェクト

2012年3月3・4日、東日本大震災からほぼ1年後の日に、私は石巻市の小学校体育館での被災地支援イベントに参加した。「ふんばろう東日本支援プロジェクト」のみなさまから呼んで頂き、ボランティアで参加した。この時も出演料は頂かず、被災地まで車で連れて行って頂いた。

今イベントは、ジャンルを問わないアーティスト（ジャズミュージシャン・アカペラ合唱・ピアニスト・お笑い芸人など）が集まり、朝から夕方まで一日中地元の方々に楽しんで頂くイベントで、石巻市の小学校で開催された。

クラシック、ジャズ、ポップスなどの音楽や大道芸など、芸術、大衆芸能など幅広い表現方法のアーティストが集った。沢山のアーティストがそれぞれの方法で表現し、地元の方は入れ替わりながら、楽しんでおられた。だが全ての表現に沢山の方が見に来るわけではなく、時間帯や表現内容によって観客の数も、反応も左右した。難しすぎる表現をされる方もいて、鑑賞者がどのように楽しんだらいいのか分からないといった様子も見られた。そういう点でジャグリングは現象が非常に分かりやすく、視覚的効果も強い為、老若男女問わず沢山の方に20分程集中して見て頂くことができた。演技スペースの体育館のステージは、天井の高さが低くジャグリングに適さなかったため、ステージ上と下とを組み合わせて行なった。またステージ下には他の演奏者の為にピアノが置いてあったため、それを避けながらの演技となった。



撮影：古賀義孝氏 1

表現の場をコーディネートする必要性

被災地支援イベントで、アーティストが全て自分の好きな表現を見せることは間違いである。何事も上手く見せる方法を常に考えていかなければならない。私たちの表現は一方通行ではないのである。だからこそ私たちは、被災地の方を受け入れ、考慮した上で表現をした方がいいと考える。自己満足の表現で終わってはいけない。大衆的でない表現であればある程、適した場があるはずである。そちらで表現したほうが感動は強く伝わると私は思う。また今イベントは小学校の体育館で開催された為、満足な音響・照明も無い状態であり、またオムニバス形式で演者が入れ替わりながら会が進行していくので、現地との相性の良いジャンルを選ばなければ、地元の方々の気持ちを盛り下げるだけで終わってしまう。それではいけない。ボランティアだからといっても、あくまで現地で暮らしている方々の事を考えたプログラムにしていかなければ、イベントは単なるアーティストの発表会になってしまう。そうならない為には、演じる場に合う表現を選び、またそれぞれの表現が生きる場を選び、作っていかなければならない。その為には被災地とアーティストを結ぶコーディネーターが必要不可欠である。コーディネーターを雇う為には資金が必要である。会場が大きくても小さくても、現地に合わせていくという努力の先に、観客の元気があるのだと感じた。

現地に行くことで学んだこと

また、6時間以上かけて東京から車で現地に向かうということは人間として大変貴重な体験となった。移動中沢山の景色を見て、人を見て、改めて今回の震災の大きさを、身をもって感じる事ができた。私は大震災の時、福岡にいた為、実際に被災したわけではない。また情報を得るのもテレビやインターネットのメディアで見るとのみであった。だからリアリティが少なく、どこまでいっても外から見ている状況でしかなかった。だからこそこの体験は非常に重要なものであった。ショックを受け、大自然の恐ろしさを感じ、そして人が生きることを感じ、とても大切な事を知った旅であった。

九州での復興支援舞台『時の響き—しあわせの瞬間—』の開催

「ふんばろう東日本支援プロジェクト」で出会った九州のアーティスト達と共に被災地支援舞台及びイベントを九州で企画した。場所は佐賀県の有田市の炎の博記念堂で開催した。

2012年6月4日の時の記念日に、昼・夜の舞台公演及び被災地を歩かれたアーティストの発表会やパフォーマンスなど、沢山の催しが行われた。私は舞台『時の響き—しあわせの瞬間—』の総合演出・出演を任せられ、ピアニスト3名とジャグラー1名の計4名と、地元の保育園の子供たちで構成する90分間の舞台を企画した。

テーマは【時間と出会い】、実際に被災地で歩いたアーティストが、感じた気持ちをそれぞれの表現方法で伝え、ぶつけあった。“黙祷を連想させる秒針の音”や、“すれ違うアーティスト同士が出会う運命”を描いた。

また、演目の中でピアノの音に反応して写真がパラパラマンガのように動く映像をコンピュータで作りと、それを壁面に投影した。写真の内容は有田の町を歩くシーンから始まり、ある女性が書を書き始める。その写真と写真の間には被災された東北の風景が見え、最後には、書で「日本に笑顔の花を咲かせよう」という文字が映し出されるというもの。ピアニストは自身で被災地に行った経験を演奏に、私はジャグリングの演技に載せ、映像とともに演技した。

舞台は地元の沢山の方々にご覧頂き、無事成功をおさめた。公演の終わりには、観客・演者全員で黙祷の時間をとった。パフォーマンスを通して、人と人、有田と被災地を結ぶ媒体としての役割を果たした。東北から距離がある九州では、リアリティのある内容を表現に載せることによって鑑賞者が東北をより身近に感じ、被災地を考える原動力になるということが明らかになった。



撮影：古賀義孝氏 2

終わりに

表現・文化活動は演技者や鑑賞者の心を耕す作業であり、眠ってしまった、もしくは失ってしまった生きるエネルギーを再発見する力を持っている。私はこの力を信じて被災地に向かい、この力によって被災地の皆様のいろんな表情を見ることができ、感情のキャッチボールを行うことができた。これらの体験を通して私自身も被災地について、表現について、人が生きることについて改めて考えることができた。私のジャグリングパフォーマンスは対面芸術であり、魂のコミュニケーションは私たちが生きていく為に必要不可欠な存在なのだ。とくに被災地での場合、一方通行の表現ではなく、観客の立場に寄り添ったキャッチボール・一体型のパフォーマンスが適していることが明らかになった。

表現・文化活動はこれからも行なっていくべきではあるが、今後はその質も高めていかなければならない。その為には演者だけではなく、なるべくベストな環境を作る為の組織やシステムを作って行かなければならない。そうすればより一層アーティストの人としての個性を見せられる表現ができ、その場に参加された方々が生きるエネルギーを見つける事ができるだろう。

表現活動は心を再生させ、人と人を繋ぎ、日本全体を復興させる力の源となるのである。

大道芸を被災地へと届ける

プロジャグラー ハードパンチャーしんのすけ

車を走らせていると、ある一線を越えたときに突如として荒野が広がった。津波の爪痕生々しく、ぼつりと残った家屋。震災から3カ月程経った頃。被災地を訪れた私たちの目の前に広がっていたのは、SF映画のセットだと信じたくなる光景が目の前にある亘理町でした。その日、私は「被災地へパフォーマンスで笑顔をお届け！」ことに賛同した大道芸人が集まった「被災地応援パフォーマンス団」として、亘理町を訪れていました。「被災地応援パフォーマンス団」のはじまりはTwitterでした。東日本大震災。その日の記憶をたどるといまだに生々しい映像が蘇ってきます。そう、映像。メディアに流れる被災地の映像の数々。「ジャグリングでたのしいをお届け！」と日頃うたっている私は、画面を通して届けられる過酷な現実を前に、無力感を感じました。何かできないものか。大道芸人にできることは何か。芸を通して一時でも笑顔になってもらうことはできるのではないか。そんなことを考え、Twitterで発信したところ、70名弱の大道芸人、パフォーマー、そして、大道芸ファンの方々から、反応がありました。それが「被災地応援パフォーマンス団」のはじまりです。立ち上がってすぐ、3月末には当時避難所となっていたさいたまスーパーアリーナに足を運び、双葉町から避難していた方々へエンターテイメントをお届けしました。以来、被災地で活動するNPO法人と連絡を取るなどして、細々かつできる範囲ではありますが、被災者へ「大道芸」というエンターテイメントをお届けしてきました。

2011年6月、亘理町。津波がすべてを流し去ってしまった荒野を眺めたとき、文字通り、言葉がでませんでした。目の前に広がる荒野。圧倒的な暴力の痕。そのときに「被災地応援パフォーマンス団」として、共に公演に向かったメンバーとは、「いつも通りに。」というのが合言葉でした。

路上を行き交うひとを相手に、突発的に行われるのが大道芸。偶然の出会いから始まるこの芸の形は、観客を巻き込み、至近距離で親密さを持って展開することが持ち味です。老若男女問わずに気軽に楽しめる芸、それが大道芸。その心をして、まっすぐに被災者にエンターテイメントをお届けたい、と思っていました。

私たちが訪れた避難所のひとつは、仮設住宅に移るのも困難なお年寄りが集まっている場所でした。避難所には様々な方がいるので、校庭の一角でショーをみてもらうことにして、ショーをはじめのために、体育館の中を軽く告知をしてみわります。メンバーそれぞれの持ち芸と、全員での演目を組み合わせ、30分程のショーがおわかりました。

「ありがとう」

体育館で会話をした老婦人が、車椅子で観に来てくれて、涙を浮かべながら握手を求めてくれました。

実は、その時ですでにたくさんの著名人やアーティスト、エンターテイナー、スポーツ選手などが避難所を慰問に訪れていました。「毎日だれかが来る」と聞きました。私たちもその中のひと組であった訳ですが、暖かく迎えてくれました。決して楽ではない状況の中で受け入れてくれたあの手は、私がこれから先、ショーをお届けする時に、大きな力になるでしょうし、いただいた力をまっすぐに毎回の観客に届けたいと思いません。

また亘理町では、周囲のパフォーマーに呼びかけて、寄贈するジャグリングの道具を集め、ジャグリングのワークショップも開催しました。若者を中心にたくさんの方にジャグリングを体験してもらいました。その中のひとりの子は、ものすごく集中して練習をしてくれて、次々に技を吸収していました。ショーをみてたのしんでもらうのは、もちろんとてもうれしいのですが、何か「残る」ものもプレゼントしたかったのです。「ジャグリング」という技術を伝える事で、その後たのしい時間を過ごし、さらにもしかするとまわりのひとにたのしい時間をプレゼントしているかもしれない。そうであつたらとてもうれしく思います。

時が移り、2013年1月、福島市。その日、福島市は数日前に降った雪があちこちを覆っていました。そのことを別にすれば、一見すると、日常の風景が広がっています。しかし、屋外は放射線量が依然として強く、子どもたちは長い間屋外で遊ぶことができません。そのような背景から、屋内での楽しめる遊びを取り入れてい

る学童クラブへ、ショーとジャグリング教室を届けました。たくさんの歓声、笑い声、そして、拍手が響いてショータイムは終了。そして、ジャグリング教室では「できた!」「みてみて!」という声がたくさんあがりました。

私は、こどもたちにジャグリング教室をひらくと毎回言う事があります。

「ジャグリングは失敗しないと身に付きません。どんどん失敗しましょう。難しくみえるジャグリングの技も、たくさん練習して、たくさん失敗すると、できるようになります。どんどん挑戦しましょう。」

この日、たくさんの笑顔は私は、こどもたちからももらいました。本人が言葉にできなくても、ストレスを感じることが多いのは想像に難くないのですが、そんな中で届いたまっすぐな反応の数々を前にすると、私が伝えるような事は、蛇足なのかもしれません。しかし、そうは思っても、こどもたちへの未来への応援をひっそりと込めたくて、いつもとは異なる感慨を持って言葉を口にしました。

亘理町を訪れた時と福島市を訪れた時とは約1年半という時間の開きがあります。場所が違うので単純に比較はできませんが、それでもやはり震災から復興への道のりが早急に進むものではないことを実感せざるを得ません。長い間厳しい生活をせざるを得ない被災者の気持ちを想像すると、胸がざわつきます。しかし、亘理町でも福島市でも、目の前には笑顔がありました。ここで一歩立ち止まって考えると、実際にその笑顔で照らされたのは誰なのだろうか、という思いが立ち上がります。それはまぎれもなく、私でした。よく言えば、ひとときでも同じ時間を共有できた、と言えるかもしれませんが、そう簡単にまとめられることではないように感じています。

現実にある問題を根本から解決する手段に、大道芸はならないでしょう。しかしせめて、被災地で出会ったたくさんの笑顔が私に力をくれたように、私たち大道芸人が届けるショーが新しい笑顔を生み、それが歩みを後押しする風になれたらな、と思います。



人の数だけ、「被災」はある

宮城県仙台市
演劇家 横山真

新宿で体験したからこそ膨らんでいった「被災地」の悲惨なイメージ

被災地における芸術文化活動の経験の中から感じたことを書き記す前に、まずは私自身の、震災当時のことについてを述べてみたいと思います。

少々長くなってしまいますが、現在の私の感じていることへと繋がるとも大切なことがそこには詰まっていると思うので、しばしお付き合い下さりませ。

2011年3月11日14時46分、私は西新宿のとある文化施設内におりました。そこは元々小学校であった建物の中身を改装した状態で利用されている施設であったため、揺れがある程度落ち着いたところで建物の中から施設利用者達がぞろぞろと校庭の方へと避難してきたのでした。

近年にない大きな揺れであったことと、短い間隔で度々起こる大きな余震に「これはただ事ではない」という認識をあの場に身を置いていた者の多くが抱いたようで、最初の揺れから30分以上過ぎても妙な興奮状態が続いていたように記憶しております。

やがて携帯のワンセグやSNSなどによってこの震災の全体像が明らかになってゆく訳なのですが、その情報が入ってくるまでは、この近年体験したことのないほどの揺れの震源地が、遠く離れた東北の地であったとは思いませんでした。少なくとも私は、そう思っておりました。離れていたとしても、この揺れの規模からして北関東くらいが震源なのではないかと。

しかし現実には、そんな私の想像を遥かに超える規模の震災が、東北の地に訪れていたのです。

さて、ここで個人的なことを申し上げますと、私は、生まれこそ埼玉県ではありますが、その後いわき、仙台へと移り住んでいて、人生の大半を東北で過ごしてきたのでした。高校卒業後は演劇を学ぶため東京の方へと出てきはしましたが、いずれ仙台に帰ってきてそれまでに学んできたものを地元の演劇文化の発展へと還元させることを目標としており、ちょうどこの数ヶ月前である2010年末辺りから仙台⇄東京間を度々行き来するようになっておりました、数日前にも仙台へと足を運んでいたのです。

それだけに尚更仙台の様子は気になってしまっていて、更に、新宿であの揺れを体験したことにより「新宿でこれだけの揺れだったのだから、震源である宮城ではいったいどんな状況なのだろうか…」という不安が否が応にも膨らんでいったのを未だに覚えております。

人の数だけ「被災」はあり、ひとつとして同じ「被災」は存在しない

思うに、上記のような思いによる精神的ストレスだってある種の「被災」なのではないでしょうか。

たしかに被害度で言えば東北と関東ではかなり違うものがあるかもしれませんが、しかし、それは被害のベクトルというか、質が違うだけのことで、どちらかがより重くて、どちらかが軽い、という風に単純比較できるものではないと思います。

例えば関東に身を置いていても東北に家族や友人など大切な人がいればそれはまた違った精神的苦痛を感じるでしょうし、また同じ東北であっても内陸部の方が沿岸部の方と比較して「いや自分はあの人達よりはまだまだだから…」と自らの失ったものへの想いを吐露する機会を放棄してしまうこともあり得るでしょう。

それだって、ある種の「被災」なのだと思うのです。

私が震災後に訪れた場所は、故郷である仙台、いわきはもちろんのこと、沿岸部では石巻、松島、東松島、女川、亘理、荒浜、野蒜などがありましたが、いずれも全く違った問題点を抱えているのだなということを痛

感させられました。

沿岸部と都市部では津波被害の有無の差もあるために被害の質が違うのは容易に想像がつくとは思いますが、同じ沿岸部であっても、ひとつとして同じ被災状況であったとは言い難いものがあります。地形の差も影響しているでしょうし、交通網が遮断されてしまったために孤立してしまった場所や原発事故による影響でなかなか復旧作業がうまくいかず、半年以上もインフラが全く整備されずにいたところもありました。

しかしここに挙げたものでもまだ大枠の話で、それぞれの土地の被害状況に応じて比較的大きな単位での対策を講じることが可能ではあるのではないのでしょうか。や、まあ、それだって大変な労力と時間を要することになるでしょうけれども、しかしそれは逆に言えば、労力と時間さえ根気よくかけてゆけば確実に改善してゆくことが見込める領域の話ではあるように思います。

それよりも厄介なのは、この項の最初に述べたような精神的ストレスをはじめ、震災（と、その後の原発事故）が生み出した人間関係・或いは地域間の関係の歪みなどを含めた「目に見えない形での被災」なのではないでしょうか。

何故ならば、それらは人の心の面に関わることであるため、それだけに人の数だけ「被災」の形がある、ということになるからです。

いくつかの現場で感じた「日常の中の被災」

これは仙台市内のある福祉施設にてダンスのWSが行われた際に補助者として参加していて出会った光景なのですが、ある曲がかかった時に参加者の一人の方が急に涙を流し始めた、ということがありました。

理由を聞くと、そのWSの参加者の中の一人を指して「彼の思い出の歌なんだ」と話しました。その当人は、この曲を嘸み締めるように聴いていたのですが、どこかもの寂しげにも見えたため、その時の彼の表情は今でもこの網膜に焼き付いております。

また別の場所では、とある沿岸部の地域にある小学校にて行ったWSの際に、彼らと交わす何気ない会話の中で当たり前のことのように津波のことを話してきたりしたためにどきっとさせられることもありました。

もしかするとこちらが意識過剰になっているだけのことなのかもしれませんが、しかし、その意識過剰になってしまうことすらも震災を経ってしまったからこそその結果なのだと考えてみると、これはもう避けて通ることのできない、この今の時代の日本に生きる人間である以上は付き合っただけゆかねばならないものなのだろうと、そう思うようになってきました。

特にこの東北という地では、この震災というものが何をやるにも付き纏うようになってしまったと言えます。

東北で行くことのほとんどが震災と結び付けて考えられてしまうようになってしまったし、震災以降東北へ対する注目度は上がり東北以外の地域との間で人の行き来は増えたけれども、反面、外部の人々にとって「震災」や「復興」以外での関わりが考えにくくなってしまっているようにも見受けられます。

結果、「復興支援」と証した企画やイベントが乱立し、皮肉にもそれが原因で現地発の企画がそれらに食われてしまう、という事例もいくつか耳にしたことがあります。

何を以て「被災」なのか？「復興」なのか？

これは私の個人的な見解なのですが、このような悲しい結果を招いてしまった「復興支援」というもののほど、「何を以て「被災」なのか」という観点が不足しているように見受けられます。何を以て被災としているのかが明確でないから「復興」というものが更に不明瞭になり、結果として現地民の邪魔にすらなってしまうのだと思うのです。

また、それに加えてもうひとつ重要になってくるであろう観点として、「今問題となっていることは果たして震災が原因なのか」という点も挙げられると思います。もしかするとその問題は震災前から元々存在していたもので、震災がきっかけとなって顕在化しただけなのではないか、ということです。

ここを見誤れば、その問題の根深さを甘く見積もってしまい解決までの道筋をいたずらにこじらせることに

も繋がりがねませんし、また、今後再び大きな災害に見舞われた時にもまた同じような悲劇を生みかねません。

だからこそ、現場を知る、ということが非常に大切になってくるのだと思います。時の流れと共に問題点も刻一刻と変化してゆく訳でありますし。

そうして実際に訪れてみることで現地の今の空気を感じ、現地の人と向き合ってみることが必要になってくるのだと思うのです。

そして実際に現場を訪れ、現地の方々と触れ合ってみるとよく見えてくることがあります。

それがこれまでも何度か触れてきている「人の数だけ被災の形がある」ということです。

それは、震災から2年近くが経とうとしている今だからこそ余計に強く感じてきております。

ある程度インフラが整備されてきつつあるので（その限りでない場所もまだ沢山ありますが…）、それまでの大きな問題に隠れていて見えずにいた細かな問題点が、あちらこちらから現れ始めているためです。

「カオスを、カオスなままで」その多様性がアートの強み

大枠の部分の整備が進んでくることで、そこから零れ落ちてしまっていた細かな問題や小さな声が浮き彫りになってくるのだと思いますが、そうなった時にこそ有効になってくるのが、アートなのだと思います。

そもそも、「人の数だけ被災の形がある」などという一見途方もなく困難な事態のようにも感じてしまいがちですが、しかしよくよく考えてみればそれはひとつの価値観の中に全ての人達の考えを押し込めようとする人間にとって極めて不健全な状態からの視点での発想で、冷静に考えてみればこんなにも当たり前のことはいのではないのでしょうか。

同じ考えの人間なんて一人として存在しません。

こんな当たり前のことを、ともすると現代の人は忘れてしまいがちです。

しかし、多様性の肯定こそがその本質であるアートには、その当たり前のことを思い出させてくれる力があります。

「カオスをカオスなままに」提示することができるのが、アートの強みなのです。

また、同一の空間内で多様なあり方が共存できる演劇などは、「語り継いでゆく」ことにおいて非常に優れている媒体でもあると思っております。

真逆の価値観を持った存在ですら同一の空間に共存させひとつの作品としてしまうことが可能なことから、この今の混沌とした空気感というか、人々の想いの渦のようなものも語り継いでゆくことが、或いは戯曲を演じることで以て、時代を経た後でも今の時代のこの空気感を疑似体験してゆくことが可能なのではないかなと、そう思うのです。

もちろん今の時代の人々が創り上げたものを正確無比に保存し伝えてゆくことは無理だとは思いますが、しかし、演劇に限らず優れた芸術作品というものは突き詰めてゆけば必ずや普遍に行き着くものだと思うし、その普遍性さえあれば、時代の流行り廃りなんてものをものともしない確かな強度を備えたものとなるはずで

思うに、アートが震災復興の過程で何ができるのかといたら、ここに尽きるのではないかと思います。

芸術作品に触れるにしても創作活動を行ってみるにしても、自らを含めた人間の多様なあり方を認め、受け入れ、どのようにして付き合ってみようか、それを問い直す機会を生み出してゆくこと、それがアートの力なのだと、信じております。

福島県における被災状況と 民俗芸能の再興

福島県文化財保護審議会 委員 懸田弘訓

1. 被災状況

平成23年3月11日の午後、福島県は震度6強から6弱の地震に見舞われた。その数十分後に襲った津波は、高いところでは15mを超え、浜通り地方の海沿いの集落をことごとく流し去った。その結果、人的被害は3,112人、行方不明は211人（2013.2.13現在）、家屋の全壊21,000棟、半壊71,777棟（2011.10現在）という、未曾有の惨状であった。ところが福島県はこれだけではすまなかった、津波の直後に東京電力第一原子力発電所の事故が起きた。そのために高度の放射能が飛散し、身支度をする暇もなく避難を強いられた。まず、30m離れたところへの指示で、町内あるいは近隣の市町村の公民館や学校・体育館に避難した。しかし、それも東の間、そこも高いと分かり、何と一応落ち着くまでに15回も移動した家族もある。やがて仮設住宅も造られて入居したが、その人数は99,072人、県外への避難も59,031人に達した。さらに追い打ちをかけたのが風評被害で、人権無視に近い発言もあり、2年過ぎた現在でも地震・津浪・放射能・風評被害と、四重苦に翻弄されている。

福島県内には今なお800か所以上に民俗芸能が伝承されているが、少なくとも津波で60か所が壊滅し、さらに放射能汚染により200か所以上が継承の危機に瀕している。それも芸能に地方色があり、文化財としてもすぐれているものが今回の被災地に多い。

2. 再興の現状

被災した集落の中には、被災の数か月後に再興に着手したところがあり、その後も多いとはいえないが予想以上にその動きがある。その一部を紹介したい。

相馬市の海岸沿いの原釜・松川・磯部は、漁師の多い集落である。ここも津波の圧倒的な破壊力で一変した。防風林は消え、民家はほぼ全戸が壊滅した。原釜の人口は1,225人であるが、津波で99名が亡くなった。ここには漁師の厚い信仰に支えられた津神社があり、4月には神輿渡御が行なわれ、お旅所では老若男女が総出で、獅子神楽などさまざまな芸能が行なわれる。神楽には「三人剣」「鳥刺し舞」「観音畑」などの余芸もつく。しかし、保存会長が亡くなり、会員も家族を失っているだけに、震災の年の祭礼は休んだが、1年後の4月には、壊滅した集落の中の祭場で、ほぼ以前通りに行なった。

磯部は200余戸の集落であったが、大きく破損しながらも残ったのはわずか3棟で、松林も立ち木もすべてなくなり、一面瓦礫と水たまりで、かつて民家があったとは思えない惨状である。そのために人口1,218人のうち、243人が亡くなった。墓地を訪ねたら両親と小学生の子ども2人を一度に亡くした家があった。おそらく残されたのは祖父母だけであろう。まさに悲惨という以外に言葉はない。鎮守寄木よりき稲荷神社の4月の春祭りには神楽が演じられるが、獅子頭から諸道具まですべて流されたために震災の年は休んだ。しかし、翌年には再興し、多くの信者が仮設住宅から参拝に訪れ、舞い納めた後、悪魔祓いと獅子に頭を噛んでもらっては、安心して帰途についていた。

南相馬市小高区は平成24年3月まで警戒区域で、立ち入りは禁止された。国指定重要無形民俗文化財の「相馬野馬追」は、旧相馬中村藩全域を挙げての行事だけに、今回の原発事故の影響は大きかった。それでも被災して4か月後の7月下旬に、略式ながら実施した。ことに重要な「野馬懸」の祭場である相馬小高神社には立ち入ることができないだけに、警戒区域から90m離れた原町区字高の多珂神社を借りて実施した。それにもかかわらず予想の3倍を超える騎馬武者が集まった。平成24年は、ほぼ例年とおりに実施した。同じ小高区の村

上には神楽と田植踊が継承されている。村上は90戸のうち74戸が流失し、かろうじて残った家も住める状態ではない。さらに気の毒なことに、田植踊の保存会員39名のうち、会長・副会長を含む12名が津浪で亡くなった。それでも1年後には再興を決め、10月に郡山市で開催された「ふるさとの祭り2012」で演じた。この田植踊は主として女性が踊っていて、県内ではもっとも洗練されたものである。近年は地元の小学生にも伝授し、踊だけでなく歌も太鼓もすべて受け継いでいる。

浪江町はほぼ全町が警戒区域、一部が避難準備区域で住民は全員県内外に避難している。しかし、一部の芸能は再興した。請戸は古くから漁港として発展してきた集落で、ここには神楽と田植踊があり、田植踊は地元の小学生が踊ってきた。集落は一軒も残らずといってもよいほどの482戸が流失し、182人が亡くなった。それでも被災地ではいち早く4か月後の7月に役場が移転している二本松市で練習を始め、8月20日にはいわき市小名浜のアクアマリン（水族館）で披露した。その後、県内外から招かれ、明治神宮を始めとしてすでに20数回披露している。

双葉町は地震で倒壊した家も多く、放射線量も高いために町の全域が警戒区域で、全員が避難している。ここには神楽や田植踊、じゃんがら念仏踊などが伝承されている。そのひとつ前沢地区の宝財踊は、女性によって継承されているところから「女宝財踊」といって、祭りや各種の催しで人気をかくしていた。しかし、この震災で保存会員の半数は県外に避難しているために、「ふるさとの祭り2012」の出演が最後といっていた。ところがこれを契機に、全会員の再開の機会になること、観客に喜んでもらったことなどから使命を自覚し、継続の気運が高まった。

3. まとめ～再興の原動力と今度の支援

これほど被災しながら、祭りや民俗芸能の再興がみられるのはなぜか、またそれを支えているのは何であろうか。過去にも例があった。

「天明の飢饉」は天明2（1782）年から5年間続き、今回同様に東北地方の太平洋沿岸に、ことに大きな災害をもたらした。福島県では旧相馬中村藩の被害が大きかった。餓死や離散で、最終的に領民は約3割にまで激減した。それでも藩が復興できたのは、二宮仕法を取り入れたこと、獅子神楽と田植踊が急速に広まったことによると思われる。藩内の7つの郷には郷社として雷神社が祀られており、藩主は春は豊作祈願、秋はその感謝として神楽を奉納するよう奨励したといわれている。相馬市坪田の雷神社には、最盛期には21団体も集まり競って舞った。数は減ったがその風習は今も続いている。それだけに現在も藩内の約170か所に伝えられており、これは県内の獅子神楽の約7割を占める。田植踊も多彩に発展して約70か所に伝えられており、これも約6割を占める。過酷な被災であったにもかかわらず、復興できたのは、これらの芸能が精神的な支えになったからであろう。

今回の大震災でも、同じようなことがいえる。再興できた理由を列挙すれば、次のようなことがいえよう。一つは、厚い信仰である。相馬市原釜や磯部のように漁業に携わっている方は、毎日が危険と隣り合わせであるだけに信仰心は強い。「津波は憎いが、海は憎くない」と断言した漁師もいる。これまで先祖代々、長年海に頼って生きてきただけに、海に対する感謝の念もまた深い。

二つめは、指導者の使命感と責任感である。浪江町請戸の師匠は絶望の縁にあった時、ふと「自分には田植踊がある、ここでなくしたら再興できなくなる」と気付き、声を掛け合い、ついに再興にこぎつけた。平常時でも、民俗芸能などの継承は、信頼されている強力な指導者が不可欠で、このようなときはなおのことである。

三つめは、自己満足だけでなく、社会に貢献できた喜びである。双葉町の「女宝財踊」は、再興後に公開する前には一同でこれが最後といい合っていたが、披露後は「皆に喜んでもらった」「元気を与えることができた」と感激し、引き続いて継承しようということになった。

四つめは、被災を契機に祭りや民俗芸能は「ふるさとそのもの」であることに気づいたことである。ある高齢の女性は「家や財産などすべて流されたうえに、祭りまでなくなったら何が残るの…」と訴えていた。祭りや民俗芸能は無病息災や五穀豊穡を祈って行なわれてきたことは当然であるが、それだけでなく「絆を深める場」「生きる場」であることに気づいた。日ごろから互いに思いやりを持って協力し合い、苦勞を共にして一

つのことをなし遂げて初めて、絆が深まり、助け合いの心も育まれる。これがために祖先は苦勞を乗り越えて、祭りや芸能を今日に伝えてきたとさえいえるように思われる。苦難に直面したときこそ、祭りや芸能は生きる支えになるのである。

それにつけても再興は急がねばならない。民俗芸能は「ふるさと」と不可分の関係にある。それにもかかわらず避難先に定住する方も増えており、放射能が心配で「戻れない」ではなく「戻らない」とする方が50%もいる。子どもがいる両親は、ことにその思いが強い。用具などの新調も避難生活では負担が難しい。練習場や公開の場もない。先が見えないことは、生きる希望を失わせる。心あるお力添えをお願いしたい。

被災地における郷土芸能の現状とこれから

— 無形文化遺産としての郷土芸能の立ち位置 —

公益社団法人全日本郷土芸能協会

事務局 小岩秀太郎

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、祭りや郷土芸能といった無形文化遺産（注）が豊富に伝えられていた東北地方沿岸部が甚大な被害を受け、伝承地のみならず伝承者、用具などの多くが被災した。しかしながら、この2年の間に多くの団体が困難を乗り越え再開を果たした。その雄姿は被災地のみならず全国の人々に勇気を与え、またそれらが内包する力を再確認し、注目を集めるようになった。

津波や火災は自らの住む地域を跡形もなく破壊し、高台移転や原発は先祖代々伝えられてきた地域を捨てなければならないという苦渋の選択を、突然に強制的に突きつけた。今までと同じ形で伝承をしていくことは不可能に近い。それでも、あれほどの悲惨な経験をすれば「神も仏もない」と思うのが普通なのに、避難所などで供養と鎮魂の芸能が次々と立ち上がったのである。このことは一体何を指し示すのだろうか？大津波を経験しながらも、海に向かい祈りをささげる虎舞や神楽の姿をテレビや新聞を通して目にした方も多はずだ。



2012年10月20日の釜石まつりにて船上で演じられた南部藩壽松院年行司支配太神楽（岩手県釜石市）

震災後の郷土芸能活動

津波で壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市で「^{とらまい}虎舞」が舞われたという記事が、震災発生2週間も経たずして新聞に掲載された。震災直後に^{とらがしら}虎頭や装束を探し出し、倒壊した家屋や逆さになった消防車が残る公民館の前でわずか12日後に舞われ、また同地区の七夕祭りに使う山車も津波で破壊されたが3日後には地域住民で修理を始めたという内容である。そこには次の印象的な一文があった「ここ10年で祭りがまたやれるとは思ってねえ。でも、ちょっこりちょっこりやれば、孫やひ孫の代では復活するべ」（2011年3月26日 朝日新聞夕刊）。被災地における郷土芸能の現状の第一報だったと思うが、ショックや驚きという感情以上に、震災直後で絶望的な中、瓦礫を背景に虎頭を抱えたその写真は「俺たちはこの地に根差して生きてきたんだ、この虎とともに」と言わんばかりの力強さを伝え、今まで感じたことのないほどの勇気と励ましを感じたのだった。郷土芸能や祭りといった形の無い文化にたずさわってきた私たちが、今後どのような活動をしていくべきなのかを導いてくれた記事であった。

大津波そして福島県原発事故は、郷土芸能や祭りに



活動を再開させた虎舞。2012年10月21日釜石まつりにて（岩手県釜石市）

とても收拾の目途がつかない壊滅的被害をもたらした。伝承者の死亡や避難による離散、使用する道具や装束の流失や損壊、芸能を受け継ぐ主体である地域コミュニティを一気に崩壊させた。2年が過ぎた今でも、住民の帰還や職場をはじめ生活復興に向けた将来像が描けない状況が続いている地域も福島県をはじめまだまだたくさんある。

そんな中、土地の問題で元の地域から離れた地域に建てられた仮設住宅や遠く離れた親戚知人宅に身を寄せながらも、住民たちが互いに連絡を取り合い、地域の行事や芸能を続けていこうという試みも積極的にみられた。また、地域の崩壊・消滅の危機に直面して改めて地域の歴史、文化、祖先を見直し、次世代、後世に伝えていこうとする動きも、今までにないほど活発化しているように思える。

情報集約と発信

震災後、全日本郷土芸能協会は郷土芸能に関する専門組織として情報収集と周知に取り組んできた。当協会は各県の芸能団体や研究者、愛好者を会員とするネットワーク組織でもある。このネットワークを活用して被災地の郷土芸能の情報の集積にとりかかったが、把握は困難を極めた。会員はじめ情報提供者の行方がなかなかつかめなかったことは仕方がない。しかし儀礼文化学会（東京都）と協働で主に岩手県・宮城県・福島県の被災地域の芸能や祭礼をリストアップした一覧表を作成してみても愕然としたのを覚えている。

なぜなら3県あわせて2,000を超える芸能が伝わっており、その後の調査で岩手県166件、宮城県211件、福島県415件、計792件がなんらかの被災をしている可能性があるという驚くべき結果が出たのである（無形文化遺産情報ネットワーク・2013年2月末時点）。またこの数は、いわゆる市町村が把握しているものだけで、それ以外の例えば各家庭に飾られている獅子頭なども多数存在していたことがさらに把握を困難にした。これは沿岸部の芸能の多くは自治体保護の対象にならない無指定のものであり、また芸能に限った「保存会」形式でないことに要因がある。それは青年団や消防団、契約講（主に宮城県の農漁村部の集落ごとの相互扶助組織。多くは山や施設といった共有財産を保有し、日々の生活の中での助け合いを目的とする。主に青年男子によって構成される）といった地域集団が中心となって組織されており、自治体や研究者の調査研究が手薄な傾向であったため事務局等の連絡系統が不明瞭であった。いずれにせよ、各地の有志・関係者と連絡を密に取り合い、本当に地道な調査によって少しずつリストを埋めていく作業を継続して行ってきたのである。



被災したうごく七夕まつりの用具保管庫
(岩手県陸前高田市) (うごく七夕川原祭組提供)



2012年8月6日うごく七夕まつりの前夜祭にて
(岩手県陸前高田市)

状況調査をするにあたり、伝承者の被災、用具類の流失や損壊、実施場所や稽古場の被害、住民分散等による実施日・形態の変更、伝承を支える住民の被災等、被災項目は多岐に亘る。また、今後の目途や対応の項目も盛り込んだ情報収集を行ったことで方針を立てやすくなった。集積作業においては、現地関係者からの情報、報道やインターネットの情報、各県の文化財担当部署の協力も得ることができた。これら情報は、全国の芸能関係者に全郷芸会報やWeb、ブログ、ツイッター等で周知発信をすることで、個人をはじめ報道関係や企業、助成法人等が関心を持つに至り、被災地内外からの問合せや相談、取材、そして民間による郷土芸能支援活動へと繋がっていったのである。

支援活動と課題

文化庁主導で震災直後から建物や文書などの有形文化財を救出する「文化財レスキュー」が進む一方、無形の文化財に対する救出や支援に関しては、指針さえもはっきり打ち出されることなくこの2年が過ぎた。一方、民間の団体や企業、ボランティア団体が被災地対応として取り組み始めた支援は瞬間に効果が出て、この2年間で活動を再開及び再開を希望する団体は300件近い。

このように誰もが予想していなかったスピードで再開がなされた地域がある一方で、福島県原発被害地域については2年経ってやっと数団体の声が聞こえてきたのみである。いまだその多くは地域住民の行方も分からず、集まる機会や方針決定さえも物理的・金銭的に不可能な現状であり、あるいは時期尚早であるという意見も強くあるようだ。

郷土芸能や祭り、地域行事といった無形の文化遺産の担い手は人であり、人から人へと受け継がれる。これは土地に根差してきたもので、その地で暮らす人々の連帯によって支えられてきた。しかし今回の原発事故や



2012年5月の神社例祭で演じられた雄勝法印神楽。地元住民が押し寄せた（宮城県石巻市）

津波による避難は、人々から土地を奪い、連帯を破壊し尽くした。この状況の中で復興を目指す地域は、更に強い連帯感を生み出すに違いない。そしてそこにはその地とその住民で受け継がれてきた芸能や祭りが中心に据えられるのだ。原発地域住民における継承作業は、土地に根差したものでなくなる可能性もあり、解決の方法がなかなか見出せないのだが、それでもごく一部で離れ離れになった住民同士が互いに連絡を取り合おうとしている動きもあり、そこに一縷の希望を見出しつつ、その努力に感服せざるを得ない。こうした動きが見える限り、私たちはほんの少しでも支えになれるよう、長期的に注目し風化防止のための仕組みと対策を急がねばならないだろう。



2012年2月19日に避難先の二本松市の仮設住宅で行われた「安波祭」での請戸の田植踊（福島県浪江町）（請戸芸能保存会提供）

無形文化遺産情報ネットワーク

2年が経過してもなお課題山積ではあるが、地域の方が今を生きるための心の支えとなるように、また地域文化が次代へと引き継がれていくように、一般社団法人儀礼文化学会、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、独立行政法人防災科学技術研究所、公益社団法人全日本郷土芸能協会が協働で、無形文化遺産の復興・継承支援の事業を推進する「無形文化遺産情報ネットワーク」を2013年3月に立ち上げた。

震災後、儀礼文化学会と全日本郷土芸能協会が中心となって作成してきた被災地域の民俗や祭礼の一覧表をもとに、それぞれの団体に関係する団体や個人に生の情報を寄せてもらい、集まった情報をもとに必要な支援の呼びかけや仲介、情報の発信を行ってきた。

2年を経過した今、これまで関係者間のみで共有されてきた一覧表を整理し直し、防災科学技術研究所の全面的協力のもと地図の形で公開することにした。行政や民間団体、保存会関係者、研究者、愛好者など、それぞれが持つ情報やネットワークは限られているが、それらを繋げることでより広域的で目の細かいネットワークの構築を図ることができると考えたからである。地図の公開により被災や復興の現状を広く一般に周知する

とともに、これまで支援や注目など情報が行き届かなかった地域についての情報も新たに収集し、発信していきたいと考えている。また、これら地域の文化の豊かさを魅力ある発信によって知っていただき、支援者やファンを作っていくことで、文化継承の一助となることを願っている。

現地からの情報はまだまだ足りない。むしろどんどん忘れ去られ風化していく一方である。やむなく休止していた芸能や祭りのモチベーションもどんどん下がりがつつある。情報の収集発信を再度推進することで支援や意識の向上に繋がることを期待する。

「情報まどぐち」を随時設置しています。些細な情報でも構いません。是非とも情報をお寄せいただき、また活用していただきたい。



無形文化遺産情報ネットワーク

無形文化遺産情報ネットワーク：<http://mukei311.tobunken.go.jp/>

サイト内「情報まどぐち」：http://mukei311.tobunken.go.jp/?module=contact&eid=10243&blk_id=10243

(注) 祭り行事や信仰、民俗芸能、様々な慣習、暮らしの技術など、形のない民俗文化を無形の民俗文化と呼ぶ。この無形民俗文化財を含め、次代へと引き継いでいくべき無形の文化を総称して無形文化遺産と呼ぶ。

東日本大震災・郷土芸能復興支援プロジェクト 支援金募集

(公社) 全日本郷土芸能協会では『東日本大震災・郷土芸能復興支援プロジェクト』を立ち上げ、郷土芸能に関する幅広い支援を呼びかけている。

皆さまからの寄付金は、被災地の郷土芸能活動、継承活動への支援金として役立っています。

プロジェクト支援金口座

三菱東京 UFJ 銀行 赤坂見附支店 普通 0126803

口座名 郷土芸能復興支援プロジェクト

●被災郷土芸能の詳細情報は全郷芸会報（季刊）または全郷芸ブログにて <http://blog.canpan.info/jfpaa/>

地域でのささやかなる心の復興支援

— 滋賀県での取り組み —

滋賀県文化振興事業団

芸術監督・プロデューサー

柴田英紀

「日の本に三つの景色の一と云 陸奥なる松島へ 今日思ひ立つ旅衣
着つつ馴れにしふる郷を 後に三春の驛路や」

常磐津節の「岸漣常盤松島」通称「松島」は、冒頭この置き唄から始まります。明治17年、六世岸澤式佐が作曲し、幕末から歌舞伎作者として大活躍を果たした河竹黙阿弥が作詞をしたものです。黙阿弥らしく七五調の台詞を基本としてなかなか小気味よい詞章で、名勝松島を中心とした四季折々の風景や旅人の心情、漁師の濱唄など、奥州陸前の美しい海原の様子が詩情豊かに構成されています。この「松島」という曲を聴くたびに被災地の復興を願わずにはいられなくなります。

筆者は、現在、滋賀県文化振興事業団のプロデューサーとして、邦楽・邦舞などを中心とした日本の伝統芸能の作品制作を、滋賀県次世代創造発信事業として展開しています。なかでも平成22年度より文化庁から助成金を獲得して手掛けている「伝統と創造シリーズ」は平成24年度で第3回目、通算5公演を終了しましたが、その第1回目は東日本大震災の発生直後、3月23日が公演開催日でありました。公演の実施について、理事長より「開催を見合わせたい。文化事業を実施している場合ではない」という電話が入りましたが、筆者は実施の意向に揺るがない気持ちでした。文化庁、滋賀県、芸術関係者等の助言を仰ぎ、他館の情報収集に努めました。「全国的な文化芸術活動の地盤沈下を起こしてはならない。平常通り公演をしてほしい」ある演劇関係者からの言葉がずしりと胸に響きました。すぐさま組織内で緊急協議が持たれ、国難とも言うべき未曾有の大災害に対して、公演実施の意義やそのあり方を明確にした上、全員一致で実施の覚悟を決めました。本事業には新たなミッションが二つ加わりました。一つは、亡くなられた方々への追悼の意を込めること、二つ目は、被災された方々への応援メッセージとして公演を行うこととされ、以下を声明文として発信しました。

“東日本大震災復興支援活動プロジェクト～復興への希望と祈りの行動メッセージ～”

「東北を元気に！」「日本を元気に！」文化芸術事業や教育普及活動等を通じて、物心両面から復興への限りない支援を継続していこうというプロジェクトです。被災された方々の心に寄り添いつつ、生活の営みの中で文化芸術によるふれ合いや交流の機会をつくっていきたくと考えています。公共劇場として、光明の一筋となる将来への希望がわいてくるような心の支援や劇場経営を目指します。

上記のメッセージを掲げた後、公演を控えた出演者には本ミッションに対する理解と協力を文書で送り、来場者には当日配布のチラシにその思いをしたためました。本番では出演者及びスタッフ関係者は喪章をつけ、ロビーでは義援金を募り、来場者から多くの応援メッセージをボードに書いていただきました。「何のために文化芸術活動を行うのか」「社会における劇場の果たすべき役割は何か」常態化された劇場経営や事業活動に対し、芸術文化活動の意味、劇場の社会的使命やその役割を改めて問い直し、自分自身が芸術文化活動の本質と改めて向き合う契機となりました。冒頭にご紹介した常磐津「松島」の一節は、平成25年3月24日「伝統と創造シリーズⅢ～変わりゆくもの 変わらざるもの一人の心と情景—」において、滋賀県大津市在住である人間国宝常磐津一巴太夫師が、鎮魂と復興への祈りを込めて素浄瑠璃で語ったものです。言うまでもなく震災直後

からスタートした「伝統と創造シリーズ」陽春公演は、あの日を忘れない、風化させない、教訓から学び、次世代へつなげるという強い思いが託されています。

滋賀県は関西広域連合の一員として、主に福島県の支援を中心に東北復興支援活動を行っています。県内で避難生活を送られている方々は350名（2011年9月6日当時）を超えており、その約8割が福島県の方々でした。復興への具体的な道筋に時間を要する中、帰郷への断念や次代の子どもの行く末が案じられます。特に次代を担う未来ある子どもたちに平和で安心な世の中を創造することは我々大人たちの責務であると思います。このような状況を受けて、滋賀県での避難生活のなかで文化芸術に親しむ機会をたくさん作って心の復興支援をしようという意図で、当財団が開催する自主事業に毎回ご来場いただく「絆プロジェクト」を民間有志活動者の方々と協力して展開しています。

平成24年度制作



常磐津「岸漣翁常盤松島」一名勝松島に復興の祈りを込めてー

当劇場では引き続き心の復興支援を継続して行っていきたいと考えていますが、あくまでも心に寄り添う支援でなければならないと痛感しています。震災から2年を経て、この支援のあり方も徐々に変化してきているということも感じます。「心に寄り添う」支援に加えて、昨年は「痛みを分かち合う」支援に転じてきていると実感しました。今現在は、たとえ小さい支援であっても目に見える形で「できることを確実に」そして「共に歩みながら」ということが重要ではないかと思っています。

平成24年6月「劇場・音楽堂等の活性化に関する法律」が施行されました。その第3条第8項には、「地域社会の絆の維持及び強化を図ると共に、共生社会の実現に資するための事業を行うこと」とあります。今後、社会包摂的な文化事業の開発と推進が必要であり、文化芸術が人と人、地域社会と人々を結びつけていく意味がさらに増してくるのだと確信しています。その中心的な役割を果たしていくのが劇場・音楽堂等であり、物心両面から復興の拠点として、地域再生の核になることが期待されているのだと思います。

平成23年度制作



邦舞「雛の宵」ー子どもたちの成長と幸せを願ってー
©西岡千春

また、平成22年度から「伝統と創造シリーズ」との併催で地域伝統芸能公演「近淡海の祭り」を開催していますが、出演団体のなかに東北から一団体がゲストとして出演をお願いしています。装束や楽器などが津波で流され、継承者も亡くなられ、原発の心配がある中で、平成23年度は福島県から招聘が叶いませんでした。万策尽きている中、浪江町出身の民謡歌手原田直之師が当事業の趣旨に賛同し、出演を快諾して下さい、東北の民謡メドレーをご披露いただきました。平成24年度は、福島県いわき市より、「豊間の獅子舞」の方々を招聘することができ、満席の観客なかで熱い拍手と声援に包まれ、迫真の獅子舞をご披露いただきました。



地域伝統芸能公演「近淡海の祭りー豊間の獅子舞ー」
(福島県いわき市)

「無形」の民俗文化財を 調査することからみえてくること

東北大学東北アジア研究センター 准教授 高倉浩樹

はじめに

私は東北大学につとめる人類学の研究者である。2011年3月11日の東日本大震災の後には、宮城県で被災した当事者の一人として、また研究者として、震災に関わる災害人類学的な研究を行うようになった。大学人の震災体験を記録したり、地域の民俗芸能や祭礼・生業についての被災と復興について調査プロジェクトを行ってきたが、縁あって、文化芸術による復興推進コンソーシアムとメールを通しての交流を行うようになった。

今回報告するのは、現在も行われている地元宮城の無形の民俗文化財の調査についてである。私自身が代表を務めるプロジェクトに触れながら、現在考えていることを述べていきたい。

宮城県からの委託調査

2011年11月から宮城県からの委託事業として「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」を行っている。これは宮城県沿岸部で津波被災した地域社会において、無形の民俗文化財の被災と復興過程を対象とする聞き取り・参与観察調査である。これは正確には、文化庁補助事業「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」をうけた「宮城県地域文化復興プロジェクト委員会」（事務局・宮城県文化財保護課）が、私の所属する東北大学に委託した事業である。

無形の民俗文化財のなかには国や自治体指定の文化財となっているものもある。宮城県文化財保護課でも復興支援政策の一環として実態状況を調査しているらしい。東北大学が受けもったのは、むしろそうした指定から外れている文化財が中心である。その意味では、宮城県の文化行政を補う側面も持っているが、同時に重要な学術的意義ももつ。この事業を通して、宮城県沿岸部の無形の民俗文化財の全体像の把握に寄与することができるからである。

無形の文化財が被災すること

文化財が災害によって被災することはどのようなことであろうか？わかりやすいのは、美術品や歴史的建造物が破損した場合であろう。この場合、被災への対応は比較的明瞭で、修理・修繕すればよいことになる。もちろん、その修理・修繕に大変な知識と技術さらには予算的な裏付けが必要だし、実際に工程表を進めていく段となれば、さまざまな困難も発生する。しかしいずれにしても復旧・復興の計画の目処は立ちやすい。

これに対して、「無形」の民俗文化財が被災するというのはどういうことであろうか？たとえば、地域社会で継承されてきた神楽といった民俗芸能の場合を考えてみよう。神楽の場合、お面や獅子頭などがあり、太鼓や笛、衣装もある。そうしたモノの修復する場合は、他の美術



高台にあり津波被害を免れた山元町天神社にて2012年8月に草刈り作業を行った。境内は背の高い草に覆われていた。中浜神楽の道具は町中に保管されていたため津波で流された。復興努力は続いているが、当事者が満足行く形での神楽再開はまだまだ途中である。

品と同様である。

しかし、神楽というのはそうした物質文化を備えた社会現象であることに留意する必要がある。単にモノがあれば成立するというものではないのだ。そもそも踊る人や笛等を吹く人が必要だし、こうした人々が集まるという社会的関係性も無くてはならない。さらに神社の境内や辻など、練習を含めてそれを実践する場も重要である。さらに地元の人々も含めた観客もその構成要素である。その意味では無形の文化財は、地域社会の内と外との人間関係を前提にして存在しているわけだ。

この意味でも、東日本大震災がもたらした沿岸部の無形の民俗文化財への影響は非常に甚大なものであることがわかる。いうまでもなく、津波によって物理的景観として地域社会そのものが無くなってしまった場合も少なくないからである。生き残った人々は仮設住宅などで暮らしているが、その配置によって、震災前の住民同士のコミュニケーションの仕方は大きく変わらざるをえないからである。

無形の民俗文化財を調査すること

こうしてみると、無形の民俗文化財の被災調査というのは、単に民俗文化財をめぐる情報を集めることだけではないということがわかってくる。活動を行う人々の人間関係や経済関係などを含めた地域社会総体にアプローチする必要がある。民俗芸能が再開できたか否かも重要であるが、それに関わる人々がどのような条件のなかで、いかなる判断を下したのか、さらにそれはなぜかについて理解していく必要がある。さらにその時々、個々の人々の判断は、どのような社会的影響を及ぼしていくのかについても注意を払うことが求められる。

無形の民俗文化財の被災調査の目的は、例えば様々な地区の民俗芸能や祭礼が復活したか否か、その結果に作用する最大の因果関係を解明するというものとは異なっている。むしろ一つ一つの地域社会の事例に向き合いながら、個々に異なる条件、例えば支援体制や被災の度合い、経済・雇用条件、中核都市との関係、さらにリーダーの存在等といったことがどのように影響し合っているのかを考慮しつつ、その上で、例えば祭礼を復活させた場合、それによって何が地域社会にもたらされたのか、その肯定否定的双方の影響について検討する必要がある。その際に、これらの文化財に関わる人々に対して、共感をもった理解を心がけるということである。

社会的事実としての民俗文化財

民俗芸能や生業は、復興のシンボルとして新聞やテレビなどで着目されている。実際に、地域社会の文化的アイデンティティ、統合の象徴的役割、観光資源としての役割をしている場合も多い。

先に、この調査事業では「指定」ではない無形の民俗文化財を調べると書いた。それは言い換えれば、無形の民俗文化財を見つけるということでもある。読者の中には、形がないものをどうやって見つけられるのかと訝しがられるかもしれない。先に、「財」のついていない「無形の民俗文化」について説明しよう。「無形の民俗文化」といえば、これは過去から人々の間で伝承されてきた生活のあらゆる集合的な現象を意味する。民俗芸能・祭礼や生業はいうまでもなく、生活を営む上での知恵や、地域の言い伝え、言葉遊び、特定の身体所作なども含まれる。指定を受けていない「無形の民俗文化財」を探すとは、それらすべての中から何が「文化財」となるのかを見極めていくことに他ならない。

その際、研究者の役割は目利きとして無形の民俗文化財を見つけ出すことではないことである。むしろ、例えば、ある神楽が地域社会の全体あるいは一部の方達によって大切なものとして認められ、彼ら自身がその大切さを表象するかたちで自ら社会に対して働きかけている——その現場をみること、知ることが肝要なのである。人々の社会的行為によって無数の民俗文化のなかから「民俗文化財」が社会のなかで育まれている。それを人類学研究者は見極めることが重要なのだ。いわば社会的事実としての民俗文化財という視点である。

確かに、国や自治体による「指定」は重要である。それはその民俗文化財の当事者たちはいうまでもなく、地域社会、さらにその周囲の広域社会にも大きな影響を及ぼす。しかし、研究者の立場からすれば、そのよう

な指定の有無とは別に、社会現象として民俗文化財が存在している。それは大変活発に継承され大いに発展している場合もあるし、あるいは継承者がなくて危機的な状況にあるものまで多様である。その多様性を前提としつつ、地域社会のなかで何が「文化財」として大切にされているのか、これを社会的事実という観点から理解することが出発点となる。

無形の民俗文化財調査とは、東日本大震災という未曾有の被災状況のなかで、当該地域社会のなかで過去から受け継いだ民俗文化を、人々がどのように大切にしているか、そしてその思いが地域社会の復興にどのように作用しているのかを調べることなのである。

わかってきたこと

これまでの約1.5年間の活動を通して、人類学や民俗学など質的社会調査を行う研究者22名と学生による補助10名が組となり、宮城県沿岸部23地区で調査を行ってきた。一回の調査は実質1-2日で実施されるが、合計154日間の調査を行い、延べ人数にして253人と面談し、あるいは参与観察してきた。

そのなかでわかったことは、時代という条件をへることで醸成された民俗文化の「財」としての特質は、当事者をこえて作用する普遍的な力があり、外部の人も巻き込むことはいうまでもなく、その当事者自身も変えていくことである。例えば、震災前には非常に限定された成員でしか受け継がれなかった神楽がより開かれたものになろうとする。それは地域の文化財に価値があるゆえにこそその継承の担い手を広げねばならないという苦渋の選択であると同時に、新しい未来に希望を託す選択でもあった。その普遍的な力は否定的に働く場合もあった。ほとんど被害がなかったにもかかわらず、ある地区の民俗芸能の団体は活動を停止させてしまった。その主な理由は、同じ地区の被災度合いが厳しかった別の団体を思いやっただけのためである。この点は、民俗文化財が地域社会全体のコンテキストと表裏一体であることを示している。

調査事業の成果は現在まとめられつつあるが、我々がまず試みたのは、それぞれの地域の無形の民俗文化財を見だし、その被災状況と復興過程を記録化するということであった。被災前の芸能や祭礼の状況を聞き出し、震災後どのようにかわってきているのかについての聞き書き資料を、当事者の人々もふくめて誰もが読めるような媒体として共有できる試みである。それはこれまでインターネット (<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/takakura2/shinsai/report.html>) と印刷版 (<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2012/publication07.html#05>) として発刊し関係者に配った。

地域の人々が大切にしている民俗文化の過去と現状についての記録は案外地域の人々にとって重要で関心をもって読まれていることを実感している。今後はその記録をより共有化できるようにしつつ、無形の民俗文化財に着目することで可能な地域復興のあり方を具体的な事例に則して地域社会・行政に提示・提言そして実践していきたいと思っている。

被災地から学ぶ民俗芸能の文化力と 公立文化施設の役割を考察

伝統芸能(株)ナカツボ・アーツ
民族・伝統芸能プロデューサー
中坪功雄

被災地から発信する現状と新たな創生

私は50年余にわたって国内の民俗・伝統芸能をはじめ、海外の民族芸能交流の企画開発からプロデュース迄マネジメント業務に携わってきた。今でも各地の公立文化施設から韓国、台湾、香港に至るまで、実演芸術の企画提案書を携えて、プロモーション活動に行脚している現役である。その過程で公立文化施設を囲む文化芸術環境が、刻々と変化してゆく様子を仔細に見てきた。長年にわたる経験から、これまでに見えなかった課題を考察して見たい。既に多くの芸術文化団体特に演劇、音楽を中心に実演芸術では、被災地に向けて「心の復興」をテーマに様々な支援活動事業が展開されている。その評価と効果については、他団体からの報告に委ねたい。大震災から



福島棚倉・田遊び

2年余りが過ぎた今、時が経つにつれて、被災地の伝承者たちの状況は、集落や人口離散などで日々風化しつつあると云われている。集落が無くなる事は、地域共同体が創りだしてきた、祭礼行事や民俗芸能の地域文化資源(注1)が減びることにつながる。生きるだけで大変な目に遭っている被災者にとって「文化どころではない」という無力化の現実もあるようだ。しかし厳しい厳しいと云っても何も始まらない。プラスの側面も考えてみたい。現在被災地では「故郷の伝統を閉ざしてはならない」「故郷の誇りを取り戻さなければならない」という強い義務感も生まれ始めている。地域文化資源の存続が危ぶまれる中で、被災地により温度差や濃淡があるものの、祭礼行事や民俗芸能の再生、復活が徐々に行われている。いずれにせよ如何にメディアが発達し政情・経済が変動しようとも、人間が情緒を求める心を失わない限り、祭礼行事や民俗芸能の世界は永遠に続くと思う。

(注1) 地域文化資源とはその地域の固有の風土や歴史から生まれてきた文化であり、その地域に生きる人と人との連帯感=風土制・歴史性・共同制から育まれた文化のことを指す。その資源が祭礼行事・民俗芸能を指す。

民俗芸能の意味と戦略的役割を知ろう

はじめに基本的な用語を知らないとテーマが明確にならない。つまり民俗芸能の意味と社会における役割を知ることから始まる。私たちの祖先は神を畏れ、敬い、信じ、祈りそして祀った。その内で祭礼行事とは、人々を昔の心に戻す再現の場であり、先祖と手を握り、故郷の歴史と民俗を学ぶ祭りの庭である。その庭は生活の基盤そのものであり、祭りの庭は生活の場であった。民俗芸能とは祭礼行事の中の余興的、芸能的な部分が独立、地域の歴史や風土の中で生れ、地域の人々によって育まれた無形民俗文化財である。同時に集落や伝承文化と深く結びついた公共財といわれている。一方では地域伝統芸能の用語が使われている。それは文化庁が発信元ではなく、国土交通省と総務省が「別名・お祭り法案」を法案化するに際して使用した用語である。地域

伝統芸能も民俗芸能も郷土芸能共に同じ意味であり、より地域的なものを郷土芸能といい、別に定義されたものではない。私たちは日頃使用している民俗芸能の用語に統一させてもらった。先ず民俗芸能には3つの区分けがある。一つ目は歴史・土地に結び付いた神様向けであり、人々を対象にしないで、人々の目に触れない奥深い箇所で行われている。古くからの伝承信仰に身を清め、神々に供物を奉げて祈願、感謝し神々と人間が慰霊などを行うもので、一連の行事は文化財的要素の濃いものが多い。二つ目は長い伝承の過程で祖先たちは、しぐさや振りに工夫をこらし、日本人の体型に合った技と型に整えてきた。特に芸能価値の高い部分は「見せる・演じる」実演芸術に昇華、創造された部分が今日の能楽、邦楽、邦舞など古典芸能となった。三つ目は当初から舞台と観客がいて、各地を巡業した挙げ句、その土地に定着した芸能がある。芝居小屋、農村舞台、神楽殿で演じられるのは地芝居、人形浄瑠璃、神楽がある。私たちは祭礼行事、民俗芸能は無病息災とか五穀豊穡を祈って、奉納するだけのものと思っていた。これまでは形式的な行事としかとらえなかった人々も、震災を契機に祭礼には「生きる」「死を身近に感じる」など旧盆の供養など再認識したようだ。そして死者を思いその記憶を伝えたいという強い意志が、祭礼行事・民俗芸能に深みを与えたのではないかと思う。

民俗芸能が創る地域の絆

震災以前から東北方面では、高齢化と共に過疎と限界集落が増えて、祭礼行事の存続の危機に直面し始めていたところに、追い打ちをかけたのが今回の大震災である。祖先から営々と築き上げてきた祭礼行事・民俗芸能が、一瞬の内に消滅を余儀なくされたことである。多くの有形文化財も甚大な被害を受け、真っ先にレスキュー活動が開始され、今では着実にその再生が戻りつつある。しかし美術、建物などの有形文化財とは異なり、現実に人々に受け継がれている無形民俗文化財に対する救済は、先ず人々の避難など安全が確保される事が優先された為に後手に回ってしまった。加えて震災直後からイベントや実演芸術の公演が中止、延期、自粛が相次ぐ中、地域を愛する住民たちから、思いを託した祭礼行事や民俗芸能



岩手・雁舞道七福神

の復活を求める声が出てきた。装束や楽器も流されてしまい、伝統が途切れてしまったかに見えた。しかし背を押したのは三陸沿岸の伝承者たちの「やっべし」という声が行動を開始した。三陸沿岸地方は元々祭礼や民俗芸能が盛んな地である。沖縄には海の果ての楽園を意味するニライカナイがあるように、三陸沿岸でも海の彼方から豊かな幸をもたらす神様がいる事を漁民たちは知っている。そのために自然と共存する祈りの文化が根付いてきた。例えば三陸の大槌町雁舞道の漁師にとって、縁起物の鯛を題材とした七福神「恵比寿」などを



岩手・釜石虎舞

ガレキの海辺で面装束をつけて演じたそう。更に衝撃的であったのは、3月26日朝日新聞夕刊に津波で壊滅的な被害を受けた陸前高田市の虎舞保存会の伝承者たちが、装束・頭を傷ついた湾の浦々から探し出して、無造作に散らばる瓦礫の前で舞っている姿が報道されていた。その様子は全国に発信されて、被災されている人々に与えた心理的な効果は大きかったそうである。一方では真っ先に行動を起こしたのは、岩手県北上市を中心とした同じ連帯感を持つ鬼剣舞の有志たちの友情出演であった。自分たちが祖先から営々と引き継がれてきた、地域の文化や地域共同体が無くなってしまおうのではないかという悲壮感からの結束力であった。感動的だったのは

北上鬼剣舞連合会12団体（事務総長菅原晃）「鬼の匠」たちが、被災直後に北上川の爛漫の桜の下に、大きな供養塔を建立、大地を祓い清め、死者を弔い鎮める祈りの舞を捧げた。民俗学では桜花にまつわる詩歌・俳句には、花が華麗に咲き消えてゆく、この消耗の過程が美を構成し、消えゆくものへの鎮魂の意味が込められているという。丁度今、NHKで放送されている無念の思いと共に、未来へ向かう希望を唄った「花は花は、花は咲く、私は何を残しただろう」と奇しくも共通している。伝承者たちは地域に住むお年寄りから子どもの三世代で構成されている。伝承の過程において、青少年達は地域の生業や仕来たりや基本的な礼儀作法など通過儀礼を学んできた。更に先祖代々からの祭礼行事や民俗芸能の維持や伝承方法など日本独特のアートマネジメントを担ってきた。非常時に際していち早く対処出来たのは、日頃の活動のつながりが広がり、共助力として驚くべき力を発揮した事である。その裏には祭礼行事や民俗芸能に情熱を持ったリーダーシップがいたことを見落としてはならない。

プロデュース不足と格差の課題

現実には離散とか借金を抱えて、明日はどうなるか分からないという幾つかの問題もある。費用がかかる、活動する時間がない、コーディネーターやリーダーがいない等煩わしさと背中合わせにある。そのような後ろ向きな理由を数え上げたらきりが無い。先ず専門的なノウハウを持ったプロデュースする側の人が不足しており、非常時に際しても有効な対策が、講じられないケースが多い。どんなに優れた民俗芸能を復活したくても、支援をしてくれる人々がいなければ生き残っては行けない。保存会の伝承者だけで行おうとすると、ともすれば狭い視野から抜け出せなくなることもある。先ず再生を促すにはアートマネジメント機能が必要となる。そのためには運営・制作・演出に精通した創造的なリーダー（プロデューサー）の人材と育成が欠かせない要件となっている。議会、首長が地元役に立つ事業を求めている時に、それらをプロデュースする担当者は、事業の価値や周辺情報とか評価と効果が説明できなければ、住民を満足させられるはずがない。そこで有能な人材を採用したからといっても、知名度のある実演家、学者研究者、メディア関係者がいきなりプロデュースの専門家として、採用される場合が意外と多いものである。しかしその方々の殆どはアートマネジメントを実践した人でも、プロデュースを体験してきた人ではない。その他の課題の一つ目は煩雑な支援金確保の為の事務手続きが厄介で、出来る団体とそうではない団体に温度差が出ていること。二つ目は国際交流基金海外派遣や文化庁主催国立劇場そして公立文化施設の自主文化事業などに招聘される機会が急速に増えている。参加したくも仕事を失い兼ねないので、参加出来ない保存会の人たちがかなりの数がいること。三つ目は外部のメディアで、いつも陽があたっているところとそうではないところに差が出てきた事である。

公立文化施設が民俗芸能を手助けする

残念な事に被災地の公立文化施設といえば、未だに避難所というイメージが残っている。文化の力が発揮される場所といえば、自主文化事業をこなしている文化施設にある。今では「心の復興」を掲げ、創作文化活動の発信をテーマとする施設がある反面、直ちに結果が現れる企画、話題性、採算性を追う公演に傾斜している施設など事業に対する価値観が二極化してきた。すなわち商業ベースで出来る事と行政が公益的立場に立つて行うべきことの混同が著しいのである。一方では財政事情等の悪化により、事業予算などの用途について、住民に説明責任が求められるようになってきた。何の為に自主文化事業を行うのか。具体的な目標を設定して、住民にわかるようなテーマを明確にする事で、評価が求められる時代の到来である。



岩手・北上秋の子ども民俗芸能大会

しかし「地域文化資源の活用」「地域の繁盛は文化から」などをテーマに掲げても、今の指定管理者制度の下では極めて難しく、公的機関でないとその役割が果たせない。先ず優先度の高い事業として、被災地の文化振興に直結する関係を明白にするべく、新たに地域文化推進型の「民俗芸能」「民謡」を推薦したい。しかし商業ベース事業と違って、採算のバランスがとれるものではない。もっと広範に地域に及ぼす文化的な波及効果の視点から評価がなされなければならない。先ず企画を立てる場合、伝承者側、公立文化施設側、お客様の三者間が満足することが基本にある。しかし現実を見ると明確な概念や定義もなく、羅列型に実施をしている事が何と多いことか。お客様を感動させるには、最低限の知識を持ち、知的好奇心を呼び起こすためには構成演出が欠かせない。「舞台配置、衣装、楽器用具、飾り、舞いの説明から髪のかき方」「解説付きの実演、討論会」など立体的な効果を伴うことなど。民謡は各地域社会で伝承されてきた生活の唄として、民俗芸能の分野にある。一方では太鼓・津軽三味線は海外公演や自主文化事業、学校芸術鑑賞会には多く採用されている。しかし余りにも思いつきや安易な創作された部分が多く、今や故郷とは離れてしまったので民謡の分野から除いた。本来の民謡には過去の震災などからの復興祈念し、犠牲者に対して鎮魂と町衆を励ますための唄が多い。貴重な口承芸能でありながら、被災の事例から殆ど触れられていないのは至極残念である。参考事例として岩手県(財)北上市文化創造(理事長菅原晃)では、自主文化事業として「子ども民俗芸能フェスティバル2011・祈りと鎮めの心」を行った。その後北上民俗芸能大会、鬼よ燃えろ、冬のみちのく芸能まつりと続き、今では被災地に向いて一緒に演ずる出張交流、話し合いの機会を作ることも継続している。これからは地域の民俗芸能をテーマにして、新しい実演創造が生まれる可能性がある事を期待したい。

主要参考引用

公益社団法人全日本郷土芸能協会会報「無形文化遺産の復興・継承支援の事業を推進する」「日本のお祭り検定社団法人日本イベント産業振興協会」「第82号民俗芸能学会会報から福島調査団報告」「東日本大震災復興支援国立劇場民俗芸能公演」「(財)北上市文化創造」「日本の祭り歳時記芳賀日出男」

支援格差を乗り越える

— 岩手県沿岸部の民俗芸能に関する現状と課題 —

追手門学院地域文化創造機構特別教授

岩手県文化財保護審議会委員

橋本裕之

私は文化芸術による復興推進コンソーシアム構築に係る事業調査研究報告書として2012年3月に刊行された『東日本大震災、文化芸術の復興・再生の取り組み—被災と支援の実態調査と事例からこれからを考える—』において、「岩手の伝統芸能と復興への取り組み」という報告を公表している。その末尾において、鶴住居虎舞の笛吹きである友人の岩鼻金男さんが私に送ってきたメールを全文紹介した。これは少なからず心を動かされる内容であったらしい。たとえば、文化芸術による復興推進コンソーシアムのウェブサイトにおいても、コンソーシアム・アドバイザーを務める渡辺一雄さんが、2012年11月22日に掲載された「忘れない 文化芸術が紡ぐ絆を信じ 5」という文章の冒頭で、こう書いている。

“まつり囃子の笛が供養の笛に変わるまで”と題する「平成23年度版調査報告書第5章 東日本大震災と文化芸術の役割」（橋本裕之・盛岡大学 186頁）のくだりには少なからず感動、共感を覚えるとともに、震災を体験しなかった我々が被災者に寄り添う想いとは一体何か？その本当を考えさせる大きな力を宿しています。途中何回も絶句し、最後まででは感涙なしには到底読みきれません。今もなお。

こうした感想はよく聞かれるものである。というのも、岩鼻さんの個人的な体験は私が公表した以降、各種のメディアを介して数多くの人々が共有する社会的な経験に転位していき、大きな共感を生み出している。いわば現在進行形の出来事であり、したがって「想いを凝縮したそうした“語り”。その重さをひしひしと感じ取り共感を覚えるところから文化芸術による復興支援の道筋は見えてくると思います。」という渡辺さんの指摘にも強く共感する。私じしん岩鼻さんが私に送ってきたメールを公開したもの（もちろんご本人に了承してもらっている）、同じような意図に促されていたといえるだろう。

だが、涙を流して心が浄化されても解決しない問題が数多く残されていることも事実である。文化芸術による復興推進コンソーシアム事務局の小谷典子さんに「コンソーシアムでも、橋本先生に、是非、今年度も東北地方の郷土芸能の復興に関してのご寄稿をいただき、ホームページに掲載したいと考えておりますが、いかがでしょうか。」という意向を伝えてもらい、「岩手県の沿岸部の民俗芸能をはじめ、宮城県、福島県の沿岸部の民俗芸能の復興の現状や課題について」書くことを求められたさい、最初に思い浮かべた問題は東日本大震災以降の民俗芸能に関する支援格差をどうしたらいいかということだった。

東日本大震災が発生した以降、私は岩手県文化財保護審議会委員などを務めていることもあって、岩手県沿岸部の民俗芸能を支援する各種の活動に従事してきた。それは岩手県沿岸部の民俗芸能が地域社会を再生させるさい欠かせない要素の1つであり、そこで生きる人々にとって気高いものとして存在している消息に気づかされたことに由来している。私の活動は現在も進行中であるが、その課題を要約しておけば、第1段階は用具を購入する資金を助成すること、第2段階は用具を保管したり練習したりする仮設の空間を確保すること、そして第3段階はメンバーが地元で働ける雇用環境を整備することである。

しかも、第1～3段階は現在も重層的に同時進行している。早くも第1段階や第2段階における課題を克服して、第3段階に挑戦している団体も存在している一方、依然として第1段階にすら到達していない団体も数多く存在している。換言するならば、民俗芸能に関する支援格差が不可避免的に発生しているのである。こうした事態は今後も増大する可能性が大きい。私は支援格差が広がることをできるだけ防ぎたいと思って、被災した団体に関する情報を丹念に集めた上で、各種の財団が手掛ける助成事業につなげてきたつもりだったが、残念ながら個人の能力は限られていた。

2012年11月30日、私は都内で全日本郷土芸能協会の小岩秀太郎さんに会った。小岩さんと私は東日本大震災以降、被災した団体が各種の財団に対して助成金を申請する作業を手伝ったり、代書屋稼業に手を染めたりしてきた。小岩さんは私にとってみれば、最も信頼する仲間の1人である。私たちは支援格差が広がっている状況を少しでも改善する方法に関して、意見を交換した。そして12月18日、小岩さんはその内容に依拠しながら、東日本大震災以降の民俗芸能に関する現状と課題に関して、フェイスブックに以下の文章を投稿した。小岩さんに了承してもらったので、全文掲載したい。

日本ナショナルトラストの東日本大震災文化遺産への第二次支援が決定。祭りや芸能といった無形文化遺産への支援も行っていて、今回は全て岩手。メセナのGB Fundや日本財団の支援ではほとんど活動の聞こえてこなかった団体名が多く見られます。／岩手では、橋本先生や阿部武司さん、とりらの飯坂さんらが、沿岸に足繁く通っているからこうして被災状況が聞こえてくるのだけど、どうしたってマンパワーが足りない！まだまだたくさんさんの芸能や祭りがあるのに声を拾いきれないし、さて、どうするか。／お隣の集落の状況や、ボランティア・旅行に行った時に出会った人たちから伺った話などもたくさんあると思います。再開希望の声など、もし知っていたら是非教えてください。何かしら繋げることはできると思います。

文中に登場する「阿部武司さん」は東北文化財映像研究所の所長として活動している映像作家の阿部武司さん、「とりらの飯坂さん」はふるさと岩手の芸能とくらし研究会が発行する雑誌『とりら』の編集長として活動している画家の飯坂真紀さんである。2人とも東日本大震災以降、岩手県沿岸部の民俗芸能を支援する各種の活動に奔走しており、やはり最も信頼する仲間であるといえるだろう。2012年12月24日、私は小岩さんの文章に触発されて、同じような内容を自分のフェイスブックに投稿している。

みなさん、頼みます。手を貸してください。支援格差が深刻です。中間支援の必要性がますます高まっています。「ほとんど活動の聞こえてこなかった団体」がまだまだたくさんあります。こうした状況は岩手だけじゃないはず。知り合った団体のところに通って交流するのもしかたに大事ですが、その近くで活動している忘れられた団体についても、お話を聞いてきてください。どうかお願いします。

私たちは民俗芸能を支援する活動が被災した一部の団体、いわば被災有名団体に集中してしまうことを危惧していた。こうした事態は皮肉にも、私たちが早い時期に各種の助成事業につなげたことによってこそ生み出されていた。私じしんは支援格差が広がっていることに関して焦燥感を持っているのみならず、いわゆる中間支援の必要性があまり強く意識されていないこと、いわゆる研究者が必ずしも積極的に参加しないことにも苛立っていたようである。続けて「自分の調査もそりゃあ大事だろうけどさ……。自分も研究者だと思っから、わかります。でも、調査って何なの、研究って何なの、民俗学って何なの、人類学って何なの……って思ったり。」とも漏らしていた。

ところで、『毎日新聞』2013年1月24日岩手版に掲載された記事「住民つなぐ民俗芸能 被災団体草の根支援の動き 輪広げ長期的継続を 大阪・追手門学院大 橋本裕之教授(51)」は、「支援を受けている団体と、いまだに受けられていない団体との間で、格差が出ているのも問題だ。被災団体の中には機敏に申請の手続きを進め、支援を受けている団体もあるが、手助けを求める声を挙げることをためらい、支援を受けられていない団体もまだまだたくさんある。できるだけ多くの団体を応援していきたい。」という私のコメントを紹介している。

研究者の影が概して薄いのは残念だが、信頼する新しい仲間は意外なところで見つかった。私は「一方で、草の根のつながりも生まれている。内陸の芸能団体から沿岸部への支援がその一例。滝沢村の篠木神楽で笛を吹いている男性は、笛を手作りし、被災した陸前高田市の川原祭組に贈った。道具がほぼ流されていた川原祭組は大変喜び、今も祭りでその笛を使っている。被災後に復活した団体が、他の被災団体の支援をする動きも出てきた。申請書類の書き方や頼れる人の紹介など、被災者同士で助け合う活動には心を打たれた。その輪をも



川原祭組に笛を寄贈する伊東義隆さん(2011年7月24日撮影)

っと大きく広げていきたい。」とも話している。

とりわけ2012年の秋以降、こうした傾向が自然発生的に出てきていることは興味深い。先行する団体が自分たちだけ復活するよりも、後続する団体を含めて全体として復活することをめざせる段階に入ってきたということだろうか。以下、私が前述した『毎日新聞』の記事を補足するべく、自分のフェイスブックに投稿しようと思って、結局は投稿しなかった文章を公表する。2013年1月26日に書いた。少しばかり躊躇したが、やはり出してしまおう。後半はささやかな愚痴であると思っただけなら幸いである。

支援格差が広がってきている現状、先行している被災団体が後続する被災団体を支援する活動が広がってきている現状について話しました。浦浜念仏剣舞の古水力さん、門中組虎舞の新沼利雄さん、年行司太神楽の笹山政幸さん……。最初は「支援」していたつもりだったのですが、今は私の大事なパートナー。でも、どの団体も被災しているのです。また、「滝沢村の篠木神楽で笛を吹いている男性は、笛を手作りし、被災した陸前高田市の川原祭組に贈った。」という話ですが、これは伊東義隆さん。もう何十本作ってくださったことか。そして1月14日、川原祭組の秋葉権現獅子舞は伊東さんが作った笛を使って、カルテットの生演奏を実現させました。／それにしても、学者は何をしているのかな～。調査や分析もいいけれども、ある友人に「やはりこういう非常時に当事者につきあえないなら、学者なんてしょーもないな、と思うわけです。」といわれました。私は学問のことを信じていますが、残念ながら激しく同意。私たちはたしかに凡庸かもしれないけれども、無力かどうかはわからない。とにかく動くしかないんじゃないかなと思っています。

私じしんはニューオーリンズを襲った2度のハリケーンの後、Survivors to Survivorsというモデルに依拠しながら、Surviving Katrina and Rita in Houston というプロジェクトを立ち上げたカール・リンダールさんに触発されるところが大きい。彼はハリケーンが発生する以前、ヒューストン大学で教鞭を取る medieval folklorist であった。しかも、私たちはかつてアメリカ民俗学会の年会で medieval folklore に関するパネルを組織しており、関心を共有する古い友人だった。東日本大震災以降、民俗文化の諸領域を支援する活動に関して意見を交換する機会に恵まれたが、当時はそうした日が来ることすら想像するべくもなかった。だが、彼が見ていた風景が私にもようやく見えてきたということだろう。

古水さんたちが手掛けている活動は、被災した団体が被災した団体を支援するというよりも、むしろ被災した団体同士が共働することを意味しており、Survivors to Survivors のモデルを実現していると考えられる。コンソーシアム・アドバイザーを務める渡辺さんも「共感を覚えるところから文化芸術による復興支援の道筋は見えてくると思います。」と述べていたとおり、涙を流して心が浄化されて終わるような情緒的な地平に立ち止まらないで、現実的な地平において民俗芸能を支援する活動として結実していることを最大限に評価したい。こうした相互関係の延長線上にこそ、支援格差を解決するヒントも隠されているはずである。私が抱えている課題についていえば、中間支援の意義を十二分に認識した上で、支援格差を乗り越える方法を模索していきたいと思っている。



安渡太神楽に寄贈する獅子頭を持つ笹山政幸さん（2012年9月9日撮影）

ミュージアムの被災から復旧、再開のプロセスが映し出す新たな仕組み

仙台高等専門学校建築デザイン学科

教授 坂口大洋

1. ミュージアムの存在意義を問い直す。

発災から2年が経過し、日々変化しながらも復興に向けた現場では様々な課題が新たに発生している。被災地の多くのミュージアムは昨年度までにほぼ再開し、一見すると発災前と変わらない表情を見せている。

だが、津波の被害を受けた石ノ森萬画館は2013年3月に2度目の改修工事を経て本格リニューアルオープンし、同年4月にはリアス・アーク美術館が常設展を含め全面的にリニューアルをして本格的に再開した。他方、被災地の小規模な自治体の資料館は、未だに閉館状態が続く施設もある。多くの報道で語られる復興のスピードが遅いというよりも、復興状況の進捗の格差が日に日に拡大していることが、現場に近いところに身を置く筆者としては率直な実感としてある。

これらのミュージアムの被災から再開へのプロセスは、なぜ再開する必要があるのか、地域におけるミュージアムの役割とは何かという本質的な問いを問われ続けたプロセスでもある。

阪神・淡路大震災においては、再開したものの数年後に活動状況が悪化した施設が幾つかある。縮退社会の中、何とか再開した多くのミュージアムも同様の状況に置かれており、ミュージアムの意味を問われたプロセスはこれからも続く可能性がある。

他方、阪神・淡路大震災を契機に立ち上がった文化財レスキュー事業などの様々なネットワークが、今回の再開へのプロセスにおいて重要な役割を果たした。施設と人、施設と施設、施設と地域など今後のミュージアムの在り方を考える一つの手がかりがあるように思える。

このような問題意識のもと、本稿ではまずミュージアムの被災から復旧までのプロセスに着目し、如何に歩み再開に至ったか、そして再開後の課題とは何かについて整理を試みる。

次に再開へのプロセスをネットワークの視点から捉えなおし、幾つかの具体的な関わりをスタディしながら、震災を契機にミュージアムの在り方は変わるのか、変わるべきなのか、そして次への道筋を探る。

筆者は、発災直後に施設の被災状況の調査を行い、昨年度宮城県や福島県の約20近くの美術館・博物館を訪問し、学芸員の方々に発災から再開までのプロセスと再開後のアクティビティに関してヒアリングをする機会を得た。本稿では、それらの調査研究や著者らの関連研究を踏まえ上記の課題を捉えていくものとする。

2. 東日本大震災におけるミュージアムの被災から復旧のプロセス

1) 地震発生時と発災直後

まず筆者が関わったミュージアム調査の内容をベースに各プロセスに応じた再開へのプロセスを細かく見てみよう。

仙台市内のミュージアムは、全般的に建築的な被害が少なかったケースが殆どである。立地条件、施設の耐震性などのハードの要因もあるが、発災時が平日の午後であったこと、各施設の利用者が少なかったこと、発災以前から宮城県沖地震の発生が指摘されており事前対策の実施や意識が高まっていたことが大きかった。現場スタッフの適切な避難誘導などが地震や津波による直接的な被害以外の二次災害を抑えたことに繋がったことなどのソフトの側面も大きい。

しかし、7階の天井が崩落したせんだいメディアテーク、壁面が損傷した仙台市歴史民俗資料館、ピロティー

下部の天井面が崩落した仙台文学館など、建築的な被害が大きかった事例もある。

地震発生直後の動きは、多くの施設では当日20：00頃までに殆どの施設が閉鎖されたが、一部の施設では近隣の住民が避難してきたことにより、避難所として運営された施設もある。

また、仙台市八木山動物公園などでは、動物などの生態管理のために、スタッフが24時間体制の対応を余儀なくされたケースもある。

少し具体的な事例をみてみよう。

せんだいメディアテークでは、開館10周年記念のシンポジウムの開催前日でスタッフ約30人がその準備にあっていた。発災直後に階段を使って施設外の北側駐車場に避難した。冷え込みが厳しかったため、様子を見て職員・利用者約60人程度を幾つかのグループに分け、必要最低限のものを取りに戻った。取りに行けない場所については後日改めて引き渡すことで利用者は帰宅した。その後、職員は手分けして館内を見回り、全体的な被害状況を把握した後、20：00頃全員解散した。

また、宮城県美術館では発災時約10名ほどの利用者とスタッフを含め全部で40人ほどが館内にいた。直後は一旦アプローチへ避難し、その後スタッフが被害状況を確認した。けが人がなかったため帰宅可能な者から帰宅させる対応をとり、残った職員で簡易的な被害の確認と作品退避などを行い、警備担当は館内に宿泊をするなどの対応をとった。また自家発電による明りがあったことなどから、近隣の住民が避難してきたことにより、一時的に避難所となった。

他方津波により甚大な被害が発生したミュージアムは当然異なった様相を示す。沿岸部に立地していた石巻文化センターの場合は、地震の直後からの大津波警報とスタッフ間で津波の襲来が予想されたこともあり、迅速な避難が行われた。壊滅的な被害の中、警備のために、スタッフが交代して24時間野営するなどにより対応した。近隣の石ノ森萬画館も同様に一階部分が浸水をしたが、利用者とスタッフは一時的に3階部分に避難した。収藏品等は上階にあったために難を逃れたが、その後関係する美術館に作品を移動し復旧、改修を目指すこととなった。

2) 避難所対応の課題と改修工事

先述したミュージアムが避難所として機能したケースは、職員が交代で24時間で対応したが、一般的に収藏品は高価な物品が多く、施設の閉鎖方法、作品の臨時的な保管方法などから災害時はベストな状態ではない。不特定多数が出入りする避難所の設置と収藏品の管理方法や区画の設定の仕方など、地域との関係も含めて今後の想定すべき課題である。

仙台市内ではライフラインが概ね復旧する4週間程度は、施設によってはスタッフが市民センター等避難所への応援勤務でしばしば不在となった。職員全員が顔を合わせる機会が減り、職員間の情報共有の難しさなどがあったことも、復旧業務の障害となったとの指摘もあった。

大規模な改修工事が必要となった施設では、被害の詳細な確認、予算申請、工事発注のプロセスが必要になったことに加え、発災後被災地における建築資材や職人の不足など建設事業が混迷し、改修工事のスケジュール策定及び再開日程に影響を及ぼした。

仙台市の場合は指示書などにより改修工事の調整発注を行うことで、早期再開への目処が立ちやすくなったが、仙台市外のミュージアムでは、国への改修工事の予算申請上求められる被害状況を示す書類の作成、申請手続きなどに時間を要したことなども施設再開の遅れの要因となった。

展示機能が主だった施設では、施設被害が比較的軽度であった場合でも早期に再開できなかったケースもある。収藏品の再整備、事業等の調整事項などが多岐にわたる場合、早期再開の大きな課題となる。ハードとしての復旧とソフトとしての復旧の両面が揃わないと再開に至らない。特に収藏品が多い施設であったり、小規模な自治体のミュージアムではその傾向が強い。

3) 施設再開の意思決定と再開への対応

各施設は、震災により一時閉館を余儀なくされたが、仙台市内では震災から半年ほどで再開している。公共のミュージアムの場合、再開日の決定は設置主体の行政判断が基本となるが、その基準は、施設の復旧状況と

安全性だけでなく、地域の日常生活の復興状況なども再開を判断する基準として重要となった。建築の安全性の確保は再開の前提条件であったが、建築資材や職人の不足等の被災地における建築工事の状況が不透明であったことから、工程の確定に時間を要したことも再開日の確定を遅らせた要因の一つである。

また、発災前に予定されていた企画事業の関係から再開日を決定した事例もある。特に企画展などの期間中に発災し被害が軽微の場合で会期を大幅に残していた仙台市博物館や福島県立美術館では、再開とともに発災前から開催していた企画展を再スタートした。

同時に施設側では、非常に短期間に再開した場合の安全管理などを如何に担保するかという判断が迫られた。多数の来場者が予想される中で、余震などの影響も考慮に入れながら、スタッフの勤務体制などを策定する難しさなどもあったようだ。

4) 施設閉館時の地域的な影響

施設閉館中の業務としては、施設事業（予定していた企画（展覧会）事業の休止、再調整）、貸館などのキャンセル対応などがある。特に前者は諸々の調整事項があり、かつ複雑な場合もあるために、施設スタッフの負荷となった。またこれらの業務全体は、行政内部の庁内においても意識を共有することが難しい側面があったとの指摘もあった。また、地域内の文化団体においては、活動場所を喪失することで日常的な活動の継続が難しくなったケースも多い。

長期間の閉館は、鑑賞機会の減少だけでなく様々な地域の文化的なアクティビティに与える影響も少ない。

仙台市科学館では、長期間の閉館で、施設のミッションである市内の小中学校の理科教育の授業、活動の支援が難しくなったり、発災前から修学旅行や研修などを受け入れてきた仙台市天文台などは、発災後それらがキャンセルされる場合もあり、地域経済へ与える影響もみられた。

5) 部分再開と収蔵品の管理

多くの館では改修工事等の復旧後に全面開館を行ったが、一部の施設では応急的な復旧工事を経て部分的に再開し、段階的に全館再開に移行するプロセスをとった。仙台市ではライフラインなどの復旧や物流の回復に伴い、市民のニーズに応えるために、安全確認・点検が終了した利用可能なスペースから貸館や展示を再開するなど、騒音の問題を抱えつつも改修工事を並行する或いは展覧会の会期の合間を調整し冬の閑散期に工事期間の調整を行い再開したケースもある。

仙台市は4月上旬に市の方針としても再開可能な施設はできるだけ早期再開を目指すことが確認され、仙台動物公園、仙台市天文台、仙台市縄文の森広場などは、4月中に再開した。

せんだいメディアテークなどは、被害が大きかったものの、行政及び現場スタッフの判断もあり、5月3日に1階のオープンスクエアと2階の一部、図書館部分の3~4Fまでの部分再開を行った。再開当日は開館前から人が並ぶなどの比較的早期に再開した施設では多くの来館者を集め、せんだいメディアテークでは開館以来最多の来館者であったとされている。

同様に4月に再開した仙台市八木山動物公園などでは、家族連れなど約5,000人を集め、仙台市歴史民俗資料館では、発災後、市内の小中学校の団体見学が増加するなど、震災復興過程のミュージアムの再開の様子は地域の期待の高さを示している。特に2012年11月に再開した石ノ森萬画館などは、地域の復興のシンボルとしての意味もあり、非常に多くの来館者を集めた。学芸員へのヒアリングでは、実際に来館した方たちも今回の再開を機に、初めて地域の公共文化施設に足を運んだ市民も多かったのではないかと指摘もあり、これらの状況を如何に今後の施設運営に生かすかが一つのポイントである。

他方長期間閉館を余儀なくされた被害の大きい施設では、部分再開に至るまでのプロセスにも様々な課題が存在していた。

市内全体が甚大な被害を受けた気仙沼市。リアス・アーク美術館では長期閉館時も学芸員が長期間滞在し、施設の管理を担うなどの状況が続いた。市内の被災状況が甚大であったことから、市内の様々な復旧活動にスタッフが動員されたことや、地域の復旧のために様々な業務も求められことから、施設の再開への具体的なア

クションが起こせなかった。その間、学芸員を中心とするチームで地域の様々な被災状況を精力的に記録するなどの活動を展開した。その他改修工事や多くの苦難を乗り越えて、リアスアーク美術館は、2012年7月に部分再開し、それらの収集された津波被害の記録を中心とした常設展とともに、全面開館を迎えるのは発災から2年以上経た2013年4月である。

また、民間ミュージアムの場合は運営主体の状況や判断も大きく左右する。

仙台市内の民間美術館の一つである福島美術館では、各支援ネットワークとの関係構築が難しかったことや、民間美術館であることから施設再開への具体的な計画策定の着手が遅れたことで、被害程度が軽微あったにも関わらず長期間の閉館が余儀なくされた。

発災後数日間のライフラインの停止に伴い、殆どのミュージアムの空調が停止し、自家発電等での対応も限界があった。ただ、収藏品へのダメージについては、今回の震災では非常に寒い日が少なかったこと、仙台市内などでは電気に関しては数日で復旧したこと、収蔵庫自体の環境性能が高かったことなどから大きな問題とはならなかった。しかしながら、ライフラインが停止し長期間閉館した場合の対応策は今後の災害に向けた懸案事項であるといえる。

3. 復旧プロセスにおける様々な支援とネットワーク

ここでは、まず今回の東日本大震災の復旧に関わったネットワークを整理した後に、そのネットワークの意義をみでみる。

1) 全国組織のネットワーク

日本動物園水族館協会では、今回の震災では緊急動物飼料（飼料業者や全国加盟動物園水族館から提供された飼料）の輸送、緊急動物の移動等の支援活動を行った。仙台市八木山動物公園では、発災直後の緊急対応に日本動物園水族館協会より餌の支援が行われ、園内の動物の生存確保につながった。

全国科学博物館協議会（全科協）では緊急対応の業務支援と科学系博物館の被害状況などの調査や調査結果の共有などをweb上で公開し、天文施設などでは安否シートなども公開された。仙台市科学館、仙台市天文台などでも情報提供や一部資材の提供等の支援が行われた。

国内の美術館が加盟する組織である全国美術館会議では、阪神・淡路大震災をはじめとして、自然災害等で被災したレスキュー活動を行ってきた実績があった。発災前から災害対応等の関連資料をHP上で閲覧できるように整備していた。

今回の調査対象施設においても、発災直後の早い段階から状況確認や情報提供などの支援が行われた。全美による直接的な支援だけではなく、被害や復旧ニーズの情報が関係者間により広く共有されたことで、被災したミュージアムに直接的支援の実現に寄与した。特に復旧の初期段階において、ネットワークを介した情報共有は今回のような大規模かつ広範囲な災害においては、有効であることを裏付けた形となった。

2) 歴史系のネットワーク

次に、歴史系ネットワークを中心とした動きをみる。

今回の復旧支援で重要な役割を担ったネットワークの一つに、宮城歴史資料保全ネットワークがある。宮城歴史資料保全ネットワークは、宮城県北部連続地震（2003年）によって被害を受けた文化財の救済活動を契機として設立された。東北大学東北アジア研究センターを中心に、宮城県内の歴史研究者や大学院生、文化財行政に関わる自治体職員等より構成される。平常時から県内の歴史資料の所在を調査することで被災時に救済すべき資料を事前に把握するという全国でも先駆的な歴史資料の保全活動を行っている。

今回の東日本大震災においては、資料保全の継続性や公共性を担保するために東北歴史博物館と連携し、文化財レスキュー活動を展開し、宮城歴史資料保全ネットワークは2011年9月末までに11件のレスキュー活動を行った。

具体的には4月6日に行われた旧岩切郵便局の解体の立会い、近世から明治初期に移築した建物の一部の部

材等を回収したり、4月22日の仙台市太白区の旧家では、倒壊の危険性のあった土蔵から道具類、屏風、文書資料、古写真などを搬出した。

3) 文化財レスキューの具体例

次に宮城県においては、仙台市博物館、宮城県美術館などが拠点となり、沿岸部のミュージアム施設の復旧支援に関わった。仙台市博物館等へのヒアリングや関連資料から、その具体的な動きをみている。

震災発生直後から、各地の情報を元に、津波による水損や流失、復旧過程での資料の廃棄など、様々な要因による被害が想定された。博物館では市史編纂室が中心となって、資料レスキュー活動を行った。具体的には、編纂事業や資料調査を中心に、「秋保町史」、「宮城町史」に掲載された資料所蔵者をリストアップし、レスキュー候補の情報を整理した。

発災直後から、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（略称「宮城資料ネット」）と協力して資料レスキュー活動を行うことを確認し、宮城県文化財保護課、仙台市文化財課とも連携を行いながら、仙台市内外、指定・未指定、個人・施設の別を問わず、資料の被災状況などの情報の共有化などに着手した。4月15日に文化庁・独立行政法人国立文化財機構を中心とした「東北太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」が正式に発足し、同委員会が行う文化財レスキュー事業は指定・未指定を問わず、「要請」があった動産系の文化財や美術品について、現場からの救出と応急処置および一時保管を活動範囲としている。

宮城県の現地本部は、4月18日から7月30日まで仙台市博物館内に設置され、それ以降仙台市博物館を拠点として、宮城県内のレスキュー活動に従事することとなった。

仙台市博物館では、学芸員や市史編纂室職員を中心としたチームにより沿岸部の被災施設である石巻市文化センターのレスキューを行った。浸水により汚泥や瓦礫が流入したことにより被害が発生した歴史資料、美術資料、考古資料、民俗資料の瓦礫や堆積物の除去を行い資料の救出を行った。救出後宮城県内外の博物館、美術館、大学等に一時避難させ応急処置を施し、これは宮城県内においても最大規模のレスキュー事業であった。

4. 復旧から再開プロセスを踏まえたミュージアムの新たな動きと課題

1) 震災の記憶の継承

震災を契機に、その記憶の継承を具体的な事業として展開させたケースもある。せんだいメディアテークでは「3がつ11にちをわすれないためにセンター」を企画し、被災地域周辺の発災時や発災後の記録のアーカイブや、震災に関する様々なテーマに関して、オープンなディスカッションを行う「考えるテーブル」などの企画を積極的に展開している。仙台市科学館では継続して調査を行っている仙台市海岸エリアの蒲生地域などを対象に被災状況と復旧の過程を館内で紹介している。

他方アート系ミュージアムでは、震災をテーマとした企画展は、テーマ設定の難しさなどから具体化には慎重な動きを見せている。また震災発生後、被災地支援の一環として国内外からの企画展や作品の貸し出しなどの依頼が集まったミュージアムもある。

2) 再開後の変化と新たな災害対策

再開にあたり、各館で展示の仕方や収蔵品の固定方法が変更されるなど、早急に災害対策がされた。固定展示ケースガラスには、飛散防止対策を施すなど展示作品と来館者の安全を確保する方法も再検討されている。また、自家発電や受水槽など災害時に機能すべき設備の点検を重点的に行うことや、避難誘導の確認や地震を想定した防災訓練の実施など災害対応における留意・確認点が発災前と比較し増えている。

収蔵品についても新たに様々な対応が求められつつある。災害時の収蔵品の移動を想定して、綿布団、エアキャップ、段ボール箱等の作品を保護する緩衝材や梱包資材の備蓄についても今後の検討事項として考えられている。

また文化財レスキューだけではなく、被災した収蔵品の修復などの調査、修復などは東北以外の専門家や業者の協力などが不可欠であったが、ミュージアムの持続的な運営の観点からは、地域内における自立的な災害

復旧の仕組みも検討する余地がある。例えば収蔵品の修復などの産業育成やそれらを視野に入れたローカルなネットワークの構築も必要となるであろう。

また指定管理者制度などの導入により、災害時において即時の施設単体の判断（例えば帰宅困難者の収容など）が難しい局面もあり、施設運営上の課題でもあるが、短期的な危機対応だけではなく、災害に対応する組織の在り方や震災の経験を組織として共有する必要性からも、指定管理の枠組み自体を議論する余地がある。

3) 福島第一原発事故とミュージアムの対応

今回の震災の特徴の一つである福島第一原発事故の影響は単なる災害への対応だけではなく、美術館の在り方をも大きく変える要素を含んでいた。

一つは2011年3月下旬から4月にかけて福島第一原発事故の収束が見えなかったことから、幾つかのミュージアムでは今後の影響を懸念していた。特に福島第一原発に近い、福島県立美術館、宮城県立美術館などのスタッフでは、最悪の事態として美術館の全館避難が想定されていた。しかしながらこのことは、収蔵品の避難などを具体的に検討していくと、避難する場所とどの作品を避難させるかという選別を行う必要が生じるなどの極めて実施が難しい。

特に後者は収蔵品を選別するという学芸員にとって極めて困難な判断が要求されることを意味する。その後、事故の再発の可能性が低くなりこれらの懸念は現実化しなかったが、今後の災害対応の留意事項として認識する必要がある。

しかし、実際に直面した課題もある。事故後再開が困難となったり、来館者数が減少したりなどの直接的な影響に加えて、原発に近いミュージアムでは海外の美術館からの作品の貸し出しなどが難しくなり、企画展の内容の変更や開催が難しくなったケースも存在する。

早期に再開したあるミュージアムでは、企画展の実施にあたり作品を貸し出す側から貸し出す条件として、原発事故が再発した場合への具体的な対応策を問われた。しかし、避難先の想定にあるように施設単体では解決が難しく、地域以外（具体的には県外など）との連携やネットワークによる対応が求められたことを意味し、ネットワークの災害対応における有効性を示している。

4) 地域との関係

震災を契機に地域とミュージアムの関係が浮き彫りになった点も多い。特に博物館や民俗資料を扱うミュージアムなどでは、地域の歴史との関係を再構築する契機となった。

仙台市博物館では、発災以前から仙台市史の編纂事業を兼務しており、仙台市内の旧家や寺社などが保有する埋蔵文化財の調査や保護する活動を行っていた。仙台市内では約1000件の旧家や寺社が文化財を保有する可能性があると見られていたが、今回は約280件の場所を複数回訪問している。職員の訪問の際には「文化財保護の人が来るのを期待していた。」などの声があった一方、保有者が文化財としての価値を認識していない例もあった。このことは、文化財保護や文化財レスキューといった活動は、日常的な埋蔵文化財の把握や情報の共有の必要性を示すとともに、民俗資料の価値を地域内に周知していく機会でもある。

また、地域とのつながりが学芸員個人の属人的なものではなく、システムとして継承されていくための課題もある。現実的には地域の歴史や継承は学芸員個人のノウハウや記憶に依拠する部分が圧倒的であり、宮城県でもそれらの地域内の文化財の系譜が共有できる学芸員関係者は数人しかいないという指摘もあり、今回の震災を契機に記憶を継承できるシステムの構築はミュージアムが地域の情報を集約する役割と拠点であることから、重要かつ急務の課題であるといえる。

また、震災から復旧そして再開のプロセスを経て、地域におけるミュージアムの役割を再認識する場面が多々あったとする学芸員の声は少なくない。これらが今後企画展の事業内容や、日常的な地域との関わりなどの局面で様々な形で具体化されることに期待したい。

5. 次なるミュージアムに向けて

多くのミュージアムが被災した現状は、従来の災害に対するミュージアムの在り方を真摯に捉えなおし、原点に立ち戻り再考することが求められている。施設単体での災害への対応の限界が露呈したともいえる。そしてハードのみならず、ソフトとしての持続的なミュージアムを成立させるための課題と手がかりが、このミュージアムの被災から再開までのプロセスに凝縮されているともいえる。

特に福島第一原発事故により発生した課題と求められた対応は、従来の考え方の限界と新たなる災害への考えを迫るものである。

しかしながら、被災から再開までのミュージアムの動きを捉えていくと、そこには様々なネットワークや関係が重要な役割を果たしたことを垣間見えたことも事実である。

縮退化社会を迎えミュージアムの持続的な運営が模索されている。このプロセスの中で経験され蓄積されたネットワークを日常的な仕組みと、新たなる災害に対応するためのツールとして如何に展開できるかが問われている。そして、ネットワークを基本としたミュージアムの在り方は、地域の資源や場を個々に繋ぎつつ、地域外のミュージアムと繋がることにより新たな価値を創出する可能性もある。

しかしながら、冒頭に示したように被災地のミュージアムをめぐる現実的な課題は山積しており、数年後アクティビティーが急速に劣化することも危惧されている。また新たな災害への対応は、国内の様々なミュージアムが直面している。その意味でも今回の震災の様々なプロセスを幅広く共有すること、そして経験とプロセスを踏まえた新たなネットワークの仕組みづくりへの第一歩は、今踏み出さなくてはならないはずである。

本調査にあたり、仙台・宮城ミュージアムアライアンス参加ミュージアムを中心に多くの関係者の協力を頂いたことに感謝いたします。

参考文献：東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成23年度活動報告書2012年10月

文化芸術からの復興

魚沼市小出郷文化会館

館長 桜井俊幸

未曾有の東日本大震災から2年が経ちました。被災を受けた多くの皆様に心からお見舞いを申し上げますとともに亡くなられた方へのお悔みを申し上げます。

新潟県魚沼市・小出郷文化会館の館長として18年間にわたって管理運営や企画に携わる中で、中越大震災をも経験した一人として寄稿させていただきます。

東日本大震災発生時、私は上越新幹線で東京に向かっていました。私どもが自主制作した「魚沼産☆夢ひかり・キッズミュージカル」の公演が豊島公会堂で行われる前日、リハーサルに立ち合うための上京でした。

大きな揺れを感じるとともに、大宮駅の8キロ手前で新幹線は緊急停車して停電し、缶詰状態になりました。他の乗客が持っていた携帯テレビで、想像を絶する地震と津波が発生したことを知りましたが、豊島公会堂で舞台の仕込みをしているスタッフの状況や、バスに乗って東京へ向かっているキッズの子ども達の安否はまったくわからず、不安な状態が続きました。

数時間後、やっとながった携帯メールによって現状を把握することができました。担当職員は、翌日に行われるはずだった公演の中止を即決し、公演会場を避難所として解放するため速やかに撤収していました。また、キッズの子ども達は、公演中止に涙しながらも無事に魚沼市へ帰還したのです。かつて中越大震災を経験した職員が、スピード感をもって対応し、功を奏したことを実感しました。

8年前、夕餉の準備にいそしむ時間帯の新潟県中越地方を大地震が襲いました。停電のため、光の無い真っ暗闇の中、多くの住民が野外で余震の恐怖に怯えながら幾夜も過ごし、途方に暮れたことが思い出されます。

被災者は死者68人、重傷633人、軽傷4,172人。住宅被害が全壊3,175棟、半壊13,810棟、一部損壊105,682と、東日本大震災には及ばないものの、山崩れや土砂崩れなどにより、鉄道も、道路も、ライフラインも、至るところで分断されるなど大きな爪痕が残りました。

魚沼市小出郷文化会館も、地震の影響により建物の周辺が30センチほども陥没し、大ホールの天井や壁には亀裂が入り、音響反射板が壊れ、公演中止を余儀なくされました。

私事になりますが、小学校3年生の時に新潟地震を体験したことから、新潟地震の復興のシンボルとして建設された、新潟県民会館のことが頭を過りました。文化芸術からの復興も必要だという思いから、魚沼市小出郷文化会館を一日でも早く復旧したいと考え、10日間会館に泊まり込みながら復旧工事の見積算を行い、行政のトップを説得して、不眠不休での工事をお願いし、震災から2週間後には通常利用が可能となりました。

「文化芸術の力を活かして復興に寄与したい」

そう模索する中、全国各地から慰問公演やチャリティコンサートの要望が殺到しました。しかし途方に暮れている避難所では、公演や演奏を喜んでくれる方だけではなく、迷惑に感じる方もいらっしゃいます。そこで文化会館が窓口となって慎重に調整し、被災地の状況やニーズを把握し、会場を避難所とは別に設営して、希望者が鑑賞できるよう配慮しました。この経験を活かし、魚沼市が原発事故による福島からの避難者を受け入れた時も、同じような気配りを行いました。

また、大地震で疲弊した魚沼市を元気にする企画を立ち上げようと、魚沼市小出郷文化会館から各市民団体や行政組織に声をかけて、ワークショップや検討会議を重ね、官民50団体からなる「プロジェクト結実行委員会」を発足させました。地元^{ゆい}に昔からある「結」という助け合いの精神を柱に、人と人との結びつきを大切に、助け合い支え合いながら復興のまちづくりを進めることを目的としました。

同プロジェクトによる「復興メモリアル結の灯り事業」や「震災復興イベント事業」、「結8万8千の雪灯り事業」には、年間を通して多くの市民が参画し、今も継続しています。中でも「結8万8千の雪灯り～越語魚沼冬物語～」は、旧6町村で開催されてきた冬のイベントや行事と、文化会館によるアウトリーチ事業を融合

したものです。それぞれの地域での伝統ある行事やイベントの各会場を、シンボルである「結の灯り」のリレーによって、点から線、線から面とつなぎ、魚沼市の新たなまちづくりの一環として定着しました。

こうしたイベントを進めていく過程で文化芸術を活かして中越大震災からの復興をめざす、広域で大規模な事業の企画運営に関わる機会もいただきました。一つは、平成18年度に（財）地域創造から特別に文化芸術からの復興事業として助成を受けた「中越大震災復興祈念プログラム」です。（社）日本クラシック音楽事業協会から共催していただき、アウトリーチという概念を活用した事業となりました。被災地となった長岡市、見附市、小千谷市、川口町、魚沼市において、サロンコンサートと学校訪問コンサートなど、26日間で38公演を開催しました。

演奏家については、財団法人地域創造の公立ホール音楽活性化の登録アーティスト6組に依頼し、学校や施設などに出向いていただきました。11月には、6組の演奏家が一堂に会し、被災者を招待して、中越大震災復興祈念ガラコンサート並びに小学校5年生招待コンサートを開催しました。いずれも心のこもった素晴らしい演奏で、各被災地域の方々に好評をいたく共に、アーティストにとっても収穫の多いコンサートとなったようです。

文化芸術が震災復興に寄与できると認識された、貴重な試みとなったこのプログラムは、今後活かすべき事例として記録が残され、平成17年に発生した福岡県西方沖地震の復興にも役立てることができたのでした。

中越大震災復興祈念プログラム

主催：長岡市・見附市・小千谷市・川口町・魚沼市

財団法人長岡市芸術文化振興財団 魚沼文化自由大楽実行委員会

共催：財団法人地域創造 社団法人日本クラシック音楽事業協会

出演：白石光隆、大森智子、中川賢一、宮本妥子、バズ・ファイブ、大森潤子、

村越麻希子、安藤裕子、長谷部一郎、山崎祐介、中路友恵

大森智子・中川賢一	白石光隆	山崎祐介	宮本妥子・中路友恵	BUZZFIVE	大森潤子他
ソプラノ & ピアノ	ピアノ	ハーブ	マリンバ	金管五重奏	弦楽四重奏
小千谷市・極楽寺 〈5/1〉 53人	魚沼市・堀之内小 〈5/19〉 60人	長岡市・栃尾産業S 〈5/24〉 61人	見附市・上北谷小 〈6/13〉 60人	川口町・川口小 〈6/21〉 56人	魚沼市・上条小 〈7/20〉 28人
小千谷市・東山小 〈5/2〉 20人	魚沼市・伊米ヶ崎小 〈5/19〉 41人	長岡市・栃尾南小 〈5/25〉 60人	見附市・田井小 〈6/13〉 50人	川口町・泉水&田麦山小 〈6/21〉 39人	魚沼市・宇賀地小 〈7/20〉 60人
小千谷市・山谷小 〈5/2〉 20人	長岡市・越路商工会館 〈5/20〉 80人	長岡市・東谷小 〈5/25〉 55人	見附市・文化ホール 〈6/14〉 109人	川口町・生涯学習S 〈6/22〉 76人	魚沼市・子育てS 〈7/24〉 51人
旧広神村・興珊寺 〈5/8〉 84人	魚沼市・堀之内商工会館 〈7/5〉 61人	魚沼市・入広瀬小 〈5/26〉 36人	魚沼市・湯之谷庁舎 〈6/15〉 62人	魚沼市・広神東小 〈6/23〉 92人	長岡市・中島小 〈9/15〉 57人
旧小出町・小出小 〈5/9〉 109人	長岡市・越路小 〈7/6〉 100人	魚沼市・入広瀬中 〈5/26〉 42人	魚沼市・東湯之谷小 〈6/16〉 32人	魚沼市・広神西小 〈6/23〉 83人	長岡市・桂小 〈9/15〉 22人
旧守門村・須原小 〈5/9〉 61人	長岡市・越路南小 〈7/6〉 86人	魚沼市・入広瀬S 〈5/27〉 50人	魚沼市・井口小 〈6/16〉 95人	魚沼市・守門庁舎 〈6/24〉 42人	長岡市・リリックH 〈9/26〉 84人
中越大震災復興祈念ガラコンサート 魚沼市小出郷文化会館大ホール 〈11/19〉 555人					
中越大震災復興祈念 小学5年生招待コンサート魚沼市小出郷文化会館大ホール 〈11/20〉 814人					

*中越大震災復興祈念プログラム報告書より抜粋

もう一つの大規模事業は、平成20年度から21年度にかけて開催した「震災フェニックス～震災から立ち上がる文化の祭典～」です。

中越大震災から5年目にあたる平成21年度に、中越大震災復興基金1億円を活用して大規模な文化イベントを開催したいと、新潟県文化振興課から相談を受けたのが始まりです。文化芸術を復興に活かすチャンスと考え、イベント企画や予算、組織の立ち上げなど水面下で準備を進めました。被災地の公立ホール、企業、NPO、

商工会、青年会議所、観光団体など30を超える団体をお願いして実行委員会と幹事会、事務局を組織しました。

事業運営については、被災地の公立文化施設が企画立案して各文化団体に事業委託することになりました。私は準備に関わっていたという経緯から、コーディネーター兼チーフディレクターという重責を負うことになりましたが、震災フェニックス実行委員長には長岡造形大学の豊口理事長が就任してくださり、また、総合プロデューサーは、新潟県や長岡市の文化芸術事業でも活躍している著名な作曲家の三枝成彰さんが快く引き受けてくださいました。実績あるお二方のもと、大船に乗った気持ちでスタートすることができました。

同イベントのテーマは【感謝を心から心へ】といたしました。中越大地震によって傷つき、絶望していたとき、多くの人が差し伸べてくれた手に支えられ、励まされ、歩き出す力をいただきました。寄せられた温かい支援に対して、全国へ、世界へ向かって感謝の気持ちを発信できるようにと、1年間にわたって事業を開催することになりました。

このような目的に貫かれた活動を広く告知するために、ホームページを立ち上げ、事業のシンボルマークとしてロゴマークを募集したところ、全国から357点の応募があり、震災フェニックスをイメージできるデザインを選びました。また、アントニン・ドヴォルザーク作曲の交響曲第9番ホ短調作品95「新世界より」第二楽章に、歌手の平原綾香さんが自ら作詞して歌ったテーマソングのCDを全国発売して、震災フェニックスの目的と活動をアピールしたのでした。

震災から立ち上がったキッズミュージカル。大合唱して歓喜した市民合唱団のレクエიმ。心をゆさぶり生きる力を呼び起こした鼓童の響。平原綾香さんのメッセージに込められた新世界のメロディー。感謝の気持ちを込めて一年半を駆け抜けた震災フェニックス。

被災地の人たちの想いを、「音から人。人から心。心から心へ」とつなぎ、未来を担う子どもたちへ永遠につないでいくことになりました。一年半にわたる85のイベントによって、感謝の心を音と灯りで紡ぎ、新たな地域を創造するきっかけになったと思っています。

こうして「プロジェクト結」や二つの大規模復興事業に関わる中で、文化芸術は人々に勇気と希望を与える力があると再認識いたしました。たとえば被災した子供たちがミュージカルに挑戦し、元気を取り戻してゆく姿は、中越大地震で被災した人々に勇気と希望を与えてくれました。次は東日本大震災の被災地でキッズミュージカルの巡回公演を実現したいと願っています。

震災フェニックス～震災から立ち上がる文化の祭典～

主催：震災フェニックス実行委員会

- ・実行委員長：豊口協
- ・総合プロデューサー：三枝成彰
- ・コーディネーター兼チーフディレクター：桜井俊幸

【平成20年度】

年月日	曜	事業名	会場	主管団体
20年7/1～ 21年3/31		キッズ・ミュージカル制作'08創作 ワークショップ・脚本などの制作	魚沼市小出郷文化会館他	魚沼文化自由大楽実行委員会
〃		震災フェニックステーマソング制作		桜井コーディネーター
〃		震災フェニックスロゴマーク制作		桜井コーディネーター
〃		震災フェニックス事業計画、事業予算の策定		桜井コーディネーター
20年10/5	日	キッズ・ミュージカル 08イベント	柏崎市「夕日ドーム」	魚沼文化自由大楽実行委員会
12/20	土	震災フェニックスメモリアルコンサート	長岡市立劇場	(財)長岡市芸術文化振興財団

【平成21年度】

4/25	土	「震災フェニックススタートイベント」 震災フェニックススペシャルオープニング	長岡市立劇場	NPO法人 復興支援ネットワーク・フェニックス
5/10・6/13・ 6/14	土 日	復興和太鼓の響演 (鼓童・新潟県太鼓連盟)	長岡市山古志体育館・魚沼市小出郷 文化会館・見附市文化ホール	魚沼文化自由大楽実行委員会

≫行政機関・文化施設等の活動についての報告

5/19～11/14	サロンコンサート(12回)	川口町交流会館他11ヵ所	魚沼文化自由大楽実行委員会
5/19～11/15	学校訪問コンサート(23回)	十日町市十日町小学校他22校	魚沼文化自由大楽実行委員会
7/10～11/15	チャリンコ魚沼産ジャズ講談(6回)	南魚沼市浦佐毘沙門堂他5ヵ所	魚沼文化自由大楽実行委員会
7/14～16	中越沖地震復興祈念ふれあいコンサート(10回)	刈羽村生涯学習センター他7ヵ所	(財)新潟県文化振興財団
8/9	日 復興ライブコンサート	響きの森公園	魚沼文化自由大楽実行委員会
8/23～10/11	'09震災フェニックスキッズミュージカル(5公演)	東京都足立区シアター1010 他県内3ヵ所	魚沼文化自由大楽実行委員会
9/21～12/4	復興映画祭(6回上映)とトークショー	サンローラ川口他3ヵ所	長岡フィルムコミッション
10/23	金 復興フェニックスの灯り(6会場)	川口町、長岡市、小千谷市、魚沼市	(財)山の暮らし再生機構
10/23・24	金 10.23追悼響演 土 10.23追悼響演	小千谷市総合体育館野外特設ステージ 小千谷市総合体育館メインアリーナ	魚沼文化自由大楽実行委員会
12/6	日 三枝成彰レクイエム演奏会	長岡市立劇場	(財)長岡市芸術文化振興財団

【特別企画】新潟アジア文化祭

22年1/11	月	にいがたニューイヤー・ガラコンサート	りゅーとびあ	(財)新潟県文化振興財団
2/14	日	アジア・ポップス・フェスティバル in 新潟	新潟県民会館	(財)新潟県文化振興財団
2/21	日	新潟の芸術 Noism & 鼓童	りゅーとびあ	(財)新潟県文化振興財団
2/27	土	シンポジウム	朱鷺メッセ	(財)新潟県文化振興財団

*震災フェニックス報告書より抜粋

大震災の発生直後は、多くの支援が寄せられますが、2年、3年とたつうちに、少しずつ記憶が風化し、被災者が孤独死するという悲惨な状況が多発します。道路や建物など目に見える物は復旧できても、人々の心の傷や苦しみ、悩みは容易に治るものではありません。中越大震災復興プログラムや震災フェニックスは、このようなことを踏まえて、心のケアが必要な時期に文化芸術をマッチングさせたからこそ成果があったと自負しています。

東日本大震災から2年がたちますが、復旧や復興はまだ途上であり、未来が見えない被災者たちは、心も体も疲れきっていることでしょう。今こそ、文化芸術の力が必要とされるタイミングではないかと私は考えています。文化芸術による復興推進コンソーシアムが中心となって、公立文化ホールが連携し、文化芸術が本来の力を取り戻すことを期待するとともに、一日でも早く被災地が復興するよう、心から祈念しております。

震災からの復興に、自然と歴史と文化を

岩手県大槌町 教育委員会
生涯学習課長 佐々木健

はじめに

震災復興の話からは、かなり逸れる話から始めたい。

ずいぶん古いことだが、阿久悠という作詞家が次のように書いていたことがあった。

旅立つ思いを知っていたのか、昔の写真を見ては泣いてた
古いレコードが針飛ぶように、「好きよ」とそれだけ繰り返してた

沢田研二の「燃えつきた二人」の二番の歌詞冒頭。三億円事件を題材にしたドラマ「悪魔のようなあいつ」の主題歌、「勝手にしやがれ」は、たしかその年のレコード大賞を。これらは「いくつかの場面」というアルバムに収められている。

東京に暮らし大学生だった私には、当時、これが大人の世界の話かと、ある種の羨望があったのかもしれない。

「古いレコードが針飛ぶように、それだけ繰り返す」、みたいなことを今、行っている自分がいることに気付かされる。

14.5メートルの防潮堤

ここから本題に入りたい。

継続することの大切さは、ここで論じるまでもない。沉んや、言いつ放し、やりつ放しなどは、相手にしたくない。

震災復興。この文字をパソコンで入力するには、三秒もあれば済む。けれど、復興はいつになることやらである。所謂定年まであと4年。それまでに、なんて到底無理なことである。自分の町が、復興。どんな町になるのだろうか。いや、そんな客観的な立場でモノを言えるのなら、まだ気が楽である。行政の職にあって、物事を前に進めなければならない立場にあるとき、悠長に構えてはいられない。計画策定の業務もそうであった。

誰もがそうであるとは言えないかもしれないが、自分が興味関心を持つことについては、蘊蓄を並べたりいとも容易く行えるであろう。もちろん、すべての知識が正しいと言えないとしてもである。

復興計画の柱となるもの、それは、人々の暮らし、そして防災。そこに、文化芸術など入り込む余地はない、いや、なかった。

けれども、ハード整備のことだけが先行してしまうことに、大いなる危惧を抱かざるを得なかった。答えは明白である。そこに暮らすのは、生身の私たち人間であり、すべての生き物も、である。「コンクリートから人へ」と宣った政党がかつてあったが、そういう次元の話ではない。

今回の震災津波は、自然の中に暮らしていることを、改めて考えさせられた。過去の経験から、防潮堤の高さは6.4メートル、それで護られると信じてきた。けれども、人工的な「モノ」は、悉く破壊されてしまった。そして、今度は14.5メートルの堤防を築き、その中で暮らすことを選択した。住民との合意である。そのことは、所謂「復興計画」に、ある。

合意形成のパラドックス

平成23年12月に策定された「大槌町東日本大震災津波復興計画基本計画」。「はじめに」に、計画の策定に当たっては、住民とともに創り上げる視点から、町内十の地域からなる地域復興協議会を立ち上げ、議論していただきました。意見の取りまとめ役として、東京大学を中心とする専門家にコーディネーターを務めていただきました。このほか、再生創造会議の委員や復興まちづくり創造懇談会のアドバイザーからも多くのご意見をいただき、計画に反映させていただいております、と碓川豊町長は書き残した。

一方、同報告書の後段に策定体制が記されている。そこでは、懇談会について、「震災を乗り越える新しい大槌町のまちづくりを展望していただき、喫緊の短期的課題から5年、10年先を見通した中長期の課題の解決に向けて、アドバイスをいただいている」と懇談会が行われたことは取り上げられてはいる。けれども、具体的な内容、報告書の内容、存在のことは、遺憾ながら触れられていない。

復興計画策定のプロセスにおいて、「大槌町復興まちづくり創造懇談会」が存在した、存在していたのである。けれども、既述のように、その存在は文字に残されても、多くの具体的な提言は、世に知られることには至っていない。

その報告書には以下のようにその懇談会を意義付けしている。それは、町長の諮問に応じ岩手県内外の専門家が意見・提言するための懇談の場、という位置づけである。さらに、多方面に渡る高度で専門的な知見の結集が求められる、とある。「中立の立場で、直接、意見・提言をいただく場としてであり、震災を乗り越える新しい大槌町のまちづくりを展望していただき、喫緊の短期的課題から10年先を見通した中長期の課題解決に向け、忌憚のないアドバイスをいただくことが目的」とされていた。

この懇談会のメンバーの一人、大同大学工学部准教授鷲見哲也氏は、「大槌町復興まちづくり創造懇談会報告書」に、次のように記した。

水災害については、リスクから逃げるか逃げないかである。堤防が高くても津波は襲う。リスクからは逃げ切れないが、高台に逃げることはできる。リスクを受け入れてまちづくりをするためには、津波の記憶を継承できるか、どう考えるかである。リスクをどう受け入れるかはコミュニケーション出来ていない。どんなリスクがあって、誰がリスクを請け負うのか話し合うことが必要である。他の納税者からお金をもらうのか、自分たちで積み立てていくのか。遠い将来の資産リスクを負う法制度の整備が必要である。

町方から撤退する決断をするのであれば、そうすべきではないか。説明は可能である。

リスクを回避したら、人類はリスクに鈍感になる。それが人間の歴史だ。人間は獲得したものを放棄することも一緒に合意すべきである。

この鷲見氏の提言は、復興計画策定の過程において、住民に示されることはなかった。つまり、14.5メートルの防潮堤を選択するプロセスに、創造懇談会の提言は示されることはなかったのである。

町民憲章が目指す「まち」

総合計画は、地方自治法第2条第4項「市町村は、その事務を処理するに当たっては、議会の議決を経てその地域における総合的かつ計画的な行政の運営を図るための基本構想を定め、これに即して行うようにしなければならない」とあり、これを根拠に策定する自治体の全ての計画の基本となる最上位の計画とされている。復興計画はその上にはない。

自治体毎に策定された総合計画は、目指すべき「まちづくり」の根本的なことを「憲章」として、その多くが条例で定めている。

昭和48年10月20日に制定された「大槌町民憲章」は、以下のとおりである。

- 1 自然を愛し自然を大切にしましょう
- 1 産業を興し豊かなまちをつくりましょう
- 1 健康できまりある生活をしましょう
- 1 香り高い郷土の文化を育てましょう

1 安全で住みよいまちをつくりましょう

復興計画を策定する作業途中にあって、優先される検討項目は、住民がどこに暮らし、どういう生計を立てるか、であった。

そうした中にあって、町のアイデンティティーである「文化」に関する推進施策の盛り込みを、私は強く発言してきた。なぜなら、憲章によってあるべき町の姿を具現化するには、そこに人々が暮らし、営みが繰り返される、そうした日常がそこには存する、そうあらねば「まち」ではないのである。



まちづくりのゴールである町民憲章に、自然も文化も謳われてはいるが…

2 割の自治体の未来

文化庁による、「文化芸術による復興推進コンソーシアム」、この復興推進員の任を受け、何度かの会議に出席させていただいている。ここで、ハード整備のみではなく、どういう「まち」を「つくる」のかにおいて、「文化」に関する施策展開を欠いては、無味乾燥の金太郎飴的な「町」になってしまうことを危惧すると発した。

後日、同コンソーシアムの事務局は、悉皆ではないが、被災自治体の復興計画を調べ、その2割の自治体において、文化に関する記述がないことが報告された。

渋谷昌三氏の「コップ半分の水」とは次元が異なるであろうが、「8割の自治体が文化を盛り込んだ」と樂觀して良いのか、「2割の自治体が文化を盛り込んでいない」と悲観すべきなのか…

言葉は、過去と現在と未来を繋ぐ媒体

人間は、自分の言葉で思考する。感情も、言葉である。言葉は、文字で覚えるのではなく、音声として認識され、それが文字に置き換えられ、情報として、さらには知識として蓄積される。人間が優れているのは、その知識を知恵に変える「術」を知っていることであろう。

その「術」、これもまた外的刺激である、情報。つまりは、音声で得られる文字、或いは視覚におけるそれであろう。

かつて、平成の大合併の嵐が日本全土を襲った。ご多分に漏れず、我が大槌町もかつての鉄の町釜石との合併が画策された。当時、役所の企画担当にあり、合併しないことを、「まちづくり指針」にまとめた。平成16年のことである。以下にその一部を引用したい。

(略)そして今、次のような結論を導くに至りました。それは、「持続可能なまちづくりを目指す」というものです。また、スケールメリットの考え方とは別の視点でこれからの「まちづくり」を俯瞰すると、これまでのような大きな成長が望めない現実にあつては、「地域の成長」を考える時、これまで歩んできた時間と知恵の蓄積を踏まえ、身の丈にあった「地域の成長」を目指すことが、町民憲章が求める「まち」により近づける方策であると考えます。もしかすると、人によっては広大な遊園地が欲しいかもしれません。しかしながら、毎日そこに遊ぶ訳にはいかない現実があります。一方では、大槌町固有の、オンリーワンのものが沢山あります。他に比して優れたものがたくさんあります。それは、自然であり、先人が育んできた歴史や文化でもあります。



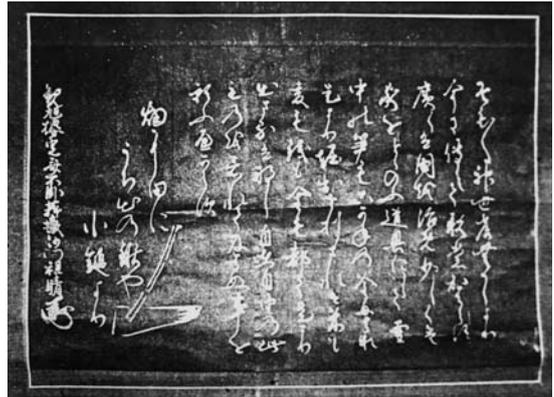
枯渇することのない湧水、盛り土や公園整備により消えてしまっているものか

そしてなりより、それらが様々な変遷を経ながらも、現代に継承されてきたことです。

鍬

江戸時代の大槌の仏教者、菊池祖晴は、「鍬讃」と呼ばれる軸に、次のように記している。

そもそも神世のむかしより
今に伝じて敢もかわらず
広くは国を治め
少しくは家をととのう道具にして
雪中の筍もこがねの釜も
みな是より掘出せり
されば米も麦も銭も金も
都て是より出でざるはなし
自在自由の此ものを忘れて
及ばぬことを願うべからず
畑に田に
うち出の鍬や
小鍬より



江戸時代の仏教者、菊池祖晴の「鍬讃」

今さら言うまでもないのであるが、「文化」という日本語は、明治の福沢諭吉等が英語の culture から作り出した言葉。culture は「耕されたもの」、その語源は、cultivate 耕す。土を耕すと、Agriculture 農業、水を耕すと、Aquaculture 養殖、自分自身を耕すと Self-culture 自己修養、という言葉が派生している。

耕す行為、いついかなる時も、不可欠である。

文化とは

ひょっこりひょうたん島や吉里吉里人を著した井上ひさしは、次のことばを残している。

「文化とはみんなの日常生活を集めたものである」

井上のふるさと山形県東置賜郡小松町、現在は川西町。近傍の温泉に幾度も足を運んでいたようである。かみのやま温泉の「古窯」に、その文字が記された楽焼きの皿を見つけることができた。

おわりに

「古いレコードが針飛ぶように、それだけ繰り返す」、みたいなことを今、行っているのである。

震災からの復興に、自然と歴史と文化を。

復興はいつになることやら、ため息も出よう。けれど、そこに暮らす人間は、コンクリートの中ではなく、自然と歴史と文化と共に生きている、はずである。

東日本大震災で被災した博物館の復興に 対する日本博物館協会の取組みについて (報告)

財団法人日本博物館協会専務理事 半田昌之

はじめに

財団法人日本博物館協会（日博協）は、東日本大震災発生後、被災地の博物館に対する復興支援を最も重要な課題と位置付け、幾つかの事業に取り組んできた。その柱となった活動が、震災発生後に文化庁の呼びかけによって組織された、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会（救援委員会）の構成団体の一員として、文化財レスキュー事業に参加・協力することであった。文化財レスキューは、地震や津波等によって被災した博物館等から文化財を救出し、安全な場所への移送・ダメージを受けた資料への応急的な処置を中心に、その後の本格的修復を経て最終的には所蔵者の手許に返却する事業である。1995（平成7）年に発生した阪神淡路大震災以降、文化庁をはじめ関連団体による組織的な事業として徐々に整備が進められてきたが、日博協が組織として被災文化財のレスキュー事業に本格的に関わったのは、今回が初めてのことである。そのため、初段階からの体制作りは、試行錯誤と手探りのなかで積み上げた部分もあるが、何とか最小限の役割を果たす基盤は作ることはできたのではないかと考えている。本報告では、2年間にわたる日博協の活動について、その概要をご紹介します。現状における課題を整理し、今後に向けた方向性についてコメントさせていただくこととしたい。

日本博物館協会について

日博協は、日本の博物館の振興を主たる目的として1928（昭和3）年に設立された団体で、会員となった国内の博物館を中心に構成され、普及・啓発や資質向上、調査研究、助成・援助、そして国際交流等を柱に、全国博物館大会や研修会の開催、月刊誌「博物館研究」の発行など様々な事業を展開している。館種・設置者を問わない全国規模の博物館の調整団体として、現在約1,100の施設が会員となって運営されている。会員は、独立行政法人を含む国公立から財団法人、大学、会社、個人とさまざまな設置者から成り、博物館としての種類も、総合博物館から歴史系、美術館、科学系博物館、動物園や水族館、植物園等を含む幅広い施設が加入し、国際博物館会議（イコム）の、日本における国内委員事務局も日博協に置かれている。一方、近年の博物館を取り巻く厳しい社会環境のなかで、会員数の漸減傾向など日博協の財政状況も厳しく、ギリギリの人員で多くの業務を処理せざるを得ず、事務局の運営に苦慮する実情があり、大きな災害発生時の対応等、突発的な事態に対処する体制は整っているとは言いがたい。しかし、このたびの震災への対応については、日博協の果たすべき役割を再確認し、甚大な被害を受けた博物館について、単にモノとしての文化財の救出だけでなく、それぞれの地域のなかで博物館が果たしていた本来の役割を取り戻すまで、組織として出来得る限りの協力を持続的に行なうことを基本方針として取り組んでいる。

初動対応から文化財レスキュー事業への参加

2011（平成23）年3月11日の地震発生の後、日博協では、全国の会員館への義援金の呼びかけ、文部科学大臣等に対し復旧のための助成制度創設についての要望書提出等を行ない、4月5日には、今後の対応の在り方

を検討するために「東日本大震災緊急対策委員会」を設置した。委員会では、被害状況調査は時期尚早との意見が強く、また、日博協独自で積極的に活動を展開するには人手や予算が決定的に不足していることから、当面はインターネットを利用した情報提供を行なうこととした。被災地域の会員施設については、ホームページで収集できる情報を整理し、博物館関係の諸団体や有志によって既に行われていた情報収集・情報提供の活動とリンクして、日博協のホームページで公開した。

一方、文化財レスキュー事業については、参加する意向は固めていたが、具体的な活動イメージを持つことはできずにいた。こうしたなか、4月15日に開催された第1回目の被災文化財等救援委員会の会合を経て、日博協としてレスキュー活動に参加可能な人材を把握することが求められた。このような動きを受け、文化財レスキューを中心とする今後の復興事業への取り組み、海外への被害情報発信等へ対応するため、日博協は、イコム日本委員会と共同で「日本博物館協会／イコム日本委員会 東日本大震災対策本部」を設置し、4月27日の第1回会合において、博物館の被災状況調査や、文化財レスキュー事業への協力、参加志望者の把握などを日博協として実施することが決定された。

救援委員会が求める「救援活動参加専門家のエントリー」については、日博協の会長名で全国の会員館園1,105施設に対し参加志望調査を行い、最終的に2011（平成23）年度は42館146名がエントリーするに至った。このエントリーについては、派遣を志望する職員を、各人が所属する組織が職務派遣という位置付けで、現地に出張させる対応が可能なことを原則としている。結果的には、2011年度の日本博物館協会からの専門家派遣は、計11回実施され、22館から延べ45名の学芸員を中心とする職員が参加した。派遣先は、岩手県陸前高田市・山田町、宮城県石巻市・気仙沼市・南三陸町の、一部個人所有の文化財を含む博物館施設であった。現地での作業内容は、被災した施設からの文化財の搬出や、応急処置としての資料の洗浄や整理作業が中心となった。参加者の多くが現職の学芸員であり、日頃から所属する博物館で、多様な資料を取り扱う作業に携わる人々であったため、文化財資料の扱いに対する基本的な知識を持っていたことが、現地での緊急性を必要とされる作業の進行に、少なからず貢献することができたと考えている。

この救援委員会を核とする文化財レスキュー事業は、当初1年間の予定で始まったが、とても収束できる状況ではなく、2012（平成24）年度も延長されることとなった。日博協は、改めて館員館に前年度と同じ条件で志願者を募り、27の会員博物館から83人の参加志望者がエントリーした。2012年度の現地でのレスキュー活動は、県単位での体制が徐々に整えられつつあるなかで、緊急性を伴うレスキューの件数が大きく減少したため、前年のような規模での派遣要請は、救援委員会から日博協に寄せられることはなかった。その一方で、福島県については、原子力発電所の事故により全住民が避難を強いられている警戒区域内の文化財が震災後も現地に放置され、1年延長された救援委員会の大きな課題であった。こうしたなかで、夏ごろまでには現地の状況も把握され、福島県と救援委員会が、具体的な手順を整理することができたことから、警戒区域内からの文化財のレスキュー活動が本格的に動き出した。日博協も、救援委員会からの要請を受け、双葉、大熊、富岡の3町の博物館施設内に残された文化財の搬出に関する業務へ、4回の専門家派遣を行なった。ただし、警戒区域内への専門家派遣については、事務局が設定した基準として、原則50歳以上という条件が付与されたこと、また、警戒区域内での業務であることから、派遣に要する諸手続きが複雑である一方、職員を職務派遣する判断が難しいという背景もあり、実際に派遣できた人数は少数に留まった。しかし、1年半を経てようやく始まった警戒区域からの文化財のレスキューに、日博協として関わるることができたことは、今後に向けても大きな収穫であった。

今後に向けて

こうして、文化財レスキューを中心とする日博協の2年にわたる復興への取り組みも3年目を迎える。始まったばかりの警戒区域からのレスキュー作業の状況を見ても、被災した地域の博物館の復興への道のりはまだまだ遠い。一方で、緊急措置として設置された被災文化財等救援委員会は、2013年3月で解散となる。確かに震災から2年経ち、被災地の博物館も少しずつ体力を回復し、日々の落ち着きを取り戻しつつあるともいえよう。しかし、警戒区域だけでなく、津波で甚大な被害を受けた地域の博物館では、復興の道筋さえ見出せない施設も少なくない。言うまでもなく、地域に保存されてきた多様な文化財は、歴史と文化の証人として、それぞれ

の地域の人々にとっては、故郷に対するアイデンティティそのものである。被害を受けた文化財が、レスキュー事業のなかで修復され元の姿に近づくことは、もちろんとても大切なことであり、しっかりと為されなければならない基本的な事業である。しかし博物館は、こうした文化財の単なる保存機関ではない。残された資料をしっかりと守る一方で、学芸員の調査・研究をとおして、それぞれの資料が持つ地域にとっての意味や価値を引き出し、展示など、さまざまな方法で活用することで地域の人々に還元することこそ、博物館に与えられた使命である。そのためには、モノとしての文化財だけでなく、人が集う場としての施設、モノと人の架け橋である学芸員、その施設全体を運営する組織など、博物館を支えるそれぞれの機能が震災の前の状態に戻り、そこに集う人々が生き活きと地域を学び、また、コミュニケーションの場として笑顔で語り合える場として再生を果たさなければならない。

こうした博物館の復興・再生への歩みは、言うまでもなく、その地域の人々に受け継がれてきた祭や芸能など、無形の文化財とも深い繋がりを持っている。この1年、文化芸術による復興推進コンソーシアムの運営委員の一員として、微力ながら関わらせていただいたなかでも、その目指す方向性と日博協との強い関連性を認識させられた。しかし、その一方で、有形の文化財を主体とするものと、無形文化財に重きを置く活動は、行政の窓口等を含め、本来一体的な取組みであるべき部分に、なかなか横の連携が取り難い課題もあることも学ばせていただいた。

日博協では、今後、文化財レスキューへの協力はもちろんのこと、本来在るべき博物館の復興に向けて、活動の幅を広げた支援の在り方を考え、息永く持続的に取り組んでいきたいと考えている。そのなかで、本コンソーシアムとの連携、協働は不可欠なものと強く認識している。是非、意味ある協力体制を作り上げ、被災地の人々に笑顔が戻る復興のスピードが上がるお手伝いをさせていただきたいと願って止まない。

震災後の公立文化施設・文化政策の 行方を探る

えぞこホール 水戸雅彦

震災からまもなく2年。途中経過の振り返り。

3.11からまもなく2年経とうとしている。鮮烈に蘇る記憶と、混濁し少しずつ消え去り始めている記憶が去来する中、復興への途中経過の振り返りとして、ちょっとしたまとめをしておこうと思う。

今回の震災について、千年に一度の地震、津波というも言われ方をしたりもするが、資料を紐解いてみると、三陸地域においてこの千年で少なくとも10回以上の大規模地震大津波が起こっており、ここ百年で3回の大地震、大津波に襲われている。1896年（明治29年）の地震、津波（明治三陸津波）、死者行方不明22,000人以上。1933年（昭和8年）の地震、津波（昭和三陸津波）、死者行方不明3,000人以上。そして今回の東日本大震災（平成三陸津波）では、死者行方不明18,000人以上。それぞれ津波の規模は最大で20～40mに達しており、同等の規模であったようだ。百年はそれほど長い期間ではない。にもかかわらず、私たちの記憶から、過去の災害はほとんど消え去ってしまっている。どうも人類は2世代（60～70年程度）ほど世代交代してしまうと、災害の記憶が次世代に伝承されないようだ。関東大震災の数年後に、寺田寅彦が人はあつという間に災害を忘れていくということをエッセイに書いているが、まさにそのことが今現在進行形で進んでいる。（“天災は忘れた頃にやってくる”は、寺田寅彦の発言した言葉であるが、出典は別にあるようである。）

被災地で起こったこと。

内在化していた問題が顕在化したということ。

初めて沿岸部に足を踏み入れたのは津波が来て1週間目のころであった。海岸沿いは漸く車が入れるようになったばかりで、通行止めの箇所も多数ありまだ行き交う車はそれほど多くはなかった。そして、そこにはまるで大規模な空爆により街がすべて瓦礫の山となったような光景が300キロ以上にわたって連なり、車をどこまでも走らせ続けても途切れることなく延々と続いていた。そんな光景の中、自衛隊は当然のこととして、他県の警察、消防、行政の車が既に支援に入っていた。これには驚いたと同時に少なからず感動した。震災の復旧という緊急の状況下とはいえ、行政はあつという間にその垣根を乗り越え、たくさんの人達が協力体制の中で献身的に活動していた。率直な感想として、平時においてこの協力体制をつくる事が出来るなら、驚く程パワフルに柔軟性を持った素晴らしい仕事が展開できるのだろうと思った。

一方、被災者に起こったことは、家族、コミュニティ、経済基盤（仕事）の崩壊。精神とアイデンティティ（地域、個人）の崩壊。それまで自分が寄って立っていたところや心の支えが崩壊、あるいは崩壊の危機に瀕しているということなのだと思う。それは考えてみると、平時においても一部のマイノリティ（社会的弱者）が常に抱えている問題であるともいえる。

これらのことを考えて思ったのは、震災で起こったことというのは、日ごろ内在化していた問題が顕在化し



たということではないかということ、とすれば平時から常にそういったことを意識して事に当たっていれば、災害の際にさまざまな局面で柔軟性のある運営、活動ができるということなのだと思う。

被災地・被災者支援とは

全国からたくさんのアーティスト、その関係者も支援に入った。それらの善意に対しては深く感謝し、敬意を表するものであるが、中には親切の押し売りや、一部自分のプロモーションになってしまっているものもあり、受け入れ側が閉口したといった話を聞いた。また、あまりにも多くの支援が殺到したため、「被災者にも土日は欲しい」という状況もあったようである。支援は、支援を受ける側の立場に立って考え、状況を十分把握した上でなされるべきと思う。たまたまエドガーケーシーの本を読んでいて、支援についての示唆的な文章があったので引用する。



「人助けとは、自分より弱い立場の人たちを、かわいそう、かわいそうと言って、その弱いままにさせておくのではなく、その人の個性を見て、育て、その人に自分でやる気になってもらい、自分自身の理想を明確にして自分の足で前進するように援助することである。」
 「援助とは、人を引っ張り上げるのではなく、はじめお尻を押し上げて、やがてその人によって引き上げられるようにその人をする。その人が自分自身の生命エネルギーを活かして生活できるように仕向けることであって、けしてその人を物質的に援助して、それだけで良しとすることではないし、またその人が自分でなくてはいけない機会を奪って、私たちがどんどんやってしまうことでもない。」

震災直後から継続的に支援に入っているJCDN（ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）の佐東さんがこんな話をしてきた。「私たちが被災地で何かをするということではなく、私たちが、被災地の人たちに盆踊り、お神楽を習いに行くことが大切なのではないか」。盆踊り、お神楽は地域のアイデンティティであると同時にそこに住む人たちのアイデンティティでもある。その崩壊の危機に瀕している盆踊り、お神楽を誰かに教えるということは、アイデンティティの再生、再構築そのものであり、そのことを通して地域、個人が再生していくのだと思う。

同様に、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（<http://asttr.jp/>）も、東京アートポイント計画の手法を使い、地域のコミュニティに対して、現地の団体と協働してアートプログラムを実施する事業として、地域の主体性に立脚した支援を継続的に展開している。この事業には、えずこホールも宮城県の事務局として微力ながらお手伝いさせていただいている。

さて、支援のあるべき姿について考えていてある思いにたどり着いた。それはそのまま地域に根ざしてさまざまな活動を展開していく際に大切な考え方そのものであるということだ。地域の実情に即し、そこに住民の主体性に立脚して事業を展開する。これは、被災地支援、まちづくり、アートプログラムを問わず、また、平時、災害時を問わず、何をするにしてもさまざまな場面において最も大切なことなのではないかと思う。

震災後の劇場・ホールのあり方

震災後の宮城県の劇場、ホールの状況を概観すると、沿岸部のホールは避難所となって三ヶ月から半年間その対応で精一杯、その後少しずつ平常化へ向かうが、石巻文化センターにおいては、現在も再開の目途が立っていない。そして、管理する建物がないという理由から、市から指定管理者の石巻市文化スポーツ振興公社へ指定管理料が支払われておらず、公社は基本財産を取り崩しながら団体の存続を図るという異常事態にある。これは、震災後に浮き彫りとなった指定管理者制度の新たな問題点である。

内陸部の劇場、ホールについても、地震の影響でその多くが再開までに半年から1年の期間を要している。再開までの期間は、概ね被害の度合いに比例していると思われるが、どういう手順を経て再開したかも大きな要素となっていたと思われる。つまり、再開を最優先し緊急、応急的な手続きにより修繕工事を行い、再開後も並行して修繕工事を継続したケースと、平時と同様の調査、手続きを経て修繕を行ったケースである。後者の場合どうしても再開まである程度の時間を要してしまう。実際には50館50様のやり方があり、その進め方はそれぞれであったと思われるが、担当職員の考え方や役所の体質が大きく影響していたようである。

また、震災後のアクティビティについて、フットワークよく臨機応変に対応できた施設というのは、平時においても、地域と繋がり、さまざまな事業をこまめに展開していた施設であったと言える。考えてみれば当たり前のことなのだが、平時から地域に密着し、地域の状況を把握し、さまざまな施設、団体と連携し、日々事業を展開していればこそ災害時においても、それがそのまま有用なネットワークとなってきめ細かな活動が可能となるわけである。

劇場・音楽堂に足を運ぶことのない95%の人たちが重要なターゲット

財政難と震災後のさまざまな業務に追われる多くの行政官吏の慌しさをよそに、劇場法の成立、文化庁予算の倍増により、劇場・ホールの関係者は俄かに活気づいている。文化芸術が国民生活にとって必要不可欠であるという認識が歩を進み、そのことによって国や地方の文化的な豊かさがその厚みと広がりを増していくとすれば、それは心から歓迎すべき状況ではあるのだが、その方向性と内容については、さまざまな検討と試行錯誤がまだまだ必要に思える。

劇場法についてであるが、まずはその成立を心から喜びたい。これまで根拠法がなく、劇場・音楽堂の運営指針が、海外の政策や各方面の論文であったり、直接的には各自自治体の自主性に委ねられている状況であったものが、しっかりと国の指針が打ち出されたのである。文化庁の予算が増えたことはまさしく劇場法の成立による最初の大きな成果であると言える。

さて、その内容であるが、前文は素晴らしい。文言で言うと「地域の文化拠点として、」「大都市集中型ではなく、」「全ての国民が、潤いと誇りを感じることでできる心豊かな生活を実現するための場」「地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える」「国際社会の発展に寄与する世界への窓」といったことが盛り込まれており、全国の地域のさまざまな文化状況を包括し、劇場・音楽堂を拠点として、文化芸術により国と国民を豊かにしていくという強い意志が表明されている。

そして、第三条以降には、劇場・音楽堂の事業、役割、国、地方の役割等が明記されているのだが、その内容はほぼ実演芸術中心となっている。これまでの文化・芸術の潮流から考えれば当然のことであり、最も重要な分野ではあるのだが、現在の文化・芸術の新たな動きについてももう少し膨らませた内容としていただけたら更に良いものとなったのではないと思う。それは、三条の八号に記された内容「前各号に掲げるもののほか、地域社会の絆の維持及び強化を図るとともに、共生社会の実現に資するための事業を行うこと。」についてである。

前段で、「震災後のアクティビティについて、フットワークよく臨機応変に対応できた施設というのは、平時においても、地域と繋がり、さまざまな事業をこまめに展開していた施設であったと言える。」と書いたが、これらのアクティビティはその多くが劇場・音楽堂の外で展開されるものである。地域によってばらつきはあるだろうが、劇場・音楽堂の公演に自らの意思で足を運ぶ人口は1～5%程度と推測される。もし、政策として文化・芸術を通して、人と地域の活性化を図っていくことをはっきりイメージするとすれば、むしろ日ごろ劇場・音楽堂に足を運ぶことのない95%の人たちの方が重要なターゲットであると言える。

その事業展開は、例えば、今、全国のさまざまなところでアートプロジェクトが展開されているが、それらの多くは美術館を拠点とせず、地域のさまざまな人や要素と絡み合い、化学変化を起こしながら新たな表現と成果を獲得している。劇場・音楽堂も積極的に地域に足を運びたくさんの回路を開き、老若男女、幅広い層に向けて、潜在的なアートに対する欲求を掘り起こしながら、人々の創造性を引き出し、能動的に活動に関わっていただくことによって、人と地域が活性化していくようなさまざまなプログラムを展開していくべきなので

はないかと考えている。

劇場・ホールはコミュニティの核施設であるべき

地方において、劇場・ホールはコミュニティの核施設であるべきなのだと思う。その一つの例として、最近日本においても度々取り上げられ、ご存知の方も多いと思うが、イギリスのリーズにあるウェスト・ヨークシャー・プレイハウスについて紹介してみたいと思う。

ウェスト・ヨークシャー・プレイハウスは、劇場入口にカフェがあって毎日朝からたくさんの人たちで賑わっている。カフェは朝の9時から夜の7時まで営業しており、観劇に関係なく近くの人が朝食、ランチを楽しめる。併設されているバーは夕方5時半から終演まで開いている。食事を頼まず打ち合わせやおしゃべりをしている人たちもいる。施設が開かれ、たくさんの人たちの憩いの場となっているのである。



そして事業であるが、一方で優れた舞台作品を制作しながら、一方では高齢者、障害者、子ども、幼児、そして一般市民に向けて、多様なプログラムを展開している。その数はなんと年間1,000回を超えるのだそう。一つ紹介すると、毎週水曜日に開催されるヘイデイズ。お年寄り向けのプログラムで、たくさんのプログラムから選んで参加できるようになっている。お年寄りが通年でいきいきとアート活動に参加し、その作品をバザーで売ってさまざまところに寄付するのだそう。アートで余暇を楽しむだけではなく社会貢献の役割も果たしているのである。そして、それらの活動の集積の結果としてリーズ市に100万ポンドの経済効果をもたらしているのだという。まさに社会に開かれ、地域とともにある劇場なのだと思う。

豊かな社会とは、さまざまな人たちが住み、いろいろな価値観が認められ、お互いの存在を認め合い、お互いを助け合って生きる社会なのだと思う。つまり共生社会ということである。劇場法に戻ると三条の八号に書かれていることがそれにあたる。

劇場はもっとたくさんの人たちに向けて開かれ、誰もが参加できるたくさんのプログラムを用意し、公演も事業も何もないときでもふらっと足を運んで憩える場所であるべきなのだと思う。「感動のないところに、成長はない」という言葉がある。また「人生を楽しむことが自己実現へのいちばんの近道である」という言葉もある。劇場・ホールは、優れた舞台芸術を提供すると同時に、すべての人が楽しく豊かに幸せになるためのさまざまなプログラムを用意していくべきだと思う。そして、それはもはやアートでなくてもいいのではないかと考えている。

被災施設の復旧改修から考える

日本大学理工学部教授 本杉省三

1. 順序通りでは済まない復旧行程

大規模に天井仕上げ材が落下した施設など大きな被害を受けたところでは、大まかに（避難者受入れ）>被害概略調査>撤去解体工事入札>撤去解体工事>被害詳細調査>復旧改修設計>見積もり>（補助金交渉/査定）>入札>工事/監理>竣工>補助金交付申請>再開場>補助金入金といった流れでことが動く。これらを順番に進めるのが本来の道筋かも知れないが、大規模震災時においては、そう簡単にことが順序だって運ぶわけではない。客席内は天井からの落下物で立入り禁止にしているものの、ホワイエやリハーサル室等では避難者を受け入れ、舞台裏を支援物資置場にしなければならないといった状態も当然ある。

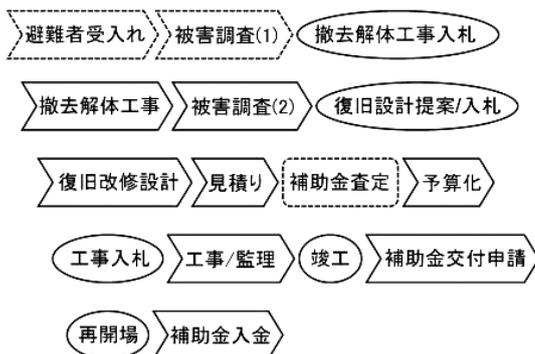


Fig.1 災害時における建物復旧の（推奨）手順

施設管理者は、あるエリアで住まいや家族を失った人々への対応を行う一方、施設の被害状況をできるだけ早くかつ正確に把握しなければならないという任務もある。どんな被害を受けているのかをまずは施設設置者に連絡、報告しなければならないし、それができるのは、その現場に従事している人しかいない。建物や舞台設備が危険な状態にあるのかどうか見ただけでは分からないことも少なくない。このため、今回の全国調査でも、70%余りが事業に影響がなかったとしながらも、28.6%程度の施設が舞台設備会社に点検、修繕を依頼していたことがそれを物語っている。落下物を撤去しようにも脱落しかかっている天井付近に近づくことは危険で二次災害を招きかねない。

3. 被害概要（別紙の写真参照）

(1) 建築関係

- ・外壁及び内壁タイル一部のひび割れ・剥離・落下
- ・RC壁の一部ひび割れ、中空コンクリートブロック壁の一部ひび割れ
- ・ホール客席天井裏内の吊ブレースの溶接部分剥離、及び吊部材の一部落下
- ・集会室天井仕上げ材の一部落下と照明器具の損傷

(2) 外構関係

- ・建物外周の一部の地盤沈下
- ・舗装部分のひび割れ

(3) 建築設備・電気

- ・冷温水配管からの漏水
- ・一部ダクトの損傷、脱落
- ・屋上高架水槽の破損
- ・給排水管の一部破損・漏水・断水
- ・スプリンクラー配管からの一部漏水

(4) 舞台設備関係

- ・電動吊り物用CWがガイドレールから脱落
- ・客席用スピーカーの取付け金具の外れ
- ・映写機アンカーボルトの抜け

Fig.2 初期の被害調査報告事例の一部例

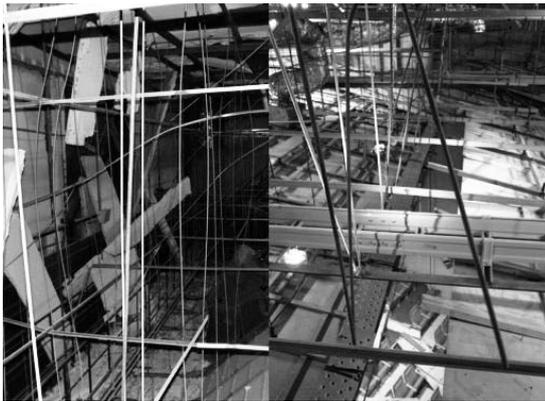


Fig.3 プロセニウム上部乾式壁脱落 (左)
客席天井材落下の天井裏 (右)



Fig.4 ゴンドラによる外壁調査 (左)
客席内全体に足場を組み立てて細部の調査・工事 (右)

もともと天井裏は、点検や保守のために人が歩くキャットウォークがあまり丁寧に計画されていないところが多い。せいぜい人がアクセスできる領域は客席照明用のランプ交換ができる程度に限定されているため、そこから目視できる範囲はおのずから限られてしまう。どこまで危険な状態にあるかを確認しようにも、近付くことさえできない。正確な調査をしようとするれば、安全を確保しながら足場を組み上げ、二次災害の危険を回避しながら慎重に作業を行う必要がある。ある施設の復旧改修工事では、足場を組むだけで2か月、全体工期の1/4~1/5程度も要していたように、一般的な工程通りに行かないのが災害復旧である。

余震のリスクもあり、そのような状況のもとでは、さらにどの部分が落ちてくるかもしれないし、心配が先行し簡単に足場も組み立てられない。つまり、天井の裏側からも下側からも容易に撤去のための準備作業に取りかかれぬのが現実である。通電できず、懐中電灯だけで見て回る、仮設電源から臨時的な明かりを確保するしかないというケースもありうる。天井の仕上げ材や部材・工法は同じようでも、天井裏の状況は施設ごとにまったく異なるので、撤去のための作業計画を組み立てるにも現場を十分調査し、熟知していなければならない。その上、目に見えない事態が現れることもあり、その場での対応にも迫られる。そうした計画は、誰でも出来るわけではなく、作業の手順、方法等を知り経験豊かな専門家でなければできない。足場を組んで近付いてみて、初めて見えてくる被害等もある。高い位置や目の届かないところにある被害は、事前の目視調査では分からないのが普通である。

しかしながら、補助金申請のためには、具体的な被害状況を図面上で正確かつ具体的に示す必要がある。写真だけでは資料として認められない。となると、調査だけでも壁面や客席内に天井まで足場を組み、傾斜のある屋根では、命綱を付けて複数人で安全を確保しながら実施するしかない。そうした特殊作業は、設計事務所やコンサルタントの専門領域を超えている。これら初期の調査は、被害状況を把握し、復旧の手順を計画したり工事費を見積もるための準備作業であり、補助金を申請するための調査だが、それ自身が何か新たに形あるものを生むわけではない。しかし、それにも大きな出費が必要で、調査だけのためにわざわざ足場を設けるの

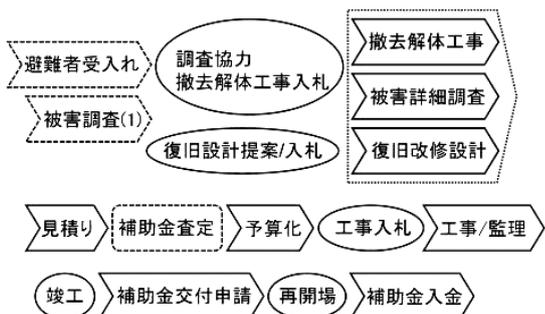


Fig.5 被災建物の緊急復旧手順



Fig.6 天井仕上げ材と壁面にクリアランスを確保

は合理的とは言えない。当然、その後の工事にも使うというのが道理というものだろう。

そうしたことから多くの施設では、先に述べたような手順がむしろ一体的に動くような方法によって復旧プロセスを組立てていた。できるところから調査、図面化と記録写真の整理に取り掛かり、足場を組んで高所や分かり難いところをさらに正確に記録して行くことで時間・コスト・作業手順の合理化を図っていた。場合によっては、工事までを含んで同時進行的に作業が行われることもあり、緊急時における手順が現場の違いにより様々であることがわかる。

2. 被害が甚大なところほど苦勞する

一方、これをまじめに順序通り行った事例では、いまだ再開に至っていないところもある。はじめの年度に被害状況調査を実施し、次の年度に復旧改修の実施設計を発注、そして、ようやくその翌年度に工事に取り掛かるというスケジュールである。被災数年前、ほぼ1年をかけて大規模改修を行っていた施設では、その時にアスベスト撤去が実施されたことが救いだったように思える。もし、それが実施されておらず、被災を受けたまま長期にわたって復旧を待つ状態になってしまっていたとすると、別の問題を引き起こしかねない。地震がこうしたアスベスト問題にもつながっていることに気付かされる。

天井仕上げ材の落下等人の立ち入りがそもそも危険であるような状況でなく、足場等を組んでの調査も必要とされなかった。しかし、津波被害が著しい町にあっては、様々な緊急事態が発生するとともに、街づくりを基礎から見直すという大命題が重くのしかかってくる。町全体の青写真が整わない状態である時、現地復旧工事を進めることに躊躇するのはありうることだろう。文化施設まで手が回らない状況になることは止むを得ない。けれど、そうしている内にも時間が過ぎていく。この間、次の津波被害を想定して、これまで地階にあった機械室、電気室を地上レベルの高い所に移したり、本体建物とは別棟で設けたり、空調範囲をきめ細かくゾーン分けして機械設備の更新・システムを再編したりしている。また、海側に面しているガラス面をコンクリート製の壁面に変更、非常口を全てバリアフリー化等といった改善を盛り込むといった工夫も行われていた。



Fig.7 浸水し復旧を待つ施設
汚泥除去されたが…客席(左) 応急仮囲された展示室(右)

そのように丁寧に順序だって実施してきたおかげで、実際の再開場が被災の3年後になってしまうという。しかも、そうした復旧改修工事に対する補助金の交付は、竣工後に多くの書類を証拠書類として申請し、最終査定を受けてということになる。補助金対象となる復旧改修であるのか対象外であるか判定されて、初めて補助金受け取ることができる。それまでの工事費は自治体を取りあえず負担しなければならず、財政的に体力がないと持たない。こうした事例を振り返ってみると、定められた工程通りに素直に復旧を実施すると、かえって割を食ってしまう格好となってしまったようにも見える。

これまでの過程において、今後何十年かを見通した施設機能の再編、計画の見直し等が検討され、改修工事に反映することができれば、その期間も大変意義あるものとなっただろう。しかし、原状復帰を原則としていることが、そうした方向性まで踏み込めない状況を作り出しているようにも思われる。閉館中にも文化活動関係者や市民の関心を何らかの形で施設に結び付ける活動・展開をして行くことは、次のステップに繋がるものとして期待できる。それとは逆に、長期の閉館に慣れてしまうことに弱体化への恐れを感じてしまう。

さらに困難な事態に立ち向かわなければならないのが、現地における復旧・修復ができない場合である。津波被害を受けたある施設では、現地建て替えでは、安全が保障できないことから、敷地を移して建設することが予定されている。国の補助金制度の原理では、現地における現状復帰が原則だが、高台移転など町そのものの骨格を変える必要が検討されている中では、文化施設を現地に留める根拠はない。しかし、根本的な移転ま

で含めた被害を受けたところほど国からの補助金受給額割合が減ってしまうという制度は、そうした当事者にとってみれば、情けがないものに映る。

釜石市の市民文化祭は、2011年は公民館で、2012年は市総合体育館で行われ、昭和52年から続いている12月の第九演奏会は高校体育館で催されている。もちろん、体育館の場合、体育館需要が当然あるので棲み分け／優先順位が難しくなる。こうして、自分たちの町の文化を懸命に継続させている活動があるものの、文化活動の拠り所が失われてしまい、数年もの長期にわたって休館状態が続くと、そもそも文化施設の必要性に疑問を持つ人が多くなるのではないかと、定期利用者が離れて行ってしまうのではないかとこの恐れが出てくる。

それらの町では、文化施設よりも火急の問題が山積みし、閉鎖状態が続く文化施設の存在感は日々遠くなっていくようで大きな心配がある。多くの市民の関心は、より重要度の高い復旧課題にあり、代替施設で文化活動が賄えているという認識に納まってしまえば、文化施設の意義は後退してしまう。とはいえ、ガバチョ・プロジェクトなど被災後に誕生したNPOも少なくない。既存の活動に加えて、新たに芽生えた活動の意識・連携に期待したい。



Fig.8 1階部分が全て冠水、清掃されているが閉館される施設

4. 工事終了後にも発覚する被害

一旦、復旧改修工事が終わってしまった施設では、また別な問題もある。工事を終えて再開し、初めて分かることもある。しかし、再開後となると、それが震災によるものなのかを単なる老朽化によるものなのか証明するのが容易でないことは想像がつく。そうした事態に対して予算が付きにくいという声も聞く。例えば、地中に埋まった排水管が一部ずれてしまっていたとする。完全再開前は、そこに通じている排水の利用が少なかったために、目立ったこともなく済んでいたが、利用が元に戻ると、その部分が障害となっていることが排水の逆流によって初めて発見される。しかし、完全再開後になってしまえば、復旧改修工事は既に完了しているという行政側の判断が働いてしまう。その建物復旧に関する国からの補助金申請が終わってしまっている時点で、追加申請が認められる可能性は殆どないに等しい。

と、素直な人はそう考えがちである。しかし、そうした厳格な査定がある一方で、復興予算の「流用」と指摘されるような使い方があることを聞くと、実態を知る由もない者にとっては、我が国の文化が置かれている状況を目の当たりに見せつけられているようで悲しい。平成25年度予算編成の基本方針（平成25年1月24日、閣議決定）を見てみると、「予算の重点化についての基本的な考え方」として（1）復興・防災対策をあげ、以下のように書かれている。

防災対策については、老朽化対策など社会の重要インフラ防御、学校耐震化など事前防災・減災対策のための国土強靱化、災害等への対応体制の強化などについて、ハード、ソフトの両面につき抜本的に強化し国民の不安を払拭する。なお、復興関連予算は、「流用」等の批判を招くことがないよう、使途の厳格化を行い、被災地の復旧・復興に直接資するものを基本とする。

「基本とする」ということは、そうでない場合もあるということだが、正直者が苦勞しない運用であって欲しいと期待するばかりである。先に述べた津波被害を受けた施設への補助、とりわけ現地復旧の意味がない施設に対する補助に対しては、優先的に手厚い支援があってよいのではないかと思う。

生活環境の復旧も遅れがちな町においては、限られた自治体予算をどのように振り向けていくのか本当に難しい議論だと想像する。そんな中で、文化活動・施設の復興も私たちの日常にとっては、精神的にも肉体的にも欠かせない栄養源であることを粘り強く説明し、理解してもらう必要がある。

もちろんそうした事態にならないことが一番で、そのためにも、施設の根本的な見直しが必要である。防災や危機管理等といった技術的側面ばかりでなく、そもそも文化施設における活動・運営はどうあるべきなのか、機能・内容にはどのようなことが求められるのか、現状理解を基礎としながらも、それ超えて町と文化の関係、人と活動の関係、既存施設と新施設との関係等から文化施設の在り方を巡る根本的な議論が必要とされているのだと考える。

そうした議論と共に、地震など災害時における施設の点検項目を普段から作成し、自ら定期的にそれを実行して行くことが大切であると思う。施設を構成する部位は非常に多様性に富んでおり、それぞれ専門的知識が必要とされる。1人の技術者がそれら全分野をカバーすることは容易でないし、できるものではないのだろうが、委託任せにせず自ら全体を把握して行く市政と努力が望まれる。そもそもあまり大きくない施設では、そうした専門職の存在も薄く、専門技術者にあってはとかく専門領域だけに限定しがちだが、活動・利用者と共にあるという意識を持っているかどうか災害時に現れてくると言えるかもしれない。

5. 指定管理者の苦悩と自治体公務員の苦悩

各地の施設を訪れて話を伺っていて考えさせられたことの1つに、指定管理者等委託事業者との協定関係がある。移管期間中に被災したある施設では、4月からの指定管理に向け3月から引き継ぎ業務を行っていたところで震災に見舞われている。施設細部までまだよく把握していない段階で避難者を受け入れなければならない状況に陥ったわけである。引き継ぎするどころか、24時間体制での交代勤務となり、本来のホール管理業務とは異なる仕事を切り盛りしなけりならなかった。緊急事態であったが、事前に交わした覚書通り3月分は無償対応としたが、4月以降は契約の危機管理条項に則り避難所業務の手伝いを担ったという。そして、避難所対応期間については、通常の業務内容を想定していた契約内容変更を行うことで対応していた。避難所になっていた時から、被害箇所・内容を調査する必要がある、できる範囲から始めたというが、客席天井部分や屋根材、壁材などの一部落下などについては、目視以上の正確な調査は、専門とする会社に依頼するしかなかった。そうした中で、行政所轄部局及び営繕・設計事務所・施工会社の連絡・調整役としての役割を果たすことが施設の現場にいるものに期待されていることだと痛感したという。

一方、他の施設ではまったく逆とも言える出来事も聞いた。避難所指定を受けていなかったにもかかわらず、同様に多くの避難者が自然に集まって来てしまったという点や緊急でその対応を図らざるを得なかったという事は共通だった。しかし、思わぬ事態は避難所対応が解かれた後にやってきた。スタッフが一致協力して、避難者への対応を図り、ようやく避難所でなくなった時に、委託契約を結んでいる事業者から、超過勤務手当の支払いを請求されたとい事例である。困難な時期だからこそ全員が一丸となってという気持ちだったので、請求を受けた側にとっては大きなショックだった。ただ、そうしたケースもあり得ることは念頭に入れておかなければならないということである。

別の課題も見つかった。利用料金制をとっている施設では、避難所となったり、建物被害を受けて休館してしまったりすると、事業収入が全く見込めなくなる。事業が行えないことは、行政から委託された任務を果たせないことを意味する。そうした期間が長期になれば、契約内容の変更、それに伴う契約金の減額、更には契約解除という事態も想定しなければならない。そうなれば、職員の解雇、廃業などといった最悪の事態、生活に関わる重大問題にもつながる。

行政に関わる人たちにも苦悩がある。指定管理制度が普及したせいで、文化施設管理運営に何らかの形で関与する行政側の人間がめっきり減ってしまったことである。つまり、文化関係の担当者がいない、いるのは指定管理に関する仕事しかしていないという状況への危機感である。そうした仕事しかしていなければ、他により急を要することがあればそちらにということになってしまう。特に被災当時は、自分が担当する施設・活動にも行けず、避難者・救急対応に追われることになる。そんな風にして、文化関係の担当者が直接的な復興関係業務に回され、結果的に震災前13人だったのに今や半分以下の6人に減員となっているという自治体もあることを知った。

しかし、逆境だからこそ文化に期待されているところもある。被災後、活動の場は限られてしまったが、そ

れでも新たに文化NPOが数多く被災地から生まれていることには期待が持てる。震災前には鑑賞型が多かったところでも、被災を通じて次第に参加型やアウトリーチ型の事業、あるいは行政組織の垣根を越えた催しの組み立て多くなってきたという。生活と共にある文化活動の意義を浸透して行くためにも、活動と人を結び付けるコーディネーターの役割は大きい。それを実感しているのは、他でもない現場と現場に近い文化行政担当者たちなのである。地方にあっても文化活動の核になっている人や施設は必ずあり、そうした人・施設が中心となって周辺地域におけるコーディネーター育成や連携の芽を育てて行く必要があるだろう。そんな基盤作りの後押しができたと思う。

長期的に休館せざるを得なかった施設では、特に子どもの体験事業を積極的に実施したところがある。福島県においては、子どもたちが外遊びもできない状況に追いやられていることの問題は極めて大きい。福島第1原発から60km離れた郡山市の屋内遊び場で走り回り、砂遊びに興じる親子の姿を見るにつけ、これを何年続けるといのだろうかという重い衝撃に言葉がない。

そんな状況下で、しかも自ら大きく被災しながら、地域の子どものために96か所でアウトリーチ活動を実施してきた組織もある（福島県文化振興財団 <http://www.culture.fks.ed.jp/jidai/enmoku.pdf>）。

施設内の自発的の事業はできないし、活動は外からの補助金頼みにならざるを得ない。でも国の補助金は事業後にもらえるもので時差が出てきてしまう。経済的体力がない小さな自治体では到底無理な話である。大きな自治体にとっても、補助金入金に対応が遅ければ自治体運営は苦しくなるだけである。福島のように、震災被害と共に原発から引き起こされる長期的な問題に対応せざるを得ないところでは、より継続的で融通性のある文化活動支援の仕組みが求められる。



Fig.9 PEP Kids Koriyama(小児科医菊池信太郎の呼び掛けに地元スーパーと市が協力・協調して開設された屋内遊び場)

6. 元に戻すより前に進もう

縮小する社会において、施設計画を考えることはサービスとコストを考えることと同じである。復興という大きなプロセスの中で、公共サービス、公共建築の維持管理コストの負担がどの程度の重みを持つてくるのか考えるのも同じである。高齢化、低成長という社会の現実はあるなしであり、自治体であろうが株式会社であろうが、避けて通れない問題である。各自治体は、そうした視点から自らが抱える公共施設と公共サービスをどのようにフィットさせていくのか悩んでいる。

高度成長期のように、次々施設を建てたり更新したりできるわけでないことはみんな知っている。将来的な財源を見通しながら、今あるものを長く使えるように改修する、時には廃棄する、そんな施設・サービスのマネジメントを自治体全体で、更には自治体間で計画することなしに、文化活動の将来もあり得ないことは理屈として誰でも分かる。で、それをどのように具体化するかである。

今のままで良いとも誰も考えていないのではないかとしたら、元に戻す復旧はダメなのではないか。中長期的展望に立てば、ホール客席規模、必要諸室の機能・大きさ等が今のままでいいとは思えない。もっとそれぞれの町に合った活動・規模・内容について考え直す時だろう。管理維持費が少なくなるような建築・設備性能の総合的向上は必須条件だろう。ところがどっこい、文化施設が置かれている状況はそんな甘いものではない。

過去のデータでも、1～2割程度しか計画的改修工事を行っていないことが分かっている。問題になってから修繕するといったその場しのぎの対策しか取ってきていないところがほとんどだという現実にどのように改善の方向を示すことができるのか、容易なことではない。予防検診・治療が保険対象とならず、発症後治療に重点が置かれている医療制度の仕組みと同じである。文化活動の成果が私たちのQOL (Quality of Life) や健康維持、コミュニティ意識などにどれほど貢献しているのか、医療費にもつながる問題であることをもっと根

拠を持った説明で示さなければならないということであろう。

しかし、その結末が今回の震災結果でもある。このままの状態であれば、東日本大震災と同規模の地震が来れば、再び同じような被害が繰り返されることは明らかである。しかも、旧耐震基準で建てられた都内マンションで、耐震改修済みが分譲で5.9%、賃貸で3.4%しかなく、耐震診断実施率が分譲17.1%、賃貸6.8%である（「マンション実態調査結果」2013年3月、東京都都市整備局住宅政策推進部マンション課）ことを知ると、大規模地震が首都圏を襲った場合の被害と混乱は、予想を超えた恐ろしいものとなると予測される。

今回調査でも、中長期修繕計画があるとしている施設は10.7%程度で、現在計画中（19.8%）と合わせても30%余りに過ぎない。しかし、現在計画中とする施設が増えているようで、それが今回の震災の影響であるのかも知れない。

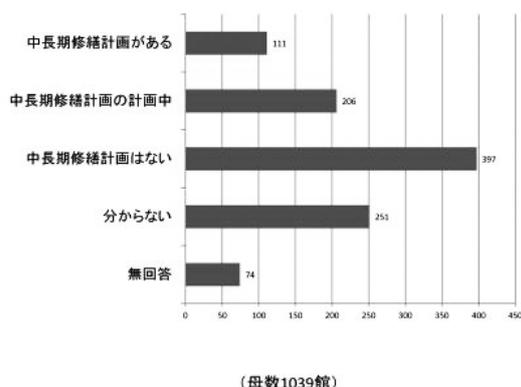


Fig.10 中長期修繕計画の有無 (JATET/公文協調査2012)

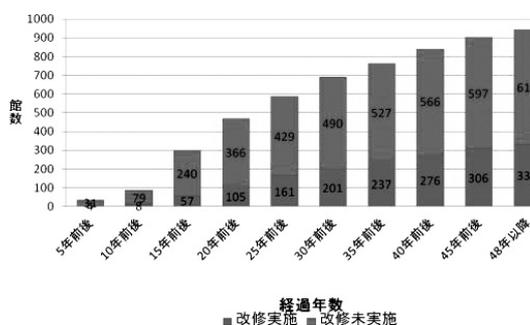


Fig.11 屋根改修時期 (科研・勝又調査2009-10)

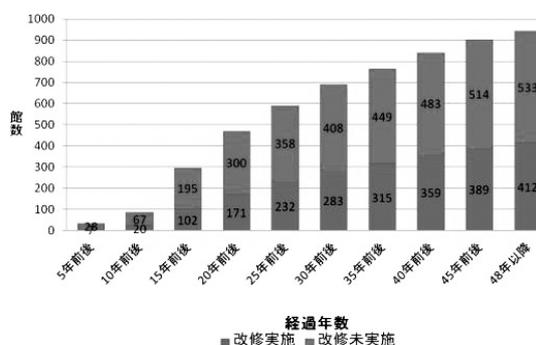


Fig.12 空調機更新時期 (科研・勝又調査2009-10)

ところで、復旧、元に戻すという意思・方向性が強過ぎると、同じような事態がいつまでも続くことにならないか気になる。自然災害によるものであれば、そこで学んだことが復旧過程において生かされることが必然である。ヨーロッパの復旧復興が復元を基本としているのは、戦争という人が起こした災害によるものであり、記憶の空間、生活を取り戻し継承するという側面から意味あるものとなる。それに対して、日本の3.11からの復旧復興は、まったく意味を異にする。生活を元に戻す、コミュニティを元に戻すのと建物・都市を元に戻すのでは意味が異なる。同じ土地に同じ構造の建物を作れば、同じような地震で同様の目に会うことは誰の眼にも明らかである。

しかし、補助金という制度のもとでは、原状復帰のみが対象となり、それ以外を対象外である。向上する部分は自己資金でということになる。

被害が少なかった施設でも別の問題がある。40年ほど経過した施設では、ボイラー等設備機械の交換や修繕計画の予算化を申請しても、震災復興関係の予算が優先され、現状で動いている施設までなかなか回ってこない。施設に対する従来からの認識が、あまり変化していないどころか、被災地域では、かえって難しくなって

いるのかもしれない。だからこそ、今後の税収減や施設維持コスト負担増を推計し、自らがさきがけとなって、規模縮小・内容変更を考える計画性が求められているようにも思える。

長い時間をかけて復旧改修を行うのであれば、あるいは今後の震災対策を含めて文化施設の在り方を考えるのであれば、根本に立ち返ってこれからの地域文化活動の在り方、地域との関わり方まで議論することから再出発できないものだろうか、という強い思いに駆られる。クラシックコンサートは数年に1度行われるかどうか、子供向けミュージカルはあっても演劇公演はあまりない、しかし学校吹奏楽活動は盛んだし、レベルも高い。市民の劇団、合唱、バレエなどの活動もある。そうした地方都市において今後、というよりも、既に現在の問題として、これを機に考え直すという機運を高めたい。

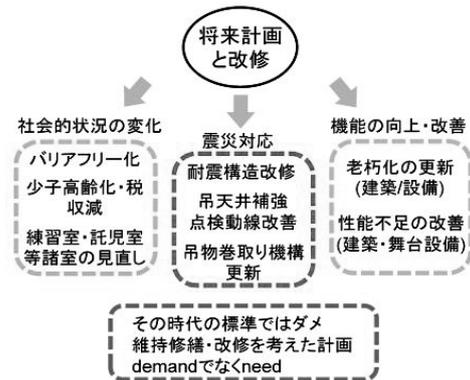


Fig.13 将来に向けた改修の考え方

文化芸術による復興推進コンソーシアム 平成24年度 調査研究報告書——参考資料②

文化芸術による復興推進に向けて

活動報告集

平成25年3月

[発行] 文化芸術による復興推進コンソーシアム

社団法人 全国公立文化施設協会

〒104-0061

東京都中央区銀座2丁目10-18

東京都中小企業会館4階

社団法人 全国公立文化施設協会内

TEL 03-6278-7820

FAX 03-6278-7821

ホームページ <http://bgfsc.jp>

[デザイン・印刷] (株)デジタルアート